

---

# 卒業旅行戦国記 一珠緒の恋一

原 一矢

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

卒業旅行戦国記 ー 珠緒の恋 ー

### 【Nコード】

N0147A

### 【作者名】

原 一矢

### 【あらすじ】

【全編】<sup>たまお</sup>五十嵐珠緒と<sup>みき</sup>仁科未来。二人の動車は事故のショックで、タイムスリップする。珠緒と未来は明智光秀と出会い細川親子と知り合う。京都で織田信長と対面した二人。その夜、謀反を起こしたのは、黒田官兵衛であった。珠緒と未来と光秀の3人の乗った車は炎の中、タイムスリップする。再開する珠緒と忠興。大阪の細川邸に身を寄せた、珠緒と未来。そして石田三成とであう。三成は忠興が関ヶ原の合戦に向かった留守のうちに、珠緒と未来を大阪城に連れて行くこうと、細川家に押し込む。負傷する珠緒。二人は三度目の

タイムスリップで現代へ。珠緒は自分が忠興の妻であったことを知る。

## 第一章 明智光秀「登場」

快晴の青空の下、高速道路を軽快に走る自動車があった。

「快調快調、天気もいいし、道も空いている」

ハンドルを握る未来は上機嫌だった。

「あんまりスピード出さないでよ」

私は助手席から忠告をした。

「ったくう。珠緒は心配症なんだから」

「用心に越したことは無いでしょ！」

私は真顔で言った。

「はいはい。でもね、せつかくの卒業旅行なんだから、雰囲気も大切よ。無理な運転はしませんから、どうぞご安心を！」

未来はわざとらしく丁寧に言った。

「しょうがないわねえ」

私は溜め息を吐いた。

今時、卒業旅行が女二人の国内自動車旅行なんて、最悪と思いつつ、免許が無い私は、助手席にノンビリ座っているだけならいと、安易に思ったのが波乱の始まりであった。

前方にタンクローリー車と小型バスが走っている。サイドミラーに後方から迫ってくる乗用車が映っていた。

ギューンツ。乗用車が私達を一気に追い抜いた。瞬く間に前方の車を追い越しにかかった。

「ああーっ！」

私達は同時に叫んだ。

タンクローリー車と小型バスの間を縫うように追い越しを掛けた車が、それぞれに接触し、タンクローリー車が横転しトンネル手前の管理塔に衝突して爆発した。

ドオオン！キキキツ、キイイーツ！

未来はブレーキを力いっぱい踏み込んだ。しかし、路面は流れ

出した油で未来の自動車はアイススケートのように滑って行く。

「止まれ、中古車ヤーツ！」

ギギツツと、未来はサイドブレーキを引いた。

「もう、ダメーツ！」

炎の中に飛び込む自動車、迫り来る熱気に、私は目を閉じて胸の十字架を握り締めた。

ドンドンツ、ドコドコガタガタ、ズザザーツ。

未来の自動車は、デコボコした地面に車体を跳ねさせ、砂利に滑って停止した。

「と、止まった……？」

私は、ゆっくりと目を開けた。

自動車は無事だった。しかし、辺りは白い砂埃が舞い上がり何も見えない。未来は、ハンドルに身を預けたまま気を失っていた。

「未来、未来。しっかりして！」

私は、未来を揺すって起こした。

「う、うん……」

「よ、よかったあ」

ホッとして再び辺りを見回した。

「こ、ここは……？」

自分の目を疑った。辺り一帯、草と木が生い茂る岡の上。

「確か……」。高速道路を走っていて、事故が起きて……。そうだ、炎の中に車ごと突入したはず……。

そう考えていると、未来が目覚めました。

「そつだ事故は。事故はどうしたのっ？」

未来はハンドルをぐつと握り締めたまま、辺りをキョロキョロと見回したが、私と同じ光景に変わりはなかった。

「ま、まあ、落ち着いて」

未来は、私の服の胸元を掴んで、

「大丈夫よ、わたしは冷静。ところで、一体何がどうなって、こん

なにになになつちゃつちゃつて、あれ、その、これが……」

「ちよと未来、落ち着きなさいってばつ。私にも全く検討がつかないんだから。まずは、現況分析が大切でしょ！」

私は怒鳴つて、クーラーボックスから冷えた缶ジュースを取り出し、未来に渡した。

未来は、缶を頬に当てて軽い深呼吸をすると、プルトップを開けて、ゆっくりと飲んだ。

「ふうふう。OK、もう大丈夫よ」

静かな声で未来が言った。

「よし、それじゃまず、人を探そう」

未来は車から降りた。

経過はともかく、景色はいいし空気は美味しい。未来は両手をいっぱい広げて、大自然を満喫した。

「ああ、いい空気！」

「これこれ……」

私も、車から降りていた。

今まで慌てていたクセに、なんて切り替えの早い女なんだと、

私は頭を抱えた。

「人を探すんでしょう？」

「そ、そうね」

私と未来は辺りを見回した。

道は整備は十分で無いものの、3メートル幅の道が東西にあつてくねっていた。車は道から外れ、山の緩やかな斜面に乗り上げた状態で停まっていた。

「あっ！」

未来の声に、私が振り向くと五十メートルほど離れた道の上に、一頭の馬が立っていた。

馬の背に人影が見えて、未来が歩き出した。

「ちよつと、すみません！」

未来が駆け寄ろうとした次の瞬間、馬が向きを変え、背の上の男が

姿を現した。

甲冑に身を包み、腰には刀を備えた男は、素早く弓を引き放った。

「未来、伏せなさい！」

私は、精一杯の大声で叫んだ。同時に未来は僅かに反応して、身を竦めた。男の放った矢は、弾んだ髪の毛を数本切り取って、地面に突き刺さった。

「な、なにこれ！」

未来は、馬の上の男を見た。

「未来、早く戻って。早くっ！」

「う、うん」

未来は、プールで溺れているような動きで手をバタつかせ、バランスを崩しながら車に向って走り出した。男の周り茂みが俄かに踊り出すと、さらに二頭の騎馬と数十人の雑兵が姿を現し、私達を追ってくる。

「珠緒おゝ、車に乗って！」

私は車に乗って、助手席側からエンジンキーに手を掛けた。

ウーンツ。エンジンが掛からない。

未来が運転席のドアを開け入ってきた。

「代って！」

ウーンツ。しかし、未来がやっても、エンジンが掛からなかった。兵達はグングンと近付いてくる。ふと見ると、サイドのレバーが「D」の位置になっている。レバーがドライブではエンジンはかからない。

「未来、これじゃないの？」

「はっ！」

未来は、レバーを「P」に切り替え、再びエンジンキーを廻した。

キュルルル、グオン。

今度は、簡単にエンジンが雄叫びを上げた。

未来は再びレバーを「D」に戻すと、アクセルを踏み込んだ。兵達が一斉に襲い掛かる。

ガリガリガリガリツ。車の後輪が空回りして、無数の砂利が弾けた。兵達は避けきれない。

拳大の石が頬や額に当たって、数人が倒れた。しかし、訓練された兵達はそれでも車に飛びついて、二人が車にしがみついた。

ブッブー！

スタートと同時に未来がクラクションを鳴らした。甲高い音にしがみついた兵がひるんだところで、車は蛇行し兵を二人まとめて振り落とした。

車は走り出し、徐々に兵達を引き離す。

「危なかったア〜」

私は息を吐いた。

「まだよ！」

未来はルームミラーを見ながらそう言った。

槍が引つ切り無しに飛んでくる。数本が車の後部に当たり、鈍い音がした。

「傷つけないでよおおお！」

未来は半分怒って、半分泣いていた。

「未来イ！」

私の目に、騎馬が三頭見えた。

「未来、逃げ切れる？」

「ダメ。道が悪すぎる」

「でも、条件は同じでしょ」

「馬の速さってどれくらいなの。この悪路じゃ、こっちは、時速五十キロが精一杯だよ」

「それじゃ追いつかれちゃうでしょ！」

「珠緒、後部座席に黄色い買い物袋が無い？」

私は、後部座席を覗き込んだ。運転席の後部シートの足元に、黄色いビニールの袋が転がっていた。

袋の結び目を解いて中身を取り出した。

「花火？」

「そう、それを投げて！」

未来は私にライターを渡した。

私は、ロケット花火やネズミ花火数本を無造作に取り出し、次々と投げた。

パパパンツ、パンパン、パパパ、パン！

白い煙と衝撃音で、驚いた馬が大きく前足を上げて暴れ出し、手を振り落とした。次々と馬に蹴られ、崖から数人が足を滑らせた。  
「やったね」

私達は互いに笑顔を見せる。

車を停めて、私達は車外に出た。

指揮官を失った兵達は、一瞬の出来事に慌てふためいている。

「まだ、やる気ッ！」

未来の怒声に、兵達は驚いて一目散に撤退していった。

「あゝ、もうクタクタ。一体何なのよ」

未来はヘナヘナとその場に腰を落す。

「あらら。未来、大丈夫？」

「ま、まあね。珠緒はいつも冷静ね」

「そんなことないよ、私も疲れたわ。さあて、これからどうするか考えなきゃ」

などと、のんびり言っている暇はなかった。

「ウオオオー！」

車の前方の茂みから、一斉に兵達が飛び出してきた。

「わあああ！」

「ちよ、ちよつとお！」

私達二人は、逃げる余裕がなかった。兵達は目の前まで迫っていた。

そして、私達を素通りすると、さっきまで私達を追っていた兵士たちを追って行った。

「な、なによ。あれは一体……」

そう言つて私は、再び車の進行方向に振り向いた。私は驚いた。目の前に長身で腰に太刀を備えた男が立っていた。

「もう、ダメ……」

男を見た途端、私は気を失つてしまった

私は、八帖の和室で目を覚ました。

「こ、ここは……?」

「珠緒。大丈夫?」

枕元に座っていた未来が、私に声を掛けた。

「あつ、未来。ここは、どこ?」

「解らない」

未来は首を横に振った。

「解らないつて言つたつて、ここまでどうやって来たのよ?」

「そ、それが駕籠に乗せられて来たんで、隙間から見える景色しか見えなくて、この場所のことは分からないのよ……」

未来は申し分けなさそうに言った。

「何も?」

「……」

「何か解るような事でもあるの?」

「……」

未来は、何か言いたそうではななさそうな表情をしている。

「未来!」

私は少タイラついで大声を出した。

「あ、あのね。信じてもらえないかもしれないけど、お城のような・

……」

「お城?」

「そ、そう。大阪城とか姫路城の……」

未来は自分の発言に全く自信がなかった。聞いている私も、自分の耳に自信がない。冗談にしては、センスが無さ過ぎる。

「未来。もう少し具体的に、解るように言って欲しい……」  
若干の沈黙の後、

「珠緒は私の言葉を、信じていないんでしょう？」

未来は小さく言った。

「あ、いいえ。そんなこと無いけど、お城なんて漠然と言われても解らないし……」

私は困惑していた。昼間のたった数十分の出来事なのに何も解らず、現在どこにいるのかも解らない。経過を知っているはずの未来の説明も理解出来ない。

部屋の外で人の気配がした。

「失礼する」

一人の男が襖を開けて入ってきた。

「お目覚めのような」

「あつ、あなたは？」

その男は、私が気を失う前に、目の前に立っていた男だった。

男は、微笑んで腰を下ろした。

「拙者は、明智十兵衛光秀と申す」

「……」

私は、未来を見た。未来は、何も知らない様子で首を横に振る。

私は、再び男を見た。

「あの……」

私は、困惑して次の言葉が見付からない。未来も同じ様子だった。

「はっはっはっは！」

光秀は笑った。

「御双方のおかげで、毛利軍の中核を叩き、敵陣に食い入る事が出来ました。応援、かたじけのうございます」

光秀はそう言って一礼した。

「いいえ、私達は別に……」

光秀は、柔らかな表情で私達を見つめる。

「お二人は、えー……」

「私は、五十嵐珠緒。こちらは仁科未来です」

「珠緒殿、未来殿」

「はい」

二人同時に返事をした。

「お二人は、何処より参られたのでござるか？」

「い、何処って……」

わたしは戸惑いながら、視線で未来に答えを求めた。

「えーつと……。覚えてないんです」

「覚えていない？」

「ええ、わたしたちが乗っていた船が嵐で難破して、気がついたらわたしと珠緒は浜にいて、お互いに記憶がハッキリしないのです」

未来は思いつきりバレバレの嘘を平然と解説する。

光秀は、変わらぬ柔らかい表情で、

「行く宛てはござるのか？」

「いいえ」

首を横に振って答える、未来。

「お二人さえよろしければ、しばらくわたしの屋敷に滞在されませぬか？」

光秀は、城にとどまる事を薦めた。

行き場の無い私達にとっては、願っても無い話である。二つ返事で、

「よろしく、御願います！」

未来は笑顔で言った。私も頭を下げた。

光秀は、

「快くお受け下さり安堵いたしました」

と、私達を気遣って言った。

「珠緒殿、未来殿。何かお望みの物や必要なものがございましたら、何なりと申されよ。城内の者にも申し付けておりますゆえ、我が家と思つて寛いで下されよ」

私は、光秀の決めの細かさに、

「い、いいえ。望みなんで……」

そう答えようとして、私のお腹がギュルルルと鳴った。赤面する私に、光秀は、

「これは、気が利かぬ事を。早速、食事の支度を整えます。まずは、お気遣いなく、ごゆるりとお過ごし下され」

そう言って部屋を出ていった。

「正直なお腹ね」

未来が笑う。

「ごっめ〜ん」

私は笑いながら答えた。

「しかし、未来、これは一体どういうことなの？」

わたしは真顔に戻って、未来に訪ねた。

「い、いや〜それがね、珠緒が気を失った後、半ば強制的にこの城に連れてこられただけで、何にも分からない……」

「明智十兵衛光秀。明智光秀よ！」

「う、うん……」

「担がれてると、思う？」

「い、いいえ。ここまで延々と時代村って感じの町並みだったけど、嘘っぱくないし……」

「OK。それじゃ、整理してみようよ」

高速道路から突然山道に着いた。

甲冑を纏った兵士に教われた。

時代劇撮影所みたいな町並み。

明智光秀……。

「これって戦国時代っ?！」

未来が声を上げた。

「そう、非現実的だけど認めざる得ない状況ね」

「まっいいじゃない、しばらくは慌てたってしょうがないし、しばらくは様子見ね」

未来は軽く答えた。

「あのねえ」

あまりに楽天的な未来に、わたしは呆れてしまった。

夕飯の膳が運ばれ、お腹が満たされると、私も少し落ち着いた。

電気が無いこの時代、就寝時間は早かった。私と未来は、布団を並べて寝ていた。

「未来………。未来、起きてる？」

「う、うん」

「やっぱ、このままじゃ、マズイでしょ」

「そうね。でも、何が原因なのか解らない限り、どうしようも無い」  
確かに未来の言う通りである。

「珠緒、心配したって、始まんないよ。とにかく、よく寝て体力貯えなくっちゃネ」

私の緊張した心を解すように言った。

「そ、そうね」

私は答えて、胸で十字を切って手を組んだ。

「珠緒。アンタまだキリスト教やっての？」

「そうよ。なぜ？」

「なぜって、お寺の娘がキリスト教ってんじゃ、色々と問題しよう。事実、親からキリスト教を辞めろって言われてるでしょ」

「まあね。でも、宗教の自由ってものがあるでしょ」

「そんなんでいいの？」

「勿論！」

私は自信満々に答えた。

「………」

「未来、単純に考えてよ。米屋だってパンを食べるし、電気屋だからって、家の設備がオール電化とは限らないわけよ」

私は力説した。

「あ、頭が痛くなってきた」

「早く寝たほうがいいわよ」

「そういう意味じゃ……」

「今日疲れたから、もう休みましょう」

私は、そう言って瞳を閉じた。

鶏の鳴く声がした。

枕元に置いていた腕時計を見る。

午前五時。

普段の生活では考えられない、起床時間に、私たちは目が覚めた。いや、はじめから眠っていなかったのかもしれない。

わたしは、ぐっすり寝ている未来を起こさないように部屋を出た。

屋敷の外へ出ると、透き通った風が身体の中を抜け、少しばかり疲れた体を軽くした。

美しく広がる庭園に心を和ませながら、

「うーん！」

わたしは大きく伸びをした。

「やっぱ、現実かあ」

わたしは、溜め息交じりで空を見上げた。

「お目覚めでござるか」

光秀が庭園の中央にある大きな池で、鯉に餌をあげながら、わたしに声を掛けてきた。

「あつ、光秀さん。おはようございます」

わたしは一礼して光秀のもとに歩み寄った。

光秀は、

「珠緒殿、その様子だと、よく眠れなかったようですね？」

前日と変わらぬ、優しい笑顔で言った。

「は、はい」

「枕が変わると眠れぬと言っが、この城を我が家と思って、気を使わずゆるりとされるがよいですよ」

「ありがとうございます」

わたしは笑顔で答えた。

「珠緒殿」

「はい」

「記憶をなくしたと言う話だが……」

「あつあれは、その……」

「いやいや、気にされるでない。人それぞれ事情はある。しかし、この動乱の世では、親兄弟に寝首をかけられることもあるゆえ、昼夜油断は出来ぬものじゃ。そうは言うても、この光秀には、珠緒殿、未来殿に戦乱の血の匂いは感じられなかった」

「……」

「あ、いや。少々前置きが長すぎましたな。要は話し相手になって欲しいのじゃ。差し支えない程度の話で良いのだが、如何かな？」

「はい。基本的には何でもいいですよ」

わたしは笑顔で答えた。

「未来殿は如何でござろうか？」

「ふふふつ。未来なら大丈夫ですよ。性格軽いから」

「性格が軽うござるか。これは、面白いですな」

光秀は楽しそうに笑った。

そして光秀は、残り僅かな鯉の餌を全て池に撒いた。

「珠緒殿。実は本日午後から友人が参ります。お二人も茶の会に同席下さるまいか？」

「はっ？」

「肩を張るような友人ではござらぬ。どうであろう」

「解りました。ただ、いくら友人でも光秀様のお客様でしたら、私達では役不足では……」

「旧友ゆえ、心配御無用にごさる」

「光秀さんが、そこまでおっしゃられるのでしたら……」

「よろしゅうござるか？」

「はい」

わたしの返事に、光秀は満面の笑みを浮かべた。

「忝けない。これで、本日の茶会は楽しいものになりそうじゃ」

「あ、あの〜、茶会って……」

「それでは、早速茶会の支度をしなくては。おっそうじゃ、すぐに朝餉の支度をさせますゆえ、部屋に戻っておまちください」

光秀は、そう言うか言わぬうちに、その場から立ち去ろうとした。

「あ、あの〜光秀さん……。あつ。行っちゃった。私達、茶道の経験なんてないのに……」

私は池のほとりで困惑の表情のまま、しばらく池の鯉を見て部屋に戻った。

部屋に戻ると、未来がいきなり飛びついてきた。

「珠緒〜っ!」

「み、未来。ど、どうしたのよ」

未来は半分涙目だった。

「目が覚めたら珠緒がいないんだもん。一人だけ現代に戻ったんじゃないかって思ったら、急に不安になっちゃって……」

「もう、未来らしくもない。だいたい、どうやってこの時代に来たかも解らないのに、帰る手段なんて、私に解る分けないじゃない」

と、私は未来に笑顔を見せた。

「そ、そうね……」

そう言っつて、やっと未来は落ち着いた。

昨夜は、楽天的に見えた未来だが、やはり心細かったらしい。

一晩開けて本音が出たという感じがした。それは決して恥ずかしい事ではなく、帰れる保証の無い旅になってしまった今、未来の心細さは当然のことのように思えた。

「未来、勝手に部屋を出てゴメン。ちょっと庭を散歩していたのよ」

「……」

「別に何も無いのよ。ちょっと、早く目が覚めたんでね」

「そ、そう……」

「未来って、昼間はテンション高いくせに、朝は血圧低くてからっきしね！」

「それは、言わないでよ」

未来は軽く頭を押さえ微笑んで言った。

「あつ、そうそう。光秀さんと会ってね。すぐに、朝食の支度をしてくるって」

「そう。ここの料理おいしいから、結構気に入ってるんだよね」

「それでこそ、未来！」

私が言つと、未来がしかめっ面をした。

そして、二人は大きな声で笑った。

一頻り笑つと、お互いの心にゆとりが生じた。

「さあて珠緒。これからどうする？」

「そうね。まずは、朝食。これから、いろんなことが起こる訳だし、最後にものをいうのは、やっぱり体力だしね！」

「珠緒って案外たくましいじゃない」

「それどういう意味よ」

私は笑った。

「この時代で生き残る精神力っていうのがありそう。もしこのまま、元の時代に戻れなかつたら、珠緒だけは強く生きてね」

「未来、そんなことを言わないの。必ず二人で元の時代に帰るの。」

2人でよ、いい！」

「うん」

未来は自分に言い聞かせるように深く返事をした。

「よろしい」

私は、笑顔で言つて、

「それでは、本日の予定を発表します！」

と、言つて立ち上がった。

「予定？」

「そう、どうするのって聞いたのは未来よ」

「え、ええ……。でも、予定なんてあるの？」

「もちろん。本日は、午後から城内において、光秀さんのご旧友を招いてのお茶会がございます。その席に、私こと五十嵐珠緒と仁科未来の両名が招かれております」

私はわざとらしく、丁寧に言った。

「あっそう………」

と、未来は答えたが、一拍於いて、

「ええっ！ダメ、それは絶対ダメ！」

「でもね………」

「OKしちゃったの？」

「この際、覚悟を決めなきゃ。どうせ異国の人なんだから、礼儀作法なんて関係ないじゃない。むしろ、花嫁修業に丁度いいかもよ」

「さすが珠緒さん、ご立派………」

未来は頭を垂れた。

「しかしねえ珠緒。その旧友って言うのが、織田信長だったらどうするのよ」

「さあ？」

「さあ……って、あんたってばもう！」

「織田信長だつて武将の子。大丈夫よ」

「珠緒って、そんなに楽天的だったけ？」

「どういう意味よ………」

わたしは笑顔で言った。

未来は怪訝な表情で、マジマジと私を見る。

「珠緒、あんた時間を超えたときに、頭をどっかにぶつけなかった？」

「し、失礼ねっ！」

## 第二章 細川忠興「登場」

初夏の陽射しが頂点を過ぎ下り始めていた。

光秀の右にわたしと未来は庭に敷かれた毛氈に並んでいた。そして、私達の正面に知的な中年の武将と端正な面持ちの青年の武将が、涼しい顔で着座していた。

光秀は姿勢を正し、

「さて、厳しい戦の中、このような茶会を催すのは不届きと騒ぎ立てる者もあるかも知れぬが、殺伐としたこのご時勢こそ、自分を見直し、心を落ち着かせる為に、時間にゆとりがあっても良いのではないかと思えます」

そう光秀が言うと、二人の武将は静かに一礼して、光秀の言葉に同意の念を表した。

「さりとて、礼儀作法に振り回されていても、つまらぬこと。この場に於いては、皆同じ友人として、楽しいひとときを過ごそうではございますまいか」

光秀は笑顔で言った。

そこで、二人の武将が、

「いもつともでござる」

と、言って再び一礼した。

頭を上げたとき、すでに二人とも元の涼し良い顔に戻っていた。

「さて、まずは自己紹介からですな」

中年の武将が言った。

「それでは、私から各々方をご紹介申し上げます」

光秀は珠緒と未来を武将達に紹介した。

「こちらの、方々は異国より参られた、五十嵐珠緒殿、仁科未来殿でござる。本日は、私のたつての頼みで、ご参加戴きました」

「よろしく、御願いします」

光秀の紹介により、私と未来は一礼した。

次いで、光秀が二人の武将を紹介した。

「こちらが、私の旧友の細川藤孝殿、隣が藤孝殿のご子息の忠興殿でございます」

「細川藤孝でございます。よろしく、お頼み申す」

「忠興でございます」

二人は順番に挨拶をした。

忠興が一礼して頭を上げたとき、私と目が合った。

わたしは思わず視線を外してしまった。忠興は「あっ」と言いそつになつて口を開けたが再び静かな表情に戻った。

私はその忠興を見て、ドキつとして肩をピクツと震わせた。

光秀は藤孝に、

「毛利軍との小競り合いは、藤孝殿もご存知でござろう」

静かに言った。

「聞くところによれば、ついに敵陣に食い込みなされたとか」

「はい、その口火を切ったのが、珠緒殿、未来殿でございます」

「なんと！」

「それはそれは鮮やかでござった。逃げると見せかけて敵の騎馬を誘い出し、十分引き付けておいて爆音にて攪乱。手綱の利かぬ暴れ馬に崖道も手伝つて、敵の指揮は乱れに乱れ、当軍勢は一気に敵陣に切り込めたのでございます」

「お見事！」

藤孝は持った扇子で自分の膝頭をポンツと叩いた。

「い、いいえ。そんな……」

わたしは返答に困ったが光秀は笑っていた。

「明日は京にて、四国中国の平定に向け信長様と軍議を行う事になつております」

「いよいよですな。信長殿は一気に責め立てまするのか？」

「はい、なにせ、もともとお気の短い御方。やると決めたからには、妥協はされませぬ」

「厳しい御方ですな」

「いやいや、和睦に応じさえすれば無益な殺生はされませぬ」  
「巷では、比叡山の焼き討ちなど、些か不満を唱える者も存在するようだが……」

「お気の短い御方ですので、牙を剥けば串刺しにされるのです」  
「そうでなければ、この世の頂点には立てぬのだろうか？」

「さあ、いかなるものでしょう……」

光秀は目を伏せた。

「せっかくの茶会で、わたくしも長話が過ぎましたかな。それでは、一服進ぜよう」

光秀は微笑んで膝の向きを変えると、支度を始めた。

抹茶を茶碗に落とすと、光秀の指は茶杓の柄をなでるように滑る。とても戦乱の世に生きる武将とは思えない手さばきに、私はうつとりと見とれていた。

クイクイツ。

未来が肘で私を突く。

「な、何よ！」

「しらばっくれて……」

意味深な表情で私を見る未来。

「何の事？」

「忠興さんって、珠緒のタイプでしょ？」

未来が言うのと、私の頬は紅く染まった。

未来が呆れた顔で、

「珠緒って、超々判りやすいわね！」

「な、なんだか、暑いよね……」

そう言うのが精一杯の私だった。

茶碗が藤孝の前に差し出された。

藤孝は、茶碗を胸元に運ぶと静かに三度廻して一口飲んだ。茶碗を胸元に戻し一度廻して床に置くと、忠興の前に滑らせた。

忠興は、一礼して茶碗を取った。

次の瞬間、私と忠興の目が合った。

ゴトツ。コロコロコロツ……。

茶碗は忠興の手から滑り落ち、私の前に転がってきた。

「これは、とんだご無礼を！」

忠興は、初めての失敗に、。

「大丈夫ですか？」

私はポケットからハンカチを取り出して、零れたお茶を拭き取った。

忠興は茶碗を取ると、光秀の前に差し出し、

「ご無礼の段、ご容赦下さいませ」

と、詫びた。

「いやいや、お気にめさるな。先程、申しましたように、楽しい一時を過ごせればそれでよいのです。お気遣い御無用でござるよ」

光秀は、やさしく言葉を返した。

クイクイツ。

再び未来の肘が、わたしを突く。

私は眉間にシワを寄せて未来を見た。

「な、なに？」

「忠興さんに、何か言ってあげなよ！」

未来が小声で言う。

「何で、私が？」

「しらばっくれちゃって」

「何も思っていないわよ」

私は否定したが、紅く染まった顔では、無駄な言葉になった。

光秀は次の茶の支度にかかっていた。

「皆さんはどのようなご趣味をお持ちなのですか？」

未来は、少し首を傾げて可愛く質問を投げ掛けた。

藤孝が、チラッと光秀を見る。

「この藤孝と光秀殿とは趣味が合っておって、碁や詠、骨董など多くの共通した趣味がござる。時には、投扇や蹴鞠もしたものだ、歳を重ねてくると蹴鞠は少々身体に堪えます。のう、光秀殿」

藤孝はそう言って笑った。

「これは心外。確かに私と藤孝殿は共通の趣味は多いのは事実でございませぬ、身体の衰えまで一緒にされては堪りませぬ」

光秀は悪戯小僧戯な表情で藤孝に言った。

「いやいや、光秀殿こそ軍師としての評価が高い分、近頃では城や戦場本陣にて指揮を取られ、めつきり運動不足になっておられるとのこと」

「これは参りました。藤孝殿、意地が悪うござるのう」

「悪くなつたのは、足腰だけでござる。心は琵琶湖の湖面のように輝いておりますぞ」

藤孝の流暢な言葉はとまらない。

「クスクスッ」

私と未来は、冷静なイメージの光秀が、タジタジになっているのを見て笑ってしまった。

「ごめんなさい」

と、私は慌てて繕った。

「いやいや、お気にめさるな。これがいいのですよ。これだから、藤孝殿との時間は楽しいのでござる」

光秀の言葉に、藤孝の存在がやすらぎのようなものを感じさせている印象が伺えた。

私が藤孝を見ると、彼は微笑んだ。

「珠緒殿、未来殿。はてさて、光秀殿は私の事をを過大に評価しているようだが、戯れ言を述べているだけで、これといって意味がないものばかりでござる。じゃが、このような戯れ言に意味があるとすれば……」

藤孝はそう言って軽く空を仰いだ。

「そうじゃのう、例えば、武士は刀を持っている。剣の道をどうのこうの述べたところで、所詮は人を傷付ける道具と誰もが解釈する。しかし、言葉はどうであろう。一言で、相手心を和ませることも出来れば、傷つける事も出来る。お解りかな？」

「は、はい」

私と未来は笑顔で返事をした。

戦国の世においては、領地や家督問題で親兄弟の間でも戦いがあつた。同盟を結ぶ為に、婚姻と称して隣国に姉妹や娘を人質に送ることが当然のように行われていた。光秀と藤孝は、そんな殺伐とした時代の中で、本当の人としてやさしさや楽しさを忘れないようにしているのだと、私は思った。

「なんだか、とっても素敵ですね！」

未来が、光秀と藤孝を交互に見て言った。

「未来殿、からかうのは止めて下され」

藤孝は恥ずかしそうに言った。

「ところで、光秀さんと藤孝さんでは、暮の勝負をしたらどちらがお強いんですか？」

未来が意味深げに聞いた。武将に対して、わざわざ「勝負」という言葉を使ったところに未来の意図があつたことに、私は気が付かなかつた。

「暮の勝負では、どちらがお強いんです？」

念を押すように聞く未来。

「勿論、わたくしでござる」

「私の方が強い」

光秀も藤孝も自分の方が強いと主張した。

「忠興さんも、暮をなさるんですか？」

未来は、忠興にも話を振った。

「は、はい……」

忠興の返事は中途半端な者だつた。

「なさるものにも、忠興はまだまだ基本も出来ぬド素人。勝負になりませぬわ！」

藤孝はそう言って大きく笑つた。

「藤孝殿。そのような言い方は、忠興殿にお気の毒でござる。忠興殿はいい筋をしておられますぞ」

光秀が言った。

「忠興さんがお得意な事は何ですか？」

未来は再び忠興に聞いた。

「そ、そうですね、得意と言うには大袈裟ですが、詠が好きです」

忠興は、控えめに言った。

「そうですね、忠興殿の句には我々でも一目置くところがござる」

「光秀殿、忠興が調子に乗りますので、あまり持ち上げられては困ります」

忠興は、光秀の言葉を否定はしなかったが、親としては一応謙遜しているようだった。

「忠興さんは、俳句を読むのがお得意なんですね。ヨカッタ」

未来は満面の笑みで言った。

私には未来の考えが解らない。

未来は、

「私は暮が好きなんで、是非、光秀さんと藤孝さんの勝負を見たいんですが、この珠緒ときたら暮に全く興味がないんですよ」

「ちよっと、未来何を言ってるの？」

「いいから、いいから」

私を躲す、未来。

「それですね。忠興さんに御願いがあんですけど……」

「何でしょう？」

「光秀さんと藤孝さんが暮の勝負をしている間、珠緒に詠を教えて欲しいんですよ」

「未来、勝手に……」

「いいですよね！」

未来は、私に会話をさせないで、忠興に念押しする。

「は、はい」

忠興は、勢いで承諾をしてしまった。

カッッ。カッッ。

静かな庭園に、光秀と藤孝の打つ碁石の音だけが響く。私と忠興は、池に架かる石橋の上を歩いていく。

二人とも、未来の意図的な構図に乗せられてしまった事を理解しているために、お互いを意識して会話の切っ掛けが掴めなかった。

「あ、あのう。未来が……すみません……」

と、私が切り出した。

「はい……」

とりあえず、返事をする忠興。

「未来が強引で、ご迷惑をかけてしまつて……」

「い、いいえ。私がこれまでに接してきた女性達は、控えめすぎて自身の意見を述べられようとはしません。自身の意見を述べられる女性は輝いている者です」

忠興は力強く言った。

「そうですね。未来が聞いたら喜びますよ。私なんか全然ダメですし……」

「そんなことは、ありません！」

「えっ？」

「あつ、いや、珠緒殿は未来殿よりは控えめではござるが、瞳の奥に真の心の強さのようなもを感じます」

忠興は、そう言いながら真子の瞳をジッと見た。私と忠興は、そのまましばらく見詰め合っていた。

カツッ。

碁石の音が響いて我に帰り、二人は互いに視線を外した。

「あ、ありがとう……」

私は素直に返事をした。

「た、珠緒殿」

「はい」

「光秀殿と質問が重なるかもしれませんが……」

「何でしょう？」

「お二人は……。珠緒殿はどこから参られたのですか？」

「どこ?どこからとは、非常に説明しにくいところです。しかし、私達は、遭難者で自分達の力では帰る事が出来ないのも事実です」

「いずれ、お迎えが参られるのか?」

少々不安気に問い掛ける、忠興。

私は左右に首を振った。

「迎えなどありません。今すぐにも、戻れるかもしれませんが、もう一生戻れない可能性もあります」

「.....」

聡明な忠興でも、私の言葉が理解できなかった。

「どうぞ説明したらいいのかな.....。例えば、普段は波の穏やかな浜辺があったとします」

「はい」

「仮に、台風があつて流木が勢いよく打ち上げられました。台風が過ぎ去ると元の穏やかな波に戻る為、打ち上げられた流木には波は一切届きません。この流木が再び海に戻る為には、同じような台風や強風で、流木に届くほどの大きな波が必要になります」

「つまり、流木が珠緒殿、海が珠緒殿のお国と言うわけですね」

「そうです。打ち上げられたのが、カメなら自力で海に帰ることも出来ますが、流木は自らの意思で海に戻れない.....」

「今すぐにも戻れるかもしれないし、永遠に戻れないかも.....」

「.....」

途中まで言つて、忠興は失言に気が付いた。

「珠緒殿。申し訳ござらん。無責任な発言をしてしまつて.....」

「.....」

忠興は、慌てて訂正したが言つてしまった事は仕方がない。私は自分では分かつてはいたが、この時代に来て間もない今、戻れない」という可能性を簡単に認めたくはなかった。

「い、いいえ。確かに忠興さんの言うとおりかもしれませんが。戻れる可能性ばかりを考えていてこのまま戻れなかったら、今の環境の中で生きていくことを真剣に検討しなければならぬでしょう」

「この忠興に、何かお力になれる事がございますか？」

忠興は、私の心境を察して気遣ってくれた。

私は、やわらかく微笑むと、ゆっくりと首を横に振った。

「忠興さん、ありがとう。ただ、自分達でもどういう経過で、ここにいるのか全く見当がつかないんです。ご助力を御願いしようにも、原因が解らない以上、御願いしたくても出来ないんです……」

早く帰りたい……」

私は最後に本音を呟いてしまった。

「……」

何も言えない忠興。

二人の間に、沈黙の時間が流れた。

「忠興さんっ！」

「は、はい」

忠興は慌てて返事をした。

「クスクス……」

「……」

「そんな深刻そうな顔をしないで下さい。私達の問題なんですから」

私は笑顔でそう言った。

「珠緒殿のお悩みは、私の悩み同然です」

「はっ？」

「あっ、その……。こうしてお近付きになった以上は、これも何かのご縁でございます。私は珠緒殿とのご縁を大切にしたいと思っております」

「忠興さんって、本当にいい人なんですね」

「そんなことはありませんよ。父にはいつも頼りないと言われております」

と、忠興は知りずばみのトーンで言った。

「それは、この時代が戦国の世であるからでしょう。忠興さんは戦はお好きですか？」

私は忠興の気持ちを聞いた。

「いいえ。出来れば戦などしたくはありません。私にとって戦は無駄なこと。しかし、何かを守る為に、戦う事を恐れはしない。護るものとは、愛する者、家族や細川家の名前、そして家来やその家族や領民たちです」

忠興の言葉に、私は深く頷いた。

「足利將軍家が権勢を振るっていた頃が穏やかな時代だったのかも知れませ……。今やその足利家の力が無きに等しい状態になり、足利家を担いだ信長様は大義名分をもって諸国を平定しようとしておられる。しかし、近隣諸国の反応は冷たく、織田傘下に入ろうとする国は著しく少ないので、各地で激戦しておるのでございます」

忠興は不安定な情勢を私に説明をした。

「細川家はどうかされるのですか？」

「細川家は、いや、我が父は御家を守る事を第一と考えております。それは、先程も触れましたが、細川家を護る事は、家臣やその家族も護る事なのです。信長様の元ならそれが出来ると信じています」

「信長さんって、どんな人なんですか？」

「とても聡明で、柔軟なお考えを持ち大胆に実行される御方です。私にとって、兄のような伯父のような存在なのです」

私達は庭園を周って、庭園を見渡せる屋敷の棟の近くに来ていた。

私は忠興に促され、広縁に腰掛けた。

カッツ、カッツ。

光秀と藤孝の打つ碁石の音が、リズムカルに続いている。

「珠緒殿。万に一つ。万に一つの話ですが、戻る事ができなければ行く宛てはございますか？」

「いいえ。私達は昨日はじめてこの地に来ました。そして、初めて逢った人が光秀さんなのです。行く宛てなどありません」

私はうつむいて返事をした。

「ならば……」

忠興は、何か言おうとして詰まった。

「はい？」

私は、忠興の顔を見て返事をした。

忠興はゴクンツと唾を飲んで、

「ならば、珠緒殿さえよろしければ、私の元に身を置かれませぬか？」

と、力強く言った。

「えっ！」

私は忠興の申し出に、自分の耳を疑った。

「勿論、未来殿も一緒にでござる」

「で、でも、そんな急に……。忠興さん、とても嬉しいお申し出、有り難う御座います。ただ、光秀さんにもご相談しなきゃいけませんし、藤孝さんのお許しも戴かないと……。」

私は嬉しかったが、戸惑いもあった。

「光秀殿でしたら快くご了承下さいますでしょう。父上には私から必ずお許しをいただきますのでご心配には及びません」

「……。」

私の心配は至る所にあつた。

元の時代に戻るかどうか？

再び別の時代に飛ばされるのではないのか？

そして、このまま、この戦国時代から戻れ無いとして、

光秀の元で暮らすのか？

他の武将の元で暮らすのか？

武将以外の人の元で暮らす、又は自力で生活をするのか？

得体の知れない者として、命を奪われてしまうのか……。

現在保護していただいている明智家には、とてもよくしてもらっていた。身元の知れない私達に、光秀を始め家臣や女中までもが、まるで光秀の大切な客と言わんばかりの対応を施してくれていた。

光秀と信長の主従の関係も悪くは無さそうだし、「本能寺の変」が起きそうな雰囲気でも無い。もし、近いうちに「本能寺の変」が起

きそうなら、出来る限り光秀を助けたいと私は思った。

歴史に介入してはいけない。歴史を変えてはいけない。この時代に残る事になれば、明らかに歴史に介入することになる。否、もう既に私と未来がこの時代に存在し、光秀や忠興らと接触したことが、歴史に介入したことになるに違いない。

私が歴史の一部なら、私にも歴史に存在するだけの権利があるはずだ。それが許されないのなら、他の時代に飛ばされても許されるはずが無い。存在が許される場所は、私と未来がいた元の時代だけのはず。

歴史を変えようとすれば無理な力が働き、元の時代に戻れるかもしれないと一瞬思った。

「珠緒殿、珠緒殿」

忠興の声に、私は我に帰った。

「如何なされた？」

「い、いいえ、何でもありません」

忠興の元にいれば、安全に過ごせる可能性が高い。しかし、光秀から離れると、時代の変化の中心から、大きく離れてしまう。残れば命を危険にさらす事にもなる。

「忠興さん、本当に有り難う御座います。初対面の私達にそこまで言ったださるなんて、どれだけ感謝しても感謝しきれません。ただ・

・・・」

「ただ？」

「ただ、今後のことについては、私一人では決め兼ねます。未来ともじっくり相談したいので、少々御時間を下さい」

私は忠興と視線を話さず、ハッキリと言った。

「わ、解りました。珠緒殿、未来殿ご自身で進むべき道を御決め下さい」

「ありがとうございます、解ってくれて感謝いたします」

忠興は、そう言って微笑んだ。

本当に、私達の選択できる道が存在するのかどうか、私は忠興

の言葉を噛み締めた。

今はまだ、忠興との深い絆を感じてはいなかった……。

### 第三章 織田信長「対面」

その日の夕刻、細川親子は屋敷を後にした。

私達は、この時代で二日目の夜を迎えた。前日と変わらぬ静かな夜、月明かりが美しく妖しく輝く夜だった。

夕飯は光秀と一緒にとり、しばらくして寢床についた。

「珠緒。やっと二人になったわね」

「うん……」

「どうだった？」

「うん……」

「うんって、どうだったのよ」

「うん……」

「た・ま・お！」

未来は声を上げた。

「あつ、ゴメン。何だったっけ？」

わたしは、昼間の忠興との会話、そしてその時に考えていた今後の行動の事で考えを巡らせていた。

「何だっけじゃないでしょ。折角、忠興さんとのツーショットをセッティングしてあげたのに、収穫無かったの？」

「収穫って……」

「どうなのよ？」

「その……。忠興さんの所に来ないかって言われたわ」

「やったじゃん！」

もう、未来はノリノリモードに入っていた。

「未来」

「何？」

「未来の意見を聞かせて欲しいの」

「そりゃもちろん、忠興さんに向かってGOGOよ。私に任せといて！」

未来はすっかり、愛のキューピット気分である。

「違う違う、もっと真面目な話」

「何よう〜」

未来は、つまらなそうに答えた。

「未来、私達はこの時代に飛ばされて来た。その事実を認識して、これからどうするかを決めたいの」

「どういうこと？」

「歴史には、私達がこの時代にいたという事実は存在しない。私達がこの時代の歴史を変えた場合どうなると思う？」

「変える？ 珠緒、歴史を変えるって、武将でもなく武器もない私達に、どうやって歴史を変えるのよ」

「いくら戦国時代と言っても、全てが武力によって決まるわけではないでしょ」

「う、うん……」

「例えば、本能寺の変。光秀さんが信長さんを奇襲しないようにすれば、歴史は変わるでしょう。私達が本能寺の変を阻止すれば、歴史に歪みが生じて、そのショックで戻れるかも知れないでしょ」

「なるほど、そういう考え方もあるわね。もう一つ手があるわよ」

「何？」

「珠緒が忠興さんと結婚するとか」

「バ、バカね。なに言ってるのよ！」

私は、布団から起きて、未来の突拍子もない発言に慌てて否定した。

「戦国時代の武将と現代人が結婚するのよ。歴史を左右する出来事になるでしょ」

「自分達が助かりたい為に、人の心を利用したくは無いわ」

「それって、忠興さんを本気で好きになったってことよね」

と、未来の突っ込み。

「そ、そんなんじゃ……」

「ハア、あんたって、ホント判りやすいわね」

「もう、いいつてば。えとえと……。そうそう、これからの行動について相談していたんでしょ」

私は話を元に戻した。

「そうだったわね」

「それで、未来の考えはどうなの？」

「珠緒の考えに賛成よ。この時代に存在するからには、とことん介入して歴史を変えましょう。そのショックで元の時代に戻るのなら結果オーライだしね」

「OK。これで基本方針は決まりね。さてと、まずは明日からをどうするかってことになるけど、未来に何か考えはある？」

「明日の事なら決まってるわよ」

と、あっさり答える、未来。

「決まってるって、どういうこと？」

「今日、珠緒が忠興さんと二人のとき、私は光秀さんと藤孝さんの暮の勝負で部屋にいたでしょ。その時の話で、光秀さんと一緒に明日京都に行くんだって」

「それって、OKしたわけ？」

「断る理由がないでしょ」

と、当然のように言う、未来。

「二人の行動を、勝手に決めないでよ」

私は、未来の安易判断を責めた。

「あのねえ。珠緒だって今日の御茶会、勝手に決めて来たじゃないのよ」

「あっ……」

私は未来に返す言葉が無かった。

「ほおら、珠緒だって人のこと言えないじゃ無い」

「それは、そうだけど……。未来には織田信長に逢う覚悟が  
できているのね」

「あっ……」

今度は、未来が言葉に詰まってしまった。

翌日、京へ向う軍列の中に異質な物体があった。それは勿論、未来の車である。

「もう随分、走ったと思うんだけど……。フアアア」

走っているというより、徐行している。

「未来、未来！」

私は、助手席から未来を肘で突つく。

「なあにいいー」

「その、アクビ。なんとかしなさいよ。列の前後の人がこつちを見  
てるわよ」

「だって、退屈なんだもん……」

「それは解るけど、子供じゃないんだから我慢しなさいよ」

「ハイハイ……。でもね、単調な運転ほど疲れるのよ」

そう言つて愚痴をこぼす、未来。

「解つた解つた。夜になったら、足腰マッサージするから、今は勘  
弁してよ」

「おおつ、愛い奴じゃ。よろしく頼むぞ」

未来は機嫌を直した。

しばらくすると、にぎやかな町並みが見えて来た。呉服屋、米  
屋、居酒屋とそっくりそのまま時代劇のセットが目の前に並んでい  
るのである。

「うっはーっ。貴重な光景よねえ」

未来はすっかり観光気分浸っていた。

「未来……」

「ん？」

「周りをよく見てごらんよ。目一杯注目浴びているわよ」

「そりゃあ、なんたって自動車よ。この時代は、せいぜい、大八車  
でしょ」

「ま、まあね」

私は、自動車と大八車を比較しても仕方が無いと思つたが、未

来が優越感に浸っているので放っておいた。

「しっかし、大八車みたいなもんじゃ、たいして物は運べないでしように。やっぱ私の勝ちね」

未来は何の勝負なのか、意味不明である。

「あのね、未来。この時代の搬送の大半は水路なのよ。各港に着いた荷物を小船に分けて川を登るのよ。日本の台所といわれる大阪が栄えたのは、運河がたくさんあったからなの」

「なんで大阪にだけ川が多いわけ？」

「正確には堀なの。物の流通をよくする為に、安井道頓という人が私財を投げ打って、水路を作ったらしい。それが道頓堀っていうのよ。それから、あちこちに水路が出来たそうよ」

「でも道路だって、結構広がったじゃない」

「本格的に道路整備を始めたのが織田信長らしい。徳川幕府になつてから、東海道などがキツチリと整備されて宿場を設けたんで、いくら道が整備されているといったって、現時点では近畿の一部だけだと思うよ」

「馬や牛を使えば、陸路だって十分使えるんじゃないの」

「勿論、山間部への輸送に関しては陸路も大切なんだけど、物流に対する考え方も柔軟で、その当時、商売をする上で地方の商人は寺社に多額の税金を払っていたんだけど、これを廃止して自由な貿易が出来るようになったってわけ。だから逆に、地方から商人がたくさん入り込んでくるよ」「」

「それって、楽市楽座ってやつでしょ？」

「そうそう」

私と未来は、そんな会話をしながら道中の退屈を紛わせていた。隊列は町外れに差し掛かり、大きな屋敷の塀に添った道でその足を停めた。

未来はブレーキを掛け、エンジンキーをオフにして、サイドブレーキを引いた。

「もう、クタクタ。早く足を伸ばしたいー！」

未来はそう言うと、首をグルツと廻した。

クタクタになって一息ついている未来をよそに、私は辺りを見回した。長い堀の先に門が見える。おそらく長い隊列の光秀が乗る大名駕籠の部分が門の前に来ているはずだ。

私は間近の兵士に声を掛ける事にした。

「ちよ、ちよつと、すみません」

私達の警護担当の武将が、振り向いた。

「何か御用で御座いますか？」

「ええ、ちよつと教えてほしいんですが、ここは一体……」

「お宿場で御座います」

「それでは、ここは信長さん所有の御屋敷ですか？」

「いいえ」

「こ、ここはお寺ですか？」

私は恐々聞いた。

「そうです。よく御解りになりましたね」

と、兵士は言った。

「も、もしかして……」

私は一瞬背中が凍り付いて、次の言葉が出なかった。未来は運転席で、うたた寝をしていた。

ー 念願寺 ー

寺の門には、そう書いてあった。

境内は広い庭になっており、さほど大きくない本殿が静かに建っていた。車は警護の侍の誘導により、本殿の右を周り社務所の裏手に駐車をする事になった。本殿脇の建物に入ると長い廊下を通って八帖の部屋に通された。

「あー疲れた！」

未来は畳の上に腰を下ろすなり、両足を投げ出して背伸びをしながら後ろにひっくり返った。

「未来イ！」

「いいじゃない。旅館に着いたら、まずこつして到着したという充実感を味わうんじゃない」

「旅館つて、ここはお寺でしょ」

私は突っ込みを入れた。

「珠緒はお寺に泊まったことないの？」

「お寺に泊まる？」

「あっそうか、珠緒はキリスト教徒だから、自宅以外のお寺に泊まった事無いのよね」

「そうだけど、家の寺で旅館のように人を泊めた事なんてないもん  
私は反論した。

「そりゃそうでしょ。珠緒ん家は町の中にあるでしょ。そんなところじゃ、まず宿泊客なんて無いわよね」  
「だから、何のこと？」

未来は、身体を起こした。

「実際は、地方等の観光地なんかでは結構多いのよ。有名な場所だと、四国八十八ヶ所や高野山のお寺なんかは、民宿並みの値段で、個室に大浴場に食事付きなんだよ」

「ホント？」

「ホントもホント。+ もある」

「何々？」

「お説教。これがまたいいのよ、何だか新鮮で……」

未来は得意気に、コクコクと首を縦に振って言った。

「あのねえ、未来。我が五十嵐家ではお説教は日課なの、変な事で喜ばないでよね」

私は、肩を落としてそう言った。

「は、ははっ、ははっ、ははっ……」

と、冷や汗の未来。

「まあ、でも、お寺でそんなことやっているって、全然知らなかったわ」

「でしょでしょ。珠緒って歴史に詳しくそうだから、そんなことは当

然のように知っていると思っていたわ」

「知らなかったわよ。ところで、未来はそんなマイナーな情報をどこから仕入れてくるわけ？」

「何言つてのよ。こんなの旅行代理店に行けば、当然のようにツアーのパンフレットが置いてあるわよ」

「……」

私は、未来とのギャップに言葉が無かった。

「珠緒殿、未来殿」

廊下から光秀の声がした。

「お支度は出来ましたか？」

「支度？」

私と未来は同時に声を出して、顔を見合わせた。

光秀を先頭に、私と未来、そして側近の武士が一名、屋敷の裏手に扉があり、そこをくぐって隣の建物に向って歩いていた。

光秀が片方の武士に声を掛けた。

「利光。羽柴殿が参られているそうだが、お主、何の用向きか聞いておらぬのか？」 「はつ。何でも、秀吉殿が攻めておられる高松城攻略の件で、信長様のご意見を聞きに参られているとか」

利光と呼ばれた男は、齒切れの良い口調で返事をした。

光秀に利光と呼ばれたこの男こそ、後の三代將軍徳川家光の乳母の春日の局の父、斎藤利光であった。

「高松の？」

光秀は聞き返した。

「はい……」

利光は、チラッと私達を見た。

「はははつ。利光、気にせずともよい。お二人の目を見よ、敵陣の忍には見えぬであろう。むしろ、娘のように感じているほどじゃ」

「はつ」

「それで、羽柴殿はどうなのじゃ」

「高松城を攻め倦んでいるようでございます」

「いくら難航しているとはいえ、互角以上の闘いをしておる戦場から、大将が一時的にせよ、離れる理由はあるまい」

光秀は、間接的に秀吉を責めるような言い方をした。

「光秀様。戦況はにらみ合いにて、実質はほとんど小競り合い程度のようにございます」

「いずれにせよ、そのような状態で戦場を離れるとは、ただ事では無さそうだな」

「おそらく、強行か、持久戦かという筋の話でしょう……」

利光は重苦しい声で言う。

「なるほど、一気に攻め込めぬこともないが、その際の犠牲は大きくなるな。羽柴殿が高松城を落とすことができれば、四国征伐の総大将は羽柴殿になるであろう。羽柴殿としても、兵の損失を最小限に収めたいところだな」

「はい。さらに高松城は四国征伐の拠点となりますれば、城そのものを無傷で手に入れたいところでございます。とにかく光秀様。羽柴殿には油断めさるな」

利光は、瞳をギラリと輝かせて言った。

私と未来は、光秀と利光の後を、黙ってついて歩いていった。

大きな無数の石畳の上を進むと、棟の角に大きく障子を開放した部屋があった。

十二帖二間続きの部屋の奥の更に奥に八帖の部屋があった。その八帖の部屋の中央に着座している男こそ、織田信長その人であった。

キリリと上がった眉に、切れ長の目の奥に秘めた鋭い眼光が、一瞬にして私の脳裏に焼き付いた。

光秀は、庭先で片ひざをついて頭を下げた。

「信長様……」

「おおつ、光秀か。もったいぶりおつて、待っておったぞ。堅苦し  
い挨拶は抜きじゃ、ホレ、早よう座敷に上がれ」

信長は、上機嫌で光秀に声を掛けた。

「はっはい。それでは、ご無礼致しまする……」

光秀は草履を脱ぐと、広縁から入って直ぐの十二帖の間に腰を下ろした。

「何をしておる、もそつと近こつ寄らぬか」

信長は右手に持った二分開きの扇子を、クイクイと手前に誘うように動かした。

光秀は、中腰にすり足で、もう一つ前の部屋へと進んで、再び腰を下ろした。光秀が腰を下ろした中央の十二帖間の脇には、人懐こそうな顔を下小柄で痩せた武将が非常にリラックスした表情で座っていた。

（秀吉だ！）

私はすぐに気が付いた。

「光秀よ。早速だが知恵を貸してくれ」

「はっ、何でございますでしょうか？」

「秀吉、礼のものを」

信長がそういうと、光秀の脇にいた秀吉が、半帖ほどの大きさの図面を広げた。

光秀は、その図面をサツと見た。

「これは？」

「高松城中心とした、地図で御座います」

秀吉が低い声で言った。

「光秀、秀吉が攻め倦んでいるそうじゃ。ちよいと、知恵を授けてくれぬか？」

信長は、扇子で地図上の高松城を指した。

「高松城攻略の期間は？」

「半月じゃ」

信長は光秀の質問に即答した。

「さてと……」

光秀は、黙ってと地図を見回した。

「光秀よ、高松城を無傷で手に入れたい」

信長は、扇子を指揮棒のように振って、光秀に言った。

「はい、今は梅雨でござります。周囲の山に関を設け、高松城を水瓶の中のに沈めます」

「なるほど。よい考えでございますな」

秀吉が相槌を打った。

「うむ……」

信長は地図を見ながら唸った。

「問題は、この谷に短期間に関を作る方法でございます。短期間に作業を終了しなければ、雨が降っても皿に水を注ぐようなもの。もたつけば、梅雨が終わってしまいます」

「時期的に田植えも済んでおりますゆえ、その辺の村から男手をかき集めましょう」

秀吉が、首をボリボリ掻きながら言った。

「できれば、手の空いているものは、女子供でも動員したいくらいじゃのう……」

信長は、そう言いながら答えが出なかった。

「……」

光秀は腕を組んで、考えを巡らせている。

「それでは、わたくしめが、村々から根刮ぎ人を集めます」

秀吉は得意満面に言った。

「サルは黙っておれ！」

信長は、秀吉のオデコに、パシッと扇子を落とすとした。

「ははっ！」

秀吉は、正座にままた二歩下がって、頭を畳に押し付けた。

「サル。サルサル、サルサル、サルッ！」

「はっ、ははっ！」

「少しは成長せぬかああ。現地で人を集めるといっても、敵陣じやぞ。強制的に人を集めて上手く高松城を攻略しても、民衆の気持ちがこの信長に向かなければ、四国討伐中にも一揆や内乱の心配をせねばならんだぞ」

「あつ、ではいかがすれば……」  
「それを思索しておるのじゃ！」

信長は頭を抱えた。

信長はスクツと立ち上がって、扇子をバタバタ鳴らしながらと慌ただしく室内を歩き回った。

そして、

「よしつ、酒盛りじゃ。酒を持ていいいい！」

と、大声で言った。

私は、信長が真剣に進んでいた軍議を放つたらかして、酒を飲むような粗暴な人なのかなと思った。しかし、

「ここにいる者全てが、酒を一杯ずつ飲め。それで何でもいい、知恵を出せ。お前も、お前も、お前も、お前も……」

信長は、視界に入る全ての人に声を掛ける。

「お前も、お前も、お前も……」

信長は広縁まで来て、庭に立っている私と未来を見つけて止まった。

「誰じゃ……」

「あつ、どうも……」

と、会釈する未来。

「こ、こんにちわ」

私は軽く会釈をした。

信長は広縁で中腰になって、右へ左へと首を傾げながら、私達を見た。

従事の者が信長の横に酒樽を置くと、信長は受け取った升で豪快に酒を掬って私の前に差し出した。それは、前日の茶会で見せた光秀とは、全く別のものだった。

「飲むか？」

信長の一言に、私は苦笑いで首を振った。

これを見て、周りのものが青ざめたのは言うまでもない。脇に居た斎藤利光が、

「代わりに、わたくしが……」

と、手を出そうとしたが、信長はその場に胡座を組んで一気に飲み干した。

「ぷふぁ！」

信長は、大きく息を吐くと、酒で濡れた口の周りを自分の袖で拭った。

「何か良い知恵はないか？」

そう言いながら、信長は笑った。

その言葉に、秀吉が慌てた。

「の、信長様、そのような得体の知れぬ者に……」

「黙れっ！」

そう言っつて、信長は酒をもう一掬いすると、今度は軽く一口飲んだ。

「のう、どうじゃ、何か知恵はあるか？」

信長は、ゆっくりと私と未来を見た。

未来はちよつと下がる。この場面、私に一任つて訳だ。私は覚悟を決めた。

「お金はありますか？」

わたしの、言葉にさらに辺りの空気は氷ついた。

「金……。金が欲しいのか？」

「いいえ」

わたしは、平然と答えた。

「ならば、何に使う？」

「買うんです」

「買う？」

「はい、土を買いいます」

「なんだと……？」

信長は、残った酒を飲み干して升を置いた。

「詳しく申してみよ」

例えば、そこに置かれた升一杯の土を、同じ量の米と交換します。

それが、お金でもいい。対価になるものさえあれば、皆は頑張って運ぶでしょう。少量でも運べば米やお金になるのですから、手の空いているものでしたら、女も子供も土を運ぶと思います」

わたしは、当然のように言った。

勿論、わたしが知っている歴史上の事実。必ず成功する事実なのだ。

「この信長に、土を買えと……」

信長は、私の心を覗き込むかのように視線を合せた。

「面白い！」

そう言って、信長は小膝叩いて微笑んだ。

「地図っ！」

信長が叫ぶと、秀吉が転げ落ちるような勢いで、側に寄って来た。

「はっ、お呼びで御座いますか？」

「土を買え」

「領地を金で買うのでございますか？」

真面目な顔で答える秀吉に、コケる信長。信長は秀吉のオデコを扇子で叩いた。

そして、扇子で地図の書く個所を指しながら秀吉に指示を始めた。

「よく聞け秀吉。この谷とこの谷に閘を設ける。それぞれの谷を埋める土は、この川の堤防部分から削り取れ」

「はい」

「その運搬の方法は、土一升につき米一升とせよ」

「土と米を交換するのでございますか？」

「そうじゃ、一升で駄目なら二升到、米で駄目なら金でもよい。それは、お前が現地にて決めるがよい。土さえ運べば老若男女の差別無しじゃ！」

「はい」

「よし、すぐに行け！」

「はい！」

秀吉は広縁を伝って去っていった。

立ち去る秀吉を追いかけて、庭園から去る人影があった。その男は、やや足が不自由だったのか、引きずるような歩き方が印象的だった。私は、なんとなくその男が気になった。男は、建物の陰に姿を消す前に振り向いて私達を見た。私を見たのか、信長を見たのか解らなかったが、まるで獲物を狙う狂犬のような眼差しが私の不安を掻き立てた。「心臓を噛み千切る手負いの狼」がそこにいた。「プハー！」

信長が再び酒を一気飲みをした。そこで私は我に帰った。

「そなた達の御陰で、四国が手中に収められるぞ。まあ、上がれ」

信長は手招きをしながら、奥の高座へと移った。

私と未来はゆっくりと座敷に入った。

「何をしておる。早よう、こつちへ来ぬか」

私と未来は、信長、光秀のいる奥の間に入った。

「光秀よ」

「はい」

「嬉しい土産、礼を言っぞ！」

「もつたいない」

光秀は一礼した。

「否、土産と無礼した、許してくれ」

「信長様、こちらが珠緒殿、お隣が未来殿と申されます」

荒々しい口調の信長とは正反対の光秀であった。

「なあ、珠緒殿」

「はい」

「女だてらに軍略の何たるかを知っているようだが、何処で習得したのじゃ」

信長の瞳に「興味津々」と書いてあるようだった。

「軍略と言うほど大層なことは学んでいませんが、私の故郷では男も女も関係無しで必要とすれば誰にでも学ぶ事が出来ます」

「な、なんだと?!」

信長は険しい顔をした。そして、

「近隣諸国にそのような、軍事国があったとは……」

光秀に視線を送りながら、私を見た。

「未来殿もそうか?」

「いいえ、私は興味ないですから」

「軍事国なんて、そんな。私達の故郷は平和な国ですよ」

「平和?」

信長は笑った。

「平和な国が、なぜ軍学を必要とする?」

「……」

「さあ、なぜ?!」

信長は厳しい目をした。

「自国が平和でも、近隣諸国から攻め込まれば、平和は保てません。平和を護る為に戦略知る人も必要なのかもしれない」

わたしは、真顔で言った。

「フツ。詭弁だな」

「詭弁?」

「そうだ。平和を護る為というのは詭弁だ。平和を護る為に知識を習得し、平和を護る為に武器を持つ。そして、平和を護る為に隣国を治める」

「何が言いたいんですか?」

「所詮、人間は闘うもの。闘いが好きな生き物なのだ。剣を競い合  
い、地位や権力を競い合う。競い合う事とは闘う事である」

「それはいい意味で、切磋琢磨して互いに競い合い成長すること  
でしょう」

「それが詭弁なのだ」

「その何処が詭弁なんですか?」

静かな信長に対して、私は少々ムキになっていた。

「珠緒殿、信長様に対して口が過ぎますぞ!」

光秀が堪り兼ねて口を挟んだ。未来も横から私の袖を引つ張つて止めに入った。

「よいよい」

信長は不機嫌どころか、むしろ上機嫌のような印象を受けた。

「珠緒殿、ならば聞こう。良い競いと悪い競いの境目は何処にある」

「それは………。人を傷付ける事です」

「傷つける……?」

「そうです。人を傷付けるような競い合いは何も生みません」

私は、キツパリと言った。

「わっはははっ!」

高笑いの信長。私は馬鹿にされたような気がして、明らさまにムツとした表情になった。

「いやいや、珠緒殿許されよ。この問答は難しいと思つてな」

「はい?」

「勉強が出来て政に長けていても、二人が同じ事に関われば確かに競い合いになる。負けた方はその地位に残れず、心が深く傷つく。

場合によつては自ら命を絶つ場合もあるぞ」

「………」

「それに、珠緒殿は既にわしの戦に介入しておるではないか」

「そ、それは………」

私は返答に困つて黙り込んでしまった。

「珠緒殿。この問答はここまでじゃ」

信長はそう言つて光秀を見た。

「光秀」

「は、はい」

「女人でありながら、この信長に対しての堂々たる振る舞い。気に入つたぞ。しばらく、預かりたい」

「はっ?」

「安ずるでない。何も取つて食いはせぬ。四方山話をしたいだけじゃ」

「ははっ！」  
光秀は頭を下げた。

## 第四章 本能寺炎上「謀反」

黄昏時。

明智光秀は毛利討伐の総攻撃の指令を受け、宿舎に戻った。今日中に光秀の拠点である龜山城に返り編隊を組む。私と未来は、この念願寺にしばらく滞在することになった。光秀としても、自身が戦に出て、私と未来を置いておく場所としては信長の元が一番安全だと判断したに違いなかった。

信長と私と未来。三人は同じ座敷に車座になっていた。

「身分など、統率を図る為の偶像に過ぎん。常に同じ目線から平等に物事を考えようとしても、組織というものが出来上がると上下関係が不可欠になる。また、戦となればなおさらじゃ。珠緒殿、未来殿。今宵は同じ人として屈託の無い話をしようではないか」

信長は徳利と猪口を三つづつ運ばせた。目の前には御膳も用意されていた。

「飲むも飲まぬ自由。酌の気遣い無用でいこうではないか！」

そう言いながら、信長は自分で酒を注いでクイツと一気に飲んだ。

私と未来は顔を見合わせたが、揃って信長に微笑んで見せた。

「単刀直入に聞くが……」

「はい」

二人で返事をした。

「御二人は、異国の漂流者と申されたが、この信長には引つかかるところがある」

信長は再び酒を飲んだ。

「珠緒殿を見ていると、この戦の先が見えているように感じられる」

信長はズバツと言いつつ切った。

恐ろしい男だと思った。さすがに、勇猛果敢な武将を使い、足軽の秀吉を採用しただけの眼力があると、私は思った。

「そ、そんな……」

私は返答に困った。

「未来殿は、この信長が天下を手中に治める事ができると御思いか？」

今度は未来に振った。

「そ、そりゃあ、出来ると思いますよ！」

未来は、何とかいい返事をしよう意識しすぎたのか上ずった声で返事をした。

「御二人は、いつまで居られるのじゃ」

信長は私に言った。

「皆さんに聞かれますが、いつまでと言われましても、私達も解らないんです」

「このまま返れぬ可能性もある訳じゃな」

「そういう事も考えられます」

私は、あっさりと答えた。

「今の言葉はとても重要なことと思うが、やけにあっさりと答えたな」

「別にあっさりって訳ではありませんが、既に光秀さんや忠興さんからも同じような質問をされておりますので、それなりの覚悟はしております」

「ほう。もう忠興と逢ったのか」

「ええ。とても誠実そうな方でした」

私は笑顔で答えた。

「珠緒。顔、緩んでるわよ」

未来が横から口を挟む。

「ほう、珠緒殿は忠興のような男が好きか？」

信長は言葉をオブラートに包むという気遣いは無かった。もっとも、この時代にオブラートなどない。私の顔色は瞬く間に赤信号になり、そのまま言葉も急停止。

「あつ、えつ、あつその、いいえ、そんな……」

「珠緒殿は、判りやすいのお・・・」

「この子つたら、人を騙せない性分なもんで」

未来が追い討ちを掛けて盛り上げる。

「・・・」

私は俯いたまま、言葉が見付からなかった。

「珠緒殿」

信長の声に、私は顔を上げた。

「この世は食うか、食われるか。婚姻を通じての両家の縁組みなどと奇麗事を言ってみてもも所詮は、弱国が強国へ人質出すだけの事。この信長とて例外ではない」

「嫌な時代・・・」

未来がポツリと言った。わたしは、黙って信長を見ていた。

「確かに、未来殿の言うとおりだな。細川家とは、もともと天皇への仲介役としての付き合いが目的でもあったが、忠興は弟のように思っており。忠興もわしを兄のように思っているはずじゃ」

信長は満足気に笑って酒を飲んだ。

「ただ、あいつの瞳は澄んでおる。人を謀ることができぬ誠実な奴じゃ。しかし、この乱世に於いては、実直で強かさに欠ける者には辛い時代よ。但し、この信長が天下を平定した暁には、あの曇りなき瞳が必ず必要になる。わしは忠興を利用したいのではない。大切にしたいのじゃ」

「はい」

私は素直に答えた。信長には粗暴で気分屋の印象があつた私だが、直接本人と話してみても、思慮深く未来を見据えた懐の深い人物と感じた。

未来が自分の前に置かれていた徳利を手に取った。

「信長さん、どうぞ」

未来は徳利を傾けた。

「気を使うな。手酌と申したではないか」

「そうですが、どうしても、お注ぎしたいんです」

「どうやら、未来も信長に対する考え方が変わったらしい。信長は照れながら未来にお酌をしてもらうと、威勢良く一気に飲み干した。そして、再び未来にお酌をしてもらうと杯を置いた。」

「さて、お二人にはしばらくの間、わしの元に居てもらおう。その後、情勢が安定すれば、何処なりと、好きな対座居場所を選ばれるがよい。」

「お気遣い、有り難う御座います。」

私と未来は深々と頭を下げた。

「どこがいい。光秀か、このわしか……。珠緒殿は忠興がよいか？」

「い、いいえ、私は別に……。」

赤面の私。

「解った。少々残念だが、細川家に身を置くなら時期を選ぶ必要もあるまい。各戦況が一段落したら、纏めてしまおうぞ。」

「はい？」

「祝言じゃ。勿論、仲人はこのわしじゃ！」

バタバタと風を送る信長の扇子が、上機嫌で舞う。

「ちょ、ちよつと……。」

「いじゃない。最高の結婚式になるわ！」

未来が勝手に盛り上げて、私は困ってしまった。

「珠緒殿も少しは飲んだらどうじゃ。」

「そうよ、人は酒で打ち解けるものよ。」

未来はすっかり信長を気に入っていた。最初は信長に薦められて遠慮がちに酒を一杯飲んだのに、今や手酌のハイペース、全く困ったものである。

「未来。あんまり飲んじゃダメよ。」

「どうして、いいじゃない？」

「いいけど、酔いつぶれても介抱しないわよ。」

「オッケーっすよ。」

何を言っても、暖簾に腕押し未来である。  
「わっはははっ！」

信長は、私達のちぐはぐな会話をツマミにグイグイと猪口を口に運んでいた。

「ところで……」

私には、お昼から気になっていたことがあった。

「何じゃ？」

気軽な信長。

「あ、秀吉さんと一緒におられた、男の方……。足がご不自由な……」

「おおっ、官兵衛のことか？」

「官兵衛さん？」

「黒田官兵衛じゃ。官兵衛がどうかしたのか？」

「何だか、私達のお気が召さないような様子だったので、少々気になってまして……」

私は、信長に部下を非難されているような印象を与えまいと、慎重に言葉を選んで聞いてみた。

「珠緒殿はいい眼をしておるな。秀吉を見よ。秀吉は人が良く短絡思考というか、どちらかといえば商才があるのではないかと思うほど、人間関係を作るのがうまい……」

信長の鋭い眼差しが、ギラツと光った。

「秀吉の側近には黒田官兵衛と、現在高松城攻略を最前線で指揮している竹中半兵衛がおる。知略や政略に秀でた二名じゃ。そして、行動隊長には蜂須賀小六を筆頭に命を惜しまぬ猛者ばかりじゃ」

「人望がある……と、言う事ですね」

わたしは肯定した。

「まあ。確かに人望はある。わし以上にな」

「そんなに、ご謙遜をおおお！」

酔っ払い未来が言う。

「未来、ちやちや入れないの！」

私の「教育的指導」で、未来に減点1。  
「それで？」

私は、身を乗り出した。  
「恐らく、秀吉の地位を今以上押し上げる為に、光秀や勝家の足元を掬うであろうな」

勝家とは、柴田勝家である。織田家家臣の重鎮で現在は越後から奥州へ進行していた。

「あの。そんな大切な事を、私達におっしゃっても差し支えないんですか？」

私は、恐る恐る聞いた。

「こう見えても、人を見る目はあるぞ」

「う、ごめんなさい」

「まあ、そうだな。四国で用心が必要なのは、山内ぐらいじゃ。後は一気に責められるでな。ここで少々兵が少なくても、四国攻略時分には新兵も加わって、秀吉の隊は大きく膨れ上がる」

「そこで反旗を翻すと？」

「うむ」

信長は、ゆっくりと頷いた。

「しかし、いつくら何でも、全織田軍を相手に、それはありえませんよー！」

私は、キツパリ言い切った。

「ああ、まあそうかも知れぬな」

私の言い切りに、信長は面食らっていた。

信長が面食らおうが、食らうまいが、私が知っている歴史が無い。二の真実であり、歴史にそれ以上もそれ以下も無い。

「しかしな、珠緒殿。地方征伐が進行すればするほど、この京は手薄になるし、万一の時に応援に駆けつけることも出来なくなる」

「それはそうかも知れませんが、そこまでご心配になる理由があるのですか？」

私が強気で言う。

「い、いや、わしの考えすぎかも知れぬな……」

天下統一を目指す武将らしからぬ素直さである。

「それにしても、この信長、女にこれほどまでにへこまされたのは初めてじゃー!」

「ホント、ホント、珠緒は御手打ちよ!」

未来がうつろな目で、指先をクリクリ廻しながら私を指して強調する。

「あつ、ゴ、ゴメンナサイ!」

私のこれまでの発言は、この時代に生き、立場をわきまえてい  
る者なら絶対にありえない暴走行為である。

「わはっはっはっ。いや、構わん、構わんぞ!」

信長は大きく笑った。

御満悦の信長に、今夜の長さを感じる私であった。

静寂の中、信長の豪快な笑い声が響き渡っていた。未来はバタ  
リと倒れたまま眠っている。この時代に来て緊張の連続で疲れた身  
体にアルコールが入れば無理も無い。

ドォーン、ドォーン!

鈍い衝撃音が辺りを包んだ。地響きがして、部屋中の柱や壁が  
軋み、私達の不安を駆り立てた。

「何事じゃあー!」

信長の表情が、テレビのチャンネルのように切り替わり、怒声  
が響いた。この声に眠っていた未来が飛び起きた。間もなく廊下を  
駆ける音がして、少年が部屋に入って来た。

「蘭丸!」

「信長様、囲まれております」

「何じゃと、一体何処のうつけ者か?!」

「それが、解りませぬ」

「旗印はどうした?」

「上がっておりますぬ」

「おのれ、闇討ちの上に正体も明かさぬとは卑怯極まりない。返り討ちにしてくれる」

「なりませぬ。戦力差が大きすぎます。ここは一先ずお逃げ下さりませ」

刀の柄を握り締めた信長を、蘭丸が制する。

「念願寺側から、火の手が上がったぞ！」

外で大きな声がした。

「火事。ど、どうしよう？」

未来が、私に言った。

「案ずるな、隣家の火事じゃ。退路を立つ為の手段の一つに過ぎぬ」  
信長が言った。

「そ、そう。よかった」

未来が言った。

「良くないわよ！」

私は、恐ろしい緊張感に見回れた。この後私の予想は的中する。

「そ、そうね。緊迫した状況に変わりはない……」

「そうことじゃないの！」

私の声は、震えていた。

「えっ？」

と、未来が返事をした継ぎの瞬間、外で再ドォーンと音がして凄まじい破壊音が響いた。大木が寺の門を破ったのである。同時に剣の絡み合う鈍い音と奇声や怒声が入り乱れる感じが、奥のこの部屋まで伝わって来た。

「本能寺にも火の手が上がったぞ！」

外の声に私と未来の耳が反応した。私の予感的中したのである。最初に着いたのが「念願寺」、そして、その隣に「本能寺」があったのだ。

「珠緒！」

未来が、半泣きで私を呼ぶ。

「解ってる、解ってるわよ。でも、まさか……」

光秀と出会って間も無いが、私が見た限り光秀が追い込まれているような状況でもないし、信長との雰囲気が悪い訳でもない。むしろ、信長と光秀の人間関係は良好であった。だからこそ、私と未来は安心して滞在できる予測も立てているのだ。

「許さんぞおお！」

信長の怒りは法典に達している。

「信長様。御願いでござりまする。ここは一旦、退いて下さりませ」

「蘭丸。この信長に逃げると申すのか！」

「天下統一に比べれば、些細な事とお思い下さい。大事の前の小事とお思い堪えて下さりませ」

蘭丸は必死に説得する。

バタバタバタツ。

二人の武士が部屋に飛び込んで来た。

「キヤーツ！」

未来の悲鳴。

「ご安心召され！」

部屋に入って来たのは、明智光秀とその側近の斎藤利光である。未来が私の後ろに隠れた。

次の瞬間、光秀が刀を抜いた。閃光が走るような剣裁き。私と未来の心臓が凍った。

ズサツ！

光秀の振るった刀は襖の陰にいた敵兵を、その襖ごとを切り捨てた。

「信長様、お怪我は！」

光秀の口から出た言葉は意外なものだった。

「おおつ、光秀。一体どうということじゃ」

「謀反でございます！」

答えたのは光秀だった。

歴史が違う！

私の頭の中はそれだけで、一体何がなんだか理解をしようにも

状況すら分析できない状態であった。

もちろん、未来の頭の中はパニック状態。目も口も開けたまま、  
「あっあっあっ……」

と、詰まるばかり。

光秀が、刀をスツと引いて、身体の陰に隠すと信長の前で片ひざをついた。

「官兵衛が謀反でございします」

「官兵衛だとおおお？」

信長は両手を握り締めて怒りを顕わにした。

「はい、間違いございません！」

「おのれ官兵衛め。秀吉の差し金かああ？」

「それは、解りませぬ。秀吉殿は、当の昔出立し、一旦姫路城に入るはず……」

光秀の冷静で完結な返事は、普段とさほど変わりの無いように見えた。

キーンッ。

隣の部屋で、刀の交わり、甲高い音がした。

「殿、一刻の猶予もありません！」

利光がそう言いながら、敵の刀を跳ね上げて一刀両断に切り捨てた。

「さあ、お早く！」

蘭丸が信長に声を掛け、逃げ道へ誘導する姿勢を取った。

「この信長を、謀りおつてえ。許さんぞオオオ！」

信長は怒りを込めて、庭へ出る障子を真つ二つに切り去った。

ドカドカと渡り廊下を進む、信長一行。

信長を中心に、前方を森蘭丸、明智光秀。そして、私達は信長の後をついていた。殿は斎藤利光が勤め、追手に気を配る。

「首尾は？」

信長が、光秀に声を掛ける。

「念願寺に行きます」

「しかし、念願寺は火の手が上がっておるのじやろう？」

「はい。しかし、敵兵は本能寺に一気に攻め込みましたゆえ、念願寺側には敵兵はおりませぬ」

「解った。任せる！」

「御意！」

光秀は、力強く返事をした。

幸い、本能寺と念願寺の通路は無防備であった。本能寺の正面から来ているはずの黒田の兵達は、織田の精鋭達によって、その進行を進めるには無理があった。

「利光っ！」

光秀が低い声で、周囲に気を配りながら、殿の斎藤利光に声を掛ける。

「はいっ！」

利光が眼光をキラツとさせる。

「屋敷を出たら火を放て！」

「はいっ！」

利光の返事と同時に、森蘭丸を筆頭に、私達は次々と屋敷の裏庭に下りた。一行の足は止まらない。森蘭丸は念願寺へ続く木戸へ迷うことなく向っている。

「利光っ！」

「ははっ！」

斎藤利光は立ち止まり、一八〇度向き直した。胸元から手ぬぐいを出して丸めると火をつけ、屋敷に向かって投げた。

「あそこだ！」

屋敷の中から声がした。利光の投げた、火の着いた手ぬぐいが、障子越しに目に留まったのだ。

一気に障子が開けられると、5人の敵兵が現れた。

「むっ、斎藤利光っ！」

空かさず、利光が懐から一合徳利を三本取り出して、敵兵に投げた。敵兵は次々に徳利を叩き落とすと、中から液体が飛び散った。

ポワッ！

手ぬぐいの炎が、徳利から飛び散った油に引火して、一瞬にして辺り一面に炎が立ち上がった。

「ぬっ、さ、下がれ」

兵士たちは、屋敷内に逃げ込む。

利光が振り向いた。

「未来殿の戦法、拝借しましたぞ！」

そう言つて、利光がニカツと笑つた。どおうやら、斎藤利光は先日の花火をヒントにしたらしい。

「怯むなっ。進め！」

敵兵の将が、号令をかけると、斎藤利光は握りこぶし大の包みを懐から出し、炎に向つて投げた。包みが炎に包まれると、爆発し弾けた。包みの中身は火薬が詰まっていたのだ。まさに一面火の海になった。

「光秀様、ここは御任せをっ！」

利光は笑つていた。私達には理解できない笑顔だった。「武士道とは死ぬ事と見つけたり」の心境であろうか。織田信長、明智光秀を護る為に、この場を死守する覚悟の笑顔の様だった。

「頼むっ！」

光秀の言葉は、家臣への命令ではなかった。これまで、忠義を尽くしてくれた「同志」への労いと感謝の気持ちで籠っていた。

私達は、門を抜けると念願寺に入った。

信長が、振り向く。

「光秀っ！」

「はっ。境内の脇に馬が御座います。蘭丸殿っ」

「はい！」

短いやりとりに、武将としての意思の疎通を感じさせる。

信長と蘭丸は先を急いだ。

「珠緒殿、未来殿は馬に乗れまするか？」

「いいえ、私達は車で行きます」

「おおっ、そうされるがいい。場所は分かりますか？」  
「はい」

未来は、短く返事をした。

「光秀さん、斎藤さんは？」

わたしは、辿ってきた道を振り返りながら言った。

「利光を信じ、ご自分の事だけを考えられよ。自分が生き延びる事だけを考えるのです」

そういって、光秀は私の肩を叩いた。

「……………」

私は、何も答える事ができなかった。

「珠緒、行くわよ」

未来の冷静で緊張な言葉。

次の瞬間、

「光秀殿おおっ！」

遠くで蘭丸の叫び声があった。

光秀は、蘭丸の声に反応して、信長のもとへ走った。

「珠緒っ！」

未来は私を車に引っ張ろうとしたが、私は光秀の後について行った。

## 第五章 黒田官兵衛「策略」

大きく燃え上がる、本能寺と念願寺。

その炎の姿は、信長の激しい性格を表しているようであり、激動の人生を表しているようでもあった。火の粉が無数に散らばり、熱が肌を焼く。

その中を走る光秀。後を追いかける私。

念願寺の本殿から社務所の裏を抜けた所に馬が繋いであった。

「何だこれはああ?!」

社務所裏から飛び出した光秀が、そう言って足を止めた。私は光秀の声に気圧されて、膝がガクンと碎けた。私はそのまま砂利の上を這うように進み、社務所の建物の裏から僅かに顔を出した。

火炎の中に浮かび上がる三つの影は、紛れも無く織田信長、森蘭丸、そして明智光秀の後ろ姿だった。その三人は同じ方向を見ていた。否、周囲を警戒しながら、一点に睨みを効かせていた。

織田信長を包囲したズラリと並ぶ兵の数。その中心に、数人の衛兵に護られた黒田官兵衛が立っていた。

「官兵衛え〜っ!」

信長が唸った。信長が僅かに身体を動かすと、私の眼に信長の左腕に刺さった矢が映った。信長は太刀を抜くと、腕に刺さった矢を叩き切った。

光秀が、信長をかばうように前に立つ。

「黒田官兵衛。諸国統一には、信長様のお力は必須である、その基盤を整えんとするこの重要な時期に、何故の暴挙であるかあああ?」

光秀の言葉は、怒りで満ちていた。

「.....」

「答えよ、官兵衛っ!」

「暴挙とは笑止。この世は下克上である。天下を治めるのに何の遠

慮がいるものかつ！」

「ならば聞こう。黒田官兵衛、御主にこの動乱の世が治められるか。御主に従う武将が如何ほどおるのか申してみよ」

「答える必要はない！」

官兵衛はキツパリと言った。

光秀は、官兵衛を睨み付けた。

「黒田官兵衛。信長様に反旗を翻し、謀反者として信長軍を敵に廻す覚悟はあるのかああああ！」

「.....」

答えない、官兵衛。

業を煮やした信長が、光秀の前に出ようとした。

「信長様、危のう御座いますっ！」

「どけっ、光秀。この期に及んで逃げも隠れもせぬわっ！」

信長は太刀の柄で光秀を払うように前面へと身体を出した。

「官兵衛え〜！」

信長は、地鳴りのような重圧感のある声で吠えた。

「官兵衛っ。この騒ぎは、秀吉の差し金か。それとも、うぬの一存かつ？！」

「.....」

官兵衛は沈黙を保ったままだった。

「何を恐れる、官兵衛。このワシを追いつめたのなら、心配もあるまい」

そう言つて、信長は鋭い観光のまま笑った。

「官兵衛っ！」

光秀が怒鳴る。

バキバキと四方八方で、柱や梁が弾ける音がする。そして、所々で建物の一部が崩れ落ちる音がしていた。

官兵衛が、足を引き摺りながら二三歩前に出た。しわがれた声で話し出した。

「恐れとな。恐れもするわ、鬼が相手ではな.....」

「無礼者っ！」

光秀は、間髪入れずに吠える。

「待て、光秀」

「しかし、信長様……」

「よいつ！」

「ははっ、申し訳ありません」

光秀は、信長と短い言葉を交わすと控えた。

「官兵衛、思うところ申してみよっ！」

「わしは、羽柴秀吉の家臣、黒田官兵衛として、織田信長様に不満は御座りませぬ！」

官兵衛は、キツパリと言った。

「ならばこの騒ぎ、秀吉の指しがねかつ?!」

「そうでは、御座いませぬ。話は最後まで聞かれよ」

「……」

信長は、黙って官兵衛を見た。

「各方面に散らばる武将達は確かに強い。信長様の強い意志が、それぞれの武将の能力を引き出しているからこそ、織田軍の快進撃はできたことは認めましょうぞ」

「何が言いたいっ！」

「脅威は向うものがあるからこそ、力を発揮する。政権が安定すれば、脅威は不満となって跳ね返ることになる。信長様、あなたと家臣は、脅威によって結びついてはおりますが、信頼関係は御座いませぬ」

「無礼な、官兵衛。それ以上信長様を愚弄すると、この蘭丸が許さんぞっ！」

森蘭丸が刀を振りかざし、官兵衛に向かって走り出した。

「待て、蘭丸っ！」

信長の呼び止めが届かぬ前に、蘭丸の腹部を二本の槍が貫いた。

「あっ……」

蘭丸は、自分の腹部に突き刺さった槍を見て、信長に振り向き

微笑んだ。

そして、腹部刺さった一本を左手で掴んで刀を振り下ろして断ち切った。そして二本目に手を掛けた途端、蘭丸の膝が砕けた。

「蘭丸ウウウッ！」

信長の声が、蘭丸に最後の力を与えたかのように、再び立ち上がる。刀を振り上げ一歩進む。

ドスドスッ！

「うぐっ……」

再び、三本の槍を身体に突き立てられた、蘭丸は槍に押されることがまま、仰け反るように背中から倒れた。しかし次の瞬間、蘭丸が動いた。倒れたまま、官兵衛に向って脇差しを投げたのだ。

「何ッ！」

油断した官兵衛。脇差しは、官兵衛の腕を掠めた。

「は、はずしたか……」

そう言い残して、蘭丸は絶命した。

「何という執念だ、小姓と思って油断したわ」

官兵衛は、そう言って一歩引いた。

「蘭丸ウウウッ！」

絶叫する信長。

「これより、全力をもって、織田信長、明智光秀を仕留める」

官兵衛が軍配を前に返すと、十人の狙撃手が火縄銃を構えて前に出た。ジリジリつと後ずさりする、信長と光秀。

官兵衛の表情が変わった。

「放てえっ！」

バキユン、バキユン、バキユン……

一斉に放たれる銃。見を竦めた瞬間、黒い影が飛び出した。

「ウガッ！」

「利光っ！」

光秀が叫んだ。

「一応、間に合ったようですな」

利光は笑った。利光は右手に刀を持ち、大きく両腕を広げていた。

「お、お前……」

「光秀様、今のうちに早く信長様をお連れ下され！」

利光の声は太く、力強いものだった。信長と光秀の盾になった斎藤利光は、その身体に全ての銃弾を受けて、なおも立ち続けた。

「信長様、お早くっ！」

「うむっ。利光、大儀である」

信長は、光秀に返事をして、利光に声を掛けた。そして、その場を離れ来た道に戻ってきた。つまり、私の方に戻って走り出したのだ。

この時代の火縄銃は、一発撃つと玉込めに時間が掛かった。信長の戦法には、鉄砲隊を三班に分けて、連続して銃撃を行う戦法があったが、黒田官兵衛にとって斎藤利光の行動は計算外だった。

「斎藤利光っ！」

官兵衛が、吠える。利光は、上目遣いで官兵衛を睨んだ。

「利光殿。そなたも、ワシ同様、織田家重臣の参謀であれば、これが正義であることは理解できるであろう！」

「何をもって正義と言い切るのじゃ！」

利光が、厳しい目を官兵衛に向けたまま言った。

「兄を倒し、姉の嫁ぎ先を攻め、さらに比叡山を焼き討ちにされるなど、信長様の行いは正気の沙汰ではござらぬであろう」

「官兵衛殿。本能寺に押入り、比叡山同様火を放ち、これまで共に戦ってきた同胞をも殺めることが、御主の正義か?!」

「大儀をなす為に、僅かな犠牲はつきもの。利光殿とて、幾多の戦火を潜り抜けてきたはず。闘いの数だけ屍の山を見てきたであろう」  
「確かに。屍の数は桜の華ほど見てきたが、裏切りの実を食べた事など一度も無い！」

利光は、キツパリと言った。

「利光殿。貴殿とは、ゆつくりと酒を酌み交わしたいと思っておったのだが、どうやら嫌われたようだ」

「いやいや、よい酒友達になれたかも知れぬ……」

利光は、己の血が滲む胸をみた。そして、

「時間が来たようだ。機会が無くて、残念で……ござった……」

そう言っつて、利光はユラリと身体を緩ませると、バツタリ前に倒れた。

「逃がすなっ！」

黒田官兵衛の声は、その場を離れようとする、信長と光秀に向けられた。

「鉄砲隊は?!」

「間も無いです」

「もうよい、追えっ！」

官兵衛の号令に、一斉に兵が飛び出した。

投げられる槍はまるで、暴風雨の横風に流れる雨のように、信長と光秀を斜めから襲つた。

ザクリッ!

その内の一本が、信長の右足を割くように掠めて行った。信長は地面に刺さつたその矢に躓き転んだ。

「信長様！」

二三歩先まで進んだ光秀が戻る。

「立てまするか？」

光秀は、信長の脇を抱え起こした。

信長は立ち上がったものの、既に走れる状態では無かった。

「光秀」

「は、はい」

「世話になつたな」

信長は、薄い笑みを浮かべた。

「な、なにを?!」

「もうよい。もうよいのだ」

「何を弱気な。まだ、諦めてはいけませぬ」

「幕は自分で引くと決めておる。この身体に刃を突き立てられる屈辱は受けぬ」

信長は静かに言った。

「信長様……」

「光秀。この世は下克上じゃ。義理立てはいらぬ、己の好きにするがよい」

信長は、そう言い残して燃え盛る炎の中に飛び込んだ。炎は瞬間に信長の姿をかき消した。

「信長様……」

絶叫する、光秀。光秀は、振り向くとギンツと追手を睨み付けた。

「もはや思い残す事は何も無い。この光秀と共に死ぬ覚悟のある者は、どこからでもかかってまいれっ!」

光秀は、刀を中段に構える。静かに構える姿とは対照的に、光秀の表情は厳しかった。

怒りに燃える光秀の瞳には、辺りの炎が映って迫力を増し、敵兵の足を止めた。

後方から、再び、官兵衛が足を引き摺りながら現れた。

「光秀殿。このまま消えるには、惜しい武将じゃ。どうじゃ、秀吉様の下で、その敏腕ぶりを発揮しては如何かな」

「問答無用っ!」

光秀の表情は変わらない。

「ならばこの動乱。光秀殿お一人に謀反の罪を被っていたたく」

官兵衛は一瞬にして、武将の厳しい表情に変わった。

「な、なんだとおおおお!」

光秀の怒りは頂点に達した。これがあの温厚な光秀かと疑うほど、怒りで構えた刀を打ち震わせていた。刀を上段に構える光秀。

「覚悟しろ、官兵……」  
「ダメっつ！」

光秀が踏み出そうとして、私は堪えきれず思わず叫んでしまった。

光秀が振り向き、官兵衛をはじめ一斉に私に視線が集まる。

「珠緒殿。なぜここに？」

「光秀さん、もう止めて。あなたがここで死んで何になるの？」

「これが、武士道でござる」

「あなたが死んでも、信長さんは戻らないの」

「それでも、これが……」

光秀が途中まで言いかけて、官兵衛の号令が響いた。

「小娘に見られていたとは……。鉄砲隊前へ、あの小娘を打ち抜け！」

官兵衛の号令に、鉄砲隊が前に出る。一瞬のスキをくぐって、

光秀が私を庇って、大木の影に身を隠した。

「構わぬ、切り捨てよ！」

再び、官兵衛の声が辺りに響く。

その時、信長が飛び込んだ建物で、焼き尽くされて崩れた。

「の、信長様……」

光秀は、唇を噛んだ。それは、信長に対する光秀の無言の別れのようなもあつた。

そして光秀は、振り向く。

「珠緒殿。この光秀が命に代えても、そなたはお守りする」

力強い光秀の言葉に頷く、わたし。

しかし、既に逃げ場はない。次の瞬間、駆け寄ってきた一人の兵の一太刀を光秀が受け止めた。

「お前が、一人目かああ」

光秀の低い声に、周りの兵の足が、僅かに止まった。

チュインツッ！

光秀が、敵兵の刀を跳ね上げた。そしてそのまま、胴に向つた

太刀を振り抜いた。

「次は誰だ！」

吠える、光秀。

「何をしておる、光秀は一刀だ。一斉に掛かれ！」

官兵衛の号令が飛ぶ。

光秀を囲んだ兵達は、刀を構え直した。いくら光秀でも十本もある刀を受け止める事はできない。

「ダメーッ！」

わたしが、叫んだ。

ギョルルル、ズシヤズジャアアツ！

まさにそれは一瞬の出来事だった。

突然、木陰から岩のような大きな物体が飛び出し、光秀に襲い掛かるうとした兵達を、次々と跳ね飛ばした。

バーンツとドアが開いて、未来が慌てて出てきた。

「あーっ、轆いちゃった。人、轆いちゃった、どうしようっ！」

車の中から出てきた未来は、頭を抱えながらうろたえていた。

「未来、大丈夫よ。鎧を来ているんだから死にやしないわよ」

わたしはそう言って木の陰から立ち上がり飛び出すと、光秀の手を引いて、二人揃って未来の車の後部座席に飛び込んだ。

「早く、車を出してエエエエ！」

わたしの余裕の無い激しい口調。

未来は、わたしの顔を見て何回も頷くと、慌てて運転席に飛び込んだ。

未来のギアを運ぶ手が「R」に入る。アクセルを一気に踏み込んだ。

ギョルルル、ズシヤズジャ！

車はスリップの連続を繰り返しバックした。不安定な車体は下がりながら蛇行を繰り返し、一八〇度反転して一旦止まった。

「フーッ、フーッ、フーッ、……」

生きの荒い、未来。

「未来、早く逃げて！」

「あつ。は、はい」

未来はギアを「D」に切り替えると、再びアクセルを踏み込んだ。

炎と瓦礫に囲まれた狭い境内は、突っ切るにはあまりにも障害物が多すぎた。

私が後方を確認すると数人の追手が見える。

「未来。未来、急いで！」

「やってるわよ。無茶言わないで！」

「駄目、追いつかれるうううう！」

わたしは、余裕の無さを訴える。

「花火。デカイのがまだあつたでしょ！」

「花火、花火、花火、あつた！」

わたしは、後部座席から運転席の下に、数本の筒を見つけた。

「あつたはあつたけど、未来。これ打ち上げ花火でしょ。確かにデカイ……」

「珠緒。ぶっぱなしちゃって！」

「ぶ、ぶっぱなすつたって、危ないじゃない！」

「そんなこと、言ってる場合じゃ無いでしょ」

あつさりと、私の意見を否定する、未来。

「どうしたらよいのでござるか？」

光秀が、大きな打ち上げ花火を一本持って言った。

未来がバツクミラーをチラリと見る。

「筒を敵に向けて、反対側の導火線に火をつける簡単でしょ」

「解った」

光秀は窓から花火を出して、後方に向けた。

「珠緒殿、火を」

「は、はい」

私は、未来からライターを受け取ると、光秀の肩越しに手を伸ばし、導火線に点火した。

ジジジジジツ・・・。

プシュウウウ。プシュ、プシュ。シュルルルルツ。

パンツ。パパン、パンパンパンツ！

大きな破裂音で、色鮮やかに弾ける花火が、追手の足並みを乱した。慌てる前列の者に、後方から勢い余って、兵達がふつかり合い、次々と倒れていった。

「やったねっ！」

バックミラーを見て、未来は左手でガッツポーズを示した。

「ふう・・・。」

溜め息を吐いて、座席に腰を下ろす私。

光秀は、打ち終わって空になった花火の筒を、いろいろな方向から不思議そうに見ていた。

「珠緒、光秀さん、しっかり掴まっけていてね！」

そう言っつて、未来は一気にハンドルを左に切った。車体が傾き身体が大きく右に振れる。

「見えた！」

未来が、門を見付けた。

寺の門が、炎のトンネルとなって僅かに形を残している。

「一気にいくよ！」

ハンドルに力が入る、未来。

「お任せ致す」

「お願いっ！」

「よおーしっ！」

未来が、僅かに見える門の隙間に向って、アクセルを踏み込んだ。

グオオオオオン。

唸るエンジン、焼け落つ本堂、辺り一面、炎の海。

ザザツ。

門の手前で、数人の兵が飛び出し、私達の進路を塞いだ。

「ウソっ！」

未来が叫ぶ！

「未来殿、怯んではならんぞ！」

光秀が、後部から激を飛ばす。

兵達は、その場に立ちふさがり、車を回避するつもりはなさそうだった。

「もう、ダメーッ！」

未来は、大きくハンドルを左に切る。

ギヤリギヤリ、ギヤリギヤリッ！

車は大きなスピンを繰り返すと、庭先の小さな社の縁に弾かれた。

「キヤーッ！」

私と未来の叫びは、車ごと光秀を乗せたまま、本殿の火の中に飲み込まれた。

「珠緒殿、珠緒殿……」

「あ……も、もうちょっと、寝かせて……」

「珠緒殿……」

「もう、あと5分だけ……」

そこで、私は目覚めた。

大きく目を開くと、身体を起こした。

「珠緒殿」

「み、光秀さん、ここは、ここはどこ？」

私は、辺りを見回した。周囲は暗かった。正確には、月明かりによって、うつすらと景色は見えた。竹林の街道のようだった。

「こ、ここは……？」

「落ち着きなされ、一先ずはお怪我はござらぬか？」

「は、はい。大丈夫です。未来は？」

「ハロー！」

未来が運転席から振り返って、手を振った。

「未来……」

「珠緒。また、飛んだのかもしれない……」

未来の一言が大きな不安を抱かせた。

「飛んだって……。帰れたの？」

「解らない」

未来は首を横に振った。

「珠緒殿、未来殿。この状況を把握しておられるのか？」

「把握してるって言えば、しているし、してないって言えばしてないんだけど……」

そう言って未来は苦笑した。

「光秀さん、一応説明するから、寛大な気持ちで聞いて」

私は静かに言うと、光秀は静かに頷いた。

「光秀さん、信じられないかもしれないけれど、時を越えたかもしれないの」

「時を越える？」

「そう。例えば、昨日・今日・明日と、時の流れが3日あったとして、昨日から一気に明日になる」

「一日を越える？」

光秀は怪訝な顔をした。

「一日とは限らない。一年かもしれないし、百年かもしれない。私達にも解らないの」

「理解しがたいが、受け入れるしかないのか……」

光秀の言葉に、私は頷いた。

「光秀さん、珠緒が説明したとおり。状況は解っているけど、原理とか理由とかは、私達にも解らない。ハッキリしているのは、私達は約四百年ほどの未来から来たという事実」

「四百年?!」

光秀は、未来から私に視線を移した。

「時間の彼方から、やってこられたというのか？」

「そう。そして、今が何時なのか解らない……」

そこで、私は言葉に詰まった。

「とても、信じがたい」

光秀は、首を横に振った。

「……………」

わたしは、言葉を選ぼうとしたが、簡単に選べる文字が見当たらなかった。

「珠緒。わたしが説明する」

と、未来。

「いい、光秀さん。この車、牛馬を使わずに移動できる鉄の箱。これだけでも、光秀さんの常識を遥かに超えていると思うんだけど？」

「ちよつと未来、失礼よ」

私は、未来を注意した。

「いや……………いやいや、珠緒殿待たれよ。確かに未来殿の言う通り。世の中は広い。この国に異国の文化が入ってきて、まだ僅かな時間しか流れておらぬのに、異国からは驚き止まぬ品物の数々がやってくる。この状況に於いて、お二人のお話を信じて進む以外に道が無ければそうしよう」

聡明な光秀にも、想像を超える状況に於いては、判断材料が少なすぎていた。仮に私と未来の言葉を否定したとしても、黒田官兵衛と炎が取り巻く地獄の入り口のような環境から、時間を空けずに脱出出来た事実は認めなければならなかった。

そう考えると、聡明だからこそ、現状を受け入れる事が出来たのだと、私は思った。

「珠緒殿、未来殿。まずは、これからの行動をご説明いただけるかな？」

「そうね。とにかく人を探して、今が何年なのかを確認すること。全てはそれから」

未来は、光秀にそう言って、私を見た。

私は、3回ほど小刻みに頷いた。

光秀は、腕を組んで目を閉じた。そして、

「闇夜に動くのは、危険だ。一先ず、夜明けを待って行動を起こし

ましよう。お二人とも一眠りされよ。私が辺りを見張りますゆえ」と、微笑んで言った。

「そうね。珠緒。最後にものを言うのは、体力よ。一休みしましょ」  
そう言つて未来は、首をうな垂れて、目を閉じた」

「うん」

私は、座席に深く腰掛け、ドアにもたれて目を閉じた……。

ー 眠れないー

緊張と連続で炎に飛び込んで気を失い、目が覚めると新たな不安が広がる。目標の無い道、道の無い目標。存在すべき場所からはじき出され、存在すべき出ない場所に身を置いている。自分自身が生きていることを否定されたように思えて、涙が溢れ出た。

「珠緒殿……」

「だ、大丈夫。御免なさい。ちょっと不安になっただけ。それだけ」

夜明け。

それは、私達にとって、過去であり新しい未来……。新しい時間との出逢いの始まりでもあった。

寝ていたのか、起きていたのか分からないほど、緊張感と脱力感が繰り返して来たような疲れを感じていた。

ゆっくりと目を開け、窓の外を見た。

辺り一面に竹林が広がっている。そよ風に任せてしなやかに揺れる竹林。外から洩れてくる陽の光が、竹林の笹に弾かれて、幻想的にキラキラと輝いていた。

運転席の未来は、シートに深く腰掛け、窓ガラスに首を倒しては戻すのを繰り返している。

私は、軽く微笑んで光秀を見た。

「?!」

そこにいるはずの光秀は居なかった。

「み、光秀さん？」

車外を見渡す。

車の前方は四メートル幅の道が続いている。私は後方を見た。前方と同じ四メートル幅の道路をゆっくりと向ってくる光秀の姿があつた。

「光秀さん！」

私は車を飛び出し、光秀の元へと走った。変な体勢で寝ていたので、身体の節々が筋肉痛で、よろめきながら光秀の元にたどり着いた。

「如何なされた？」

「あつ、いえ、大丈夫です。ちよつとした筋肉痛です」

私は、試合中に円陣を組む野球部員のように、両手を膝に付いて返事をした。

「無理も無い」

光秀は微笑んだ。

「笑い事じゃないです！」

そう言つて、私は少しムクレて見せた。

「これは失礼した。さあ、喉が乾いておられぬかと思い、水を汲んでまいった。如何かな？」

「うわあ、嬉しい。有り難う御座います」

私が手を伸ばすと、光秀は水の入った竹筒を差し出した。

その瞬間、

「うっ！」

秀が竹筒を差し出した右腕に痛みを感じて、左手を肩口に当てた。

「光秀さん?!」

「大丈夫」

「大丈夫つて、昨夜の闘いで傷を負つたのでは……」

「お気にめさるな」

「でも、手当てをしなきゃ」

私は、そう言ってみたものの、光秀が怪我を負っていても、手当てできるような救急用品を持ち合わせている訳では無かった。

「手当ては必要ない」

頑なに、そう答える光秀。

「どうして？」

頑なに返事を拒む光秀が、しばらく経過して返事をした。

「恥ずかしながら、拙者も筋肉痛でござる……」

「……」

私は、光秀の顔を見た。

「ぷっ。ふふふふっ。あははははっ!」

「はっはっはっはっはっ」

二人は顔を見合って笑った。

「と、ところで……」

私は次の会話に移ろうとしたが、笑いの壺に嵌まったまま、すぐに普通の話し方が出来なかった。お腹を押さえながら、大きく呼吸をした。

「ところで、この近くに川があったのですか？」

「ええ、大きな川で、とても澄んでいました。なぜですか？」

「大きな川なら景色も広いので、何か見えるのかと思って……」

。水もそこから汲んでいらしたのでしょ？」

「如何にも広い川では御座りました。しかし、水はそこから汲んできたのではござらん」

「では、何処から？」

「この道をしばらく行ったところに、大げや木がありましてな、その根元からこんこんと湧き出る、清水が御座りました。何かお気にされるような事でも？」

「いいえ、辺りの状況から何かヒント……、えーと、手がかりになるようなものでも見えていたらと思ったんで……」

「いや、残念ながら……。そういえばっ!」

「どうしたんです？」

「大げや木の横に、石段が御座った」

「石段ですか？」

「そう、おそらく寺社の類であろう。この地が、いかなる情勢であれ神仏に携わるものなら、迷える者を粗末に扱うことはなかるう」

「それじゃ、早速……」

私がそう言いかけた次の瞬間、竹藪から三つの影が飛び出した。竹を斜めに切り取った、鋭い切っ先が、光秀と私に襲い掛かる。一瞬の出来事に私の身体は動けなかった。

しかし、光秀の反応は早かった。見事に弧を描く光秀の剣裁き。三本の竹槍は瞬く間に、真つ二つになった。

「何のマネだ！」

光秀が怒鳴る。

襲ってきたのは、農民のようだった。三人は、後ずざりをする。と、その場の平伏した。

「お、お許し下さいいいいいいい！」

「な、何とぞ、ご容赦をっ！」

「どうぞ、お命ばかりはお助けをおおおお」

なんとまあ、変わり身の早い三人。

私と光秀は、顔を見合わせた。

「おいおい、人を襲っておいて命乞いとは、ちと虫が良すぎぬか？」

光秀は笑いながら、刀を鞘に納めた。

「おっ、お許しを……」

三人揃って、地面に額をこすり付けた。

「さて、我々を襲った理由を聞かせてもらおうか？」

「も、申し訳御座いません。てつきり山賊かと……」

「我々が山賊だと？」

「も、申し訳ありませんんんんんっ！」

三人は再び、頭を下げる。

顔を見合わせる、私と光秀。私達がなぜ山賊に見えたのか理由が解らない。私は軽く首を傾げた。

「何故我々を山賊と思つた？」

「あの得体の知れない乗り物が……」

農民の一人が車を指した。

私を見る光秀。私は「確かに得体の知れない乗り物ね」と肯定した頷きを見せた。

「村人よ。人は外見で判断してはならぬ」

「ははあああゝっ！」

「それでは、行ってよいぞ」

光秀は、結局何も咎めなかった。それが、懐の深い光秀のやさしさであった。

その時、

「ダメよ」

と、未来が車内から声を掛けた。その場を立ち去ろうとした村人達の肩が竦んで、その場に直立不動状態になった。

「未来」

「未来殿」

私と光秀は未来を見た。

未来は、車から降りると、光秀の横まで近付いて止まった。

「あんた達、とんでもないことしてくれたわね！」

未来は、いきなり声を上げる。お互いに顔を見合わせる村人達。

勿論、私と光秀も顔を見合わせた。何の事か理解できないが、未来の言動を見守る事にした。

「この御方は將軍家ゆかりの方であるぞ！」

「ひえええっ！」

当然、村人は驚いた。そして、その場に再び平伏した。

未来はニヤリとして、村人達の前に歩みだした。

「未来……」

声を掛けた私に、未来は自分の胸を軽く叩いて「任せておいて」とアピールする。

「さてと。そんなに心配しなくてもいいのよ」

未来の言葉にホツとする三人。

「村を残すも潰すも、簡単に出来るから」

未来が怪しげに微笑むと、三人の顔は真っ青になった。

「ど、どうかお許しをおおおお！」

三度、平伏す三人。

「あなた達、運が良かったわね」

「……?」

「この御方は、非常に心の広い御方。村人を苦しめる方ではない。そこで相談だけど、休憩場を一つ手当してほしいんだけど？」

「はい？」

「この先に、お寺があるでしょ」

未来は、光秀が歩いてきた方向を指した。

「は、はい。妙見様のお社がございます」

「一休みしたいんだけど、そこのご住職に取り次いでもらえるかしら?」

「……」

顔を見合わせる、村人達。

「別に無理にとは言わないけど」

未来の瞳は、妖しく輝く。

「もつ。もち、もち、もち、もち、もちろんでございますっ」

村人達は、拝みながら言った。

「繋ぎはOK。商談成立っ！」

未来は振り返って、私達にVサインを見せる。

私と光秀は、顔を見合わせて苦笑した。

私達は、村人の案内で、光秀が話してくれた石段の下に立った。

大木の陰に、清水がこんこんと湧き出ていた。

樹齢千年以上はありそうな、大げや木。産まれる街、滅びるゆく街、人々の喜びも悲しみも、この国の全てを見てきた証人のように、どっしりと立っていた。

この大ケヤキは、私達の進むべき道を知っているのだろうか？  
そんな思いで、私は大ケヤキを見上げるのだった。  
「で、この上ね」

未来が、高飛車に言う。

「は、はい」

緊張の村人達。

「じゃあ、案内して！」

「はい」

私達と三人の村人は、ゆっくりと階段を上った。

石段は大ケヤキと山肌の間をゆっくりと上がっていく。大ケヤキは大きく枝を伸ばし、その一つ一つの枝には万遍なく葉が茂っていた。

くねった階段を五十段ほど上ると、すぐに寺の門が見えた。

美しい門ではない。歴史の深みを感じさせる、由緒正しい門という感じがした。

「光秀さん……」

私は、この門をくぐる事に不安を感じて、光秀の後ろから左腕の袖を掴んだ。

「珠緒殿……。本当にこのまま進んでもいいんでしょうか？」

「いかがされた？」

「……」

何となくという理由、漠然とした理由でしかない私の不安。未来は、元気よく村人の後に続いている。光秀の左の袖を掴んでいる私の手を、光秀の右手が覆う。

「道は進む為にある。我々には振り返る道とて今はないのだ」

光秀の言葉は、厳しく又、優しいものだった。私はコクリと頷いた。

「珠緒、光秀さん。早く早くっ！」

頂上の門の位置から、未来が手を振って呼んでいる。私と光秀は、顔を見合って微笑んだ。

私は、表の微笑みに反して、心の奥に大きな不安を感じていた。  
上り切った階段の向うに、大きな衝撃と大きな選択の道が控えて  
いる事を知らずに……。

## 第六章 徳川家康と天海「結束」

寺の中はさほど広くはなかった。小高い山の中腹にあって、本堂が山の中腹を背にして建っていた。新緑が生い茂り、爽やかな風を感じさせる。本堂までの石畳の脇に灯籠が二つ。右手に手洗い場が見える。その向うに、本堂から渡り廊下で繋がっている宿坊があった。

「静かでござるな」

光秀は一步前に出て、辺りを見回した。

ジャリジャリ・・・。

宿坊の方から歩み寄る人影があった。

私の目にも、武士である事はすぐに解った。

「あの人は・・・」

容姿端麗。精悍な顔立ちは、青年あどけないなさが消え、立派な武将になっていた。

「忠興さん。忠興さんでしょー！」

その声を掛けて私は、二三步前に出たが無言の忠興に、その足が止まった。

私は、忠興の顔を見て安堵した。しかし、忠興の表情は硬かった。寧ろ険しいと表現した方が正しかったのかもしれない。

忠興は、私の目の前に来ると、両手で私の方をガッシリと掴んだ。

「痛ッ！」

私の表情は一瞬歪む。

「一体、今までどこに居られたのですか?!」

忠興の言葉は心配しているような感じだが、口調はきつかった。責められているのか、叱られているのか全く理解できなかった。

「えっ。あ、えーその・・・」

どこをどう説明したらいいのか解らない。

「お答え下され！」

忠興は、再び私の肩を揺すった。

「ちよ、ちよっと、忠興さん……」

首がグラグラで、頭がクラクラになる私。

そこで光秀が見かねて、一歩前を出た。

「忠興殿、落ち着かれよ」

そう言つて、光秀は忠興の右腕を掴んで制した。忠興は、残った左腕で自分の腕を掴んでいる光秀の腕を掴む。

そして忠興は、光秀を険しい表情で見た。

「貴殿は、明智光秀殿に間違い御座らぬか？」

その言葉に、私は不安を感じた。

「何を申される、忠興殿。私に変わったところがござろうか。変わったのは忠興殿ござろう。この数日前の忠興殿とは別人のように感じますぞ」

「数日前ですと？」

忠興は、一瞬目を細めて首を傾げた。

「真子殿、未来殿が同席された茶会の席の……」

光秀は、そう言いかけて止まった。何かイヤな気配を感じ取ったらしい。

一拍おいて忠興が重々しく口を開いた。

「もう2年以上も前の話ではござらぬか。」

「2年ですとっ！」

光秀は強い口調で叫んだ。そして少し考えて私を見た。

「未来殿……」

「はい」

「これが、時を越える……と、いうことでござるな？」

わたしは、ゆっくり頷いた。

光秀は、今まさに、時間を超えた事を理解し実感したのだった。

「そうだった！」

光秀は大切な事を思い出した。勿論、織田信長と本能寺におけ

る謀反の結果である。

「忠興殿。本能寺での謀反の一件はどうなったのでござる?!」

強い口調で、忠興に問う光秀。

「なんですと?」

忠興は、光秀の質問が「意外」と言いたげに驚いた。

「信長様は、ご無事か?!」

詰め寄る光秀に、一步下がる忠興。

「光秀殿……」

忠興の瞳は迷いに満ちていた。

「私が何をしたと言うのだ?!」

「本能寺に火を放ち、滞在しておられる信長様の寝込みを襲い殺害されたのでは……?」

「な、なんと。今、何と申された!」

「本能寺にて信長様を殺害され、謀反の罪で豊臣家家臣、黒田官兵衛の隊に成敗されたはずでござる……」

忠興の言葉。最後は詰まりがちだった。

「よ、よりによって、よりによって、信長様への謀反の汚名を背負わされているとは……」

光秀は、拳を握りながら腕を震わせている。

「忠興殿、世の情勢は如何なっておりますか?」

光秀は、言葉は冷静を装っているものの、目は怒りで血走っていた。

「光秀殿……」

「忠興殿、情勢はつ?」

詰め寄る光秀に、忠興の次の言葉は冷たいものだった。

「既に、豊臣秀吉殿が諸国を平定し、関白になられておられる。今、明智殿が真実を述べられたとしても、権力によって握り潰すはたやすいこと」

「……」

賢明な光秀は、忠興の言葉を十分理解していた。

「光秀さ……」

私が声を掛けようとした時、光秀の怒りが爆発した。

「官兵衛エエエエ！」

光秀は、官兵衛の名を唸るように吐くと、反転して私達背を向けた。そして、数歩前に進み、素早く太刀を引き抜くと、目の前の木を一刀のもとに切り捨てた。

立ち尽くす光秀。振り下ろした太刀の切っ先は、いつまでも怒りに震えていた。

「加勢を戴けませぬのか？」

広縁から静かな庭園の見える和室で、光秀は腰を下ろすなり、忠興に向ってそう言った。

私と未来は、光秀と忠興を交互にみる。

忠興はゆっくりと目を閉じて首を横に振る。そして、

「お気持ちには添えず、申し訳御座らぬ」

と、言って庭に視線をやった。

「情勢が、あまりにも安定化しすぎております。もはやこの世は、豊臣の世でござる」

「どうしても加勢は出来ぬと申されるのか？」

「はい。今、再び戦乱の世になれば、細川家だけでなく、周辺の方々や何の罪も無い民にまで多大な被害が及びます。そして、それは我が父がお許しになりませぬ」

忠興の言葉は、事務的に聞こえた。

この時代、武士は「勝利を治める」「生き残る」の二つしか選択が無い。細川家は、武家でありながら、公家との深い繋がりを持っていた。忠興の父、細川藤孝は天皇家との交友も深かった為、「生き残る」ことで時代を乗り切っている。

「御家が第一」

これが、忠興の父、藤孝の口癖であった。

そして、これこそが細川家が後世まで生き残る、最大要因なの

であろう。

「致しかたあるまい……」

光秀は、一先ず忠興の気持ちを受け入れる事にした。話を變えて、少しずつ忠興の気持ちをほぐす事にした。

「ところで忠興殿。藤孝殿はご健在か？」

光秀は、緊張した表情から一変して、笑顔を見せた。

わたしと未来は、忠興の顔を覗いた。

表情が硬い……。

「忠興さん」

未来が微笑んで見せた。

「あつ、これは失礼……」

「どうしたんです？」

と、私。

「まさか、藤孝殿の身に……！」

一瞬、光秀の表情が変わった。

「いいえ、父は健在です。今や名を改め幽斎と名乗っております」

「そうでござったか」

「どうやら、皆様方は事情をよくご存じないようですね。長くなりますが事情を説明しましょう。明智殿には不本意な部分があります。最後までお聞き下さい」

「うむ。お願い申す」

忠興の言葉に、光秀は神妙な面持ちで頷く。

そして、私と未来も無言で頷いた。

「本能寺の事件。あれが発端でござった……」

忠興は重々しい口調で話始めた。

燃え盛る炎。

本能寺は、信長の無念の思いを炎に変えて、荒れ狂うような炎を放ち続け暗天を焼いた。一夜明けると、寺は跡形も無く炭となっ

ていた。信長の野望も、光秀の思いも全てが炭になっていた。

この時代の消防設備は稚拙であった。火事は、街そのものをかき消してしまうほど恐れられていた。それゆえに、放火は死罪とされていた。さらに、寺とは今の市役所や区役所といった役割も果たしている。過去帳などが保管されている。言わば、戸籍が登録されているようなものである。

その場所から出火すれば、そもそも周囲の注目を集めるものである。

「信長暗殺」の一大事は国中に知れ渡る事になるのは必至であった。各地方に征伐に出ている武将達が仇討ちの為に京に戻るはずであった。

しかし、実際に動いたのは羽柴秀吉軍だけだった。

「我が細川家にも、本能寺にて信長様没すという知らせが入ったが、既に事件から三日も後のこと。その時点で明智殿からの書状もなく、事の次第をどう判断するかもめていた矢先、秀吉軍入京目前の知らせが入ってきました」

地方に出ていた織田の各軍は、強豪相手に苦戦を強いられていた。どの軍も京に戻れない。

明智軍と羽柴軍の一騎打ち。細川家内は二分していた。

旧友であり細川と同じように天皇家に近い明智に加勢するか、あくまでも反逆者としての明智光秀に仇討ちの名目で、織田軍にて参戦するか……。

まさに細川家として、家運をかけての分岐点に立たされていた。「あの時、父、藤孝も苦悩をしておりました。どちらに荷担しても大きな賭けになるのは必至。しかし、明智殿からの援軍要請はあったものの、明智殿居場所の確認が取れぬ有様、一方、羽柴殿からは援軍要請はありませんでした。羽柴殿からの書状には、明智殿を攻めるは信長様への忠義であると記されており、仇討ちと称されてござった。加勢は自由、但し邪魔伊達は無用とまで記述してある。父の判断は早ようございました」

細川藤孝は、隠居して名を幽斎と改めた。一旦、織田家、明智家との縁に区切りをつける為に忠興に家督を譲ったのである。そして、どちらにも加勢せず、戦況を冷静に見つめていた。まさに、「御家第一」に基づく細川家存続を重視した最善の策であったと言える。幽斎は動かぬことで、細川家としての勝利を治めようとしたのである。

勝負は一方的な展開で羽柴軍に軍配が上がった。

この結果、幽斎の判断が正しかったことが証明される。

「羽柴殿はご自分の名義にて、礼状を出されました。信長様の仇討ちを冷静に見届け戴いた礼状です」

「あ、仇討ち……」

光秀の言葉は震えていた。

「仇討ちだなんて、酷い！」

未来が、叫んだ。私も黙っていられない。

「忠興さん、仇討ちの資格があるのは、光秀さんよ。信長さんに直接手を掛けたのは、黒田官兵衛さんなんだから！」

「そう、その場には、光秀さんは勿論、わたしと珠緒も居たのよ！」

未来の表情はかなり険しかった。

忠興は少し考えて口を開く。

「わたしとて、皆様の話を信じたい。しかし今となってはどうにもなりません」

「忠興さん、そこを何とか……」

「珠緒殿！」

私の言葉を、光秀が制した。

「もうよいのだ」

「でも、それでは光秀さんは濡れ衣を被ったままになります」

私は、光秀の置かれている状況が納得出来なかった。

「かたじけない。珠緒殿のお気持ちだけで十分でござる」

「でも……」

「待たれよ。まずは情報収集が肝要。名だたる武将が控える織田に

於いて、なぜゆえ頂点に上られたのか？」

光秀は、冷静に言った。

忠興は、深々と頷く。

「されば……」

本能寺の変、山崎の合戦が行われ、事実上は秀吉が仇討ちを果たした。

地方に散っていた、武将が戻ってくるまでに、礼状を出し、天皇家をはじめ公家衆を抱え込み、近隣の豪商をその懐に治めていた。

そして、織田軍が結集したとき、羽柴秀吉は織田信長の三男、信雄の補佐役として現れたのだ。

仇討ちを果たした功労、信雄の補佐役として秀吉の発言力は威力を増していく。それによって、勇猛果敢な織田軍の猛将、柴田勝家との確執が増していくのだった。

勝家にすれば、秀吉は子分のような存在であった。お調子者の成り上がり者、信長の太鼓持ちのような存在である。事実、秀吉が、木下藤吉郎から改名をしたとき、丹羽長秀の「羽」と柴田勝家の「柴」を一字ずつ貰って「羽柴」としたのである。それがいつのまにか、織田を束ねるほどの発言力を有し、自分に意見までもする。勝家の怒りが頂点に達したとき、ついに勝家が牙を剥き出しにしたのだ。

しかし、秀吉軍の強さは圧倒的なものであった。戦と呼べないほど一方的な展開になってしまったのである。勝家は散った。秀吉に諂うことなく、最後まで「猛将、柴田勝家」として、その生涯を終えた。これを期に、秀吉は権力の頂点へと一気に駆け上がった。

権力の頂点へと達した秀吉は、名誉を欲した。源氏の家系でない秀吉は、將軍としての称号は与えられることはなかった。

「関白太政大臣」

これが、秀吉にとっての最高位の称号となり、名実共に「天下人」となったのだ。そして、羽柴秀吉から豊臣秀吉と改名した。

秀吉が「白」と言えば、黒いものでも白になる。

どのような、名門の武将であろうと秀吉の前では頭を垂れる。

光秀が拳兵したとしても、かかる情勢を覆すことは、「不可能」と言えるほど難しいものであったのだ。

「そういえば黒田官兵衛は、どうしているんですか？」

未来が言った。

「黒田殿は、秀吉様が天下を治められた後、九州に渡られました」

「九州？」（なぜ、わざわざ）

と、私は思った。

「官兵衛らしい……」

光秀はポツリと言った。

「なぜです？」

「九州、特に豊前一带は平野が多く暖かいため、作物が豊富に獲れる。地理的には、大坂より離れていて、秀吉との間に確執が出来たとしても関門海峡で迎え撃つことになる。関門海峡は潮の流れが早いからな。資産作り資金作りに適していて、大きな目で見て護りやすい。そういう場所として、配置に付いて進言したに違いない」

「光秀殿。光秀殿らしいご考察でございますな。しかし、天下を手中に治めるなら、まず京に登るべきではござらぬか？」

「確かに。黒田殿なら秀吉様の一番身近な存在……」

「光秀殿、それ以上は！」

忠興は、光秀の話の腰を折った。

「光秀殿、どこで誰が聞いているかも知れませぬ。滅多な事は……」

「……」

「そうであったな」

もはや失うものの無い光秀と、護るべきものの多い忠興。

反逆者として追われる光秀と、秀吉と皇族の架け橋の忠興。

全く立場が違う二人であった。

「では、言い方を変えよう。信長様のように、尾張から京に上り、各地に勢力を伸ばすことは、各地方に手を伸ばす為に非常に大きな力が必要になる。されど、秀吉様の御威光で九州一帯を治めてしまえば、後は東へ向うだけになる。極端に申せば一方向にのみ勢力を

濯げる訳だ」

光秀は、静かに言った。

「では、天下太平の世にはまだ時間がかかると？」

「おそらく……」

忠興の問いに、光秀は明確に答えなかった。

ふと見ると、私の横で未来が、何やら落ち付きが無い。

「そ・ん・な・こ・と・よ・りっ……!!」

未来の声に、光秀と忠興が振り向く。

「そんなことより、これからどうするんですか?!」

未来は、そう言っつて畳を叩くと光秀に詰め寄った。

「あ、あつ、それもそうですな……」

光秀は未来に気圧されて言葉に詰まった。

「ちよ、ちよつと未来……」

「珠緒は、黙つてて！」

と、退きそうに無い未来。

「いいですか。光秀さんも忠興さんも、これからの事に付いて、ちよつとは話し合ってもいいんじゃないですか？」

未来がそう言っつと、光秀と忠興は顔を合せた。そして、私を見る。

「あつ、いいえ、その……。すみません、光秀さんと私達にとつて、情勢分析が大切なのは十分承知しているんですけど、私達も不安なんです」

「これはすまぬ。忠興殿、本能寺の一件で、現場に居合わせた珠緒殿と未来殿に、嫌疑はかかっておりまするのか？」

光秀は、私と未来を気遣っつて話題を変えた。

「それは、大丈夫です。一時は、光秀殿とお二人が出会っつて間も無く、信長様に対する謀反となつた為、よからぬ噂も出ました」

「その、よからぬ噂っつてなんですか？」

私は、臆すことなくストレートに聞いた。

「珠緒殿はキリシタンでございましたな？」

「はい」

私は胸元から、クロスを出して見せた。

「うむ、間違い無い」

「忠興殿、玉緒殿とキリシタンに何か関係でも……？」

光秀が言った。

「光秀殿は、高山右近殿をご存知でしたか？」

「勿論。何というか、一本芯の通った、なかなか立派な武将でござる」

「珠緒殿、未来殿はご存知か？」

と、忠興は私達に問う。

「さ、さあ……？」

と、未来。忠興の質問の意味すら解っていない。

「珠緒殿は？」

「はい、いわゆるキリシタン大名ですね」

私は、目を細めて真顔で答えた。すると、忠興も反応した。

「どういう訳か、珠緒殿は高山殿のことを詳しくご存知のようですね」

「詳しく知っている訳ではありません。大まかな話は聞いた事があるだけです」

「どんなこと？」

未来は不思議そうな顔で私を見る。

私は、光秀、忠興、未来を順番に見た。

「簡単に言うと、豊臣秀吉が高山右近に、キリスト教を止めなければ領地を没収すると冗談交じりで言った事に対して、高山右近は真顔で返事をした。領地をお召し上げ下さいと……」

「なんと?!」

光秀は、驚いて忠興を見た。

忠興は、頷く。

「高山殿は、秀吉様よりもキリストを選ばれたと言う事。秀吉様は戯れ言も通じぬほど、キリストを崇拜しておられる高山殿に激怒さ

れ領地お召し上げとなった。言うまでもなく、それから間もなくして、キリスト教徒に対する制限が厳しくなっていた……」

「それと、信長様に対する謀反の嫌疑とどう重なるのでござるのか？」

「キリストとは、君主に刃を向けさせるほどの強い影響力がある。そう思われたのだ」

「そんなあ！」

私は否定した。

そこで、スツと光秀が私を制した。

「待ちなされ。……ということは、信長様の謀反の件は秀吉殿は知らぬという事になる。やはりあの一件、官兵衛の企てだったのか……。それとも、一部始終を知っていてキリスト教を抑える口実を作り上げたか……」

光秀は、腕組みをした。

「ちよつとっ……」

未来がコメカミの辺りを抑えて、何やら言い出した。

「結局、光秀さんも珠緒も追われる立場ってこと？」

「未来、人ごとみたいに言わないでよ。この期に及んでは、未来と私は同じ立場なんだから」

「それもそっかつ！」

と、未来は舌をペロつと出して、自分で自分の頭を軽く小突いた。

「もっつ！」

と、むくれる、私。

「ふっ」

私と未来のやり取りを見て、光秀の顔が柔らかくなった。

光秀は、忠興を見ると真顔になった。

「忠興殿。戦に身を投じる者として、毒を盛られようが謀略に嵌められようが、所詮は敵を倒し倒されるが手段の一つ。このまま、朽ち果てる気は毛頭ござらんが、珠緒殿と未来殿は言わば私の客人。」

巻き添えにする訳には行きませぬ。どうか、お二人を預かつては下さらぬか？」

光秀は、忠興に対して深々と頭を下げた。

「光秀さん……」

私は、胸の奥が痛くなった。

「み、光秀殿。頭を上げられよ。この忠興こそ、光秀殿の無念の思いに添えぬ臆病者でござる。しかし、今のお言葉、喜んでお引き受け致します。この上は、いかなる理由があろうと、お二人を護ります」

「忠興殿、忝けない……」

追いつめられた光秀。しかし、第一に私達のことを考えてくれる大きな優しさを目の当たりにした。

私と未来は細川家に身を寄せることになる。

しかし、光秀はこれからどうするのか、今度はそれが問題だった。

「そろそろ、よろしいかな」

その声は、襖を隔てた隣室から聞こえてきた。

スーッ。

静かに襖が開いた。

「お久しゅうござる。光秀殿」

「い、家康殿！」

やや肉付きの良い頬、小柄でぽってりとした体つきの家康は、外見に例えればタヌキのようでもあった。身体は小さいが、秀吉の五大老の一角を担う男としては、十分に威厳を保っていた。その家康が目の前にいる。

光秀は、太刀を掴むと半身で構えをとる。家康が一步でも室内に踏み込んでくれば、鋭い白刃がその身を割く警告であった。

「忠興殿?!」

光秀の視線は、家康を捕らえたままで忠興に真意を問う。

私と未来にも緊張が走る。

空気は凍り付いた。

しかし、次の瞬間、家康は微笑んで、すぐに口を真一文字につぐんで、頭を垂れた。

「光秀殿。今、行動を起こすのは容易い。そこを辛抱して下さらぬか。そして、この家康と天下を目指して頂きたい」

「な、なにを・・・」

爽やかな風が流れ、やさしい木漏れ日と小鳥のささやきに包まれた、心落ち着く山寺。

秀吉が作ってきた歴史がどのようなものであるとも、私達の時間は、あの本能寺でおきた忌まわしい出来事から、まだ半日程しか経過していなかった。

秀吉の重鎮の一人、徳川家康が突然現れ、光秀は勿論、私と未来は身動きが取れないほど驚いた。身体が竦むとはこのことである。

しかし、私達の驚きとは裏腹に、光秀は、細川忠興から情勢を聞き、徳川家康に仲間としての誘いを受けた。

「いかがでござろう」

落ち着きのある庭園を一人占めできる開放的な離れに場所を移し、着座と同時に家康は、ゆっくりと言った。私と未来は広縁に腰掛けている。家康から、席を外してくれるよう要望があったが、光秀がこれを断ったのだ。お茶に饅頭が出されているものの、命の懸かった話し合いに、緊張の糸は張り詰めたままだった。

「光秀殿。まずは肩の力を抜かれ話を聞いては下さりたい」

忠興が光秀を落ち着かせる。

障子を大きく開け、やや見下ろすような景観は美しさと静けさを感じさせる。光秀は、忠興の言葉に頷くと腰を下ろした。

「光秀殿、この家康、光秀殿を必要としております。この申し出で快くお受け下され」

家康の目は、嘘を語っていないかった。

「家康殿、それは信長様謀反の件を全てZ放置の上で申されておられるのか？」

「勿論」

「そ、それでは、仇討ちに加勢していただけるのか?!」

光秀の声のトーンが変わった。

無言の家康。忠興もまた、無言であった。

「家康殿、そう理解してよろしいのですな!」

再び光秀は、家康に問う。

家康は首を振った。

「それは出来ませぬ」

意外!家康の返事は光秀にとって意外な返事であった。

「なぜだ、力を合せて天下をとるということは、信長様の仇を討つ事で御座ろう」

「光秀殿こそ、なぜ仇討ちに拘る」

「武士として、主君の仇を討ち、汚名を晴らすことに異議を申されるのか?」

光秀は、家康に詰め寄る。

「あえて申そう。仇討ちなど無駄でござる」

家康は、言い切った。光秀の表情が険しくなる。私と未来は思わず、家康に目が行った。

「何を……!」

「光秀殿!」

忠興が口を挟んだ。忠興は急須を持って湯飲みに濯いだ。

「この湯飲みは、徳川殿でござる。同じ量を豊臣という猪口に濯げば当然溢れる。光秀殿もこの湯飲み。お二人が手を組めば湯飲み二杯分になる。そして所詮、猪口は猪口。湯飲みは猪口の容量など気にしてはおりませぬ」

「忠興殿の言い方は、遠回しすぎますな」

笑う、家康。

「いいですか。天下を望むは同じであろうとも、信長という一人物の仇討ちを天下平定という大望と同等とされるなということじゃ」  
「では、お二方は、この光秀に何を望まれます?」

光秀のこの質問に、家康はニヤツと笑った。

「光秀殿には、しばらく安全な場所で時を待っていただく」「安全な場所？」

光秀は、そう言つて忠興を見た。忠興はコクリと頷く。謀反者の光秀に行き場など無いはずであつた。

「この寺に止まってもらいまする」

家康は、タタミを軽く叩いてそう言つた。

「この寺が特別安全な場所なのでござるのか？」

「勿論」

と、自身たつぷりの家康。

「光秀殿はここが何処だかご存知ではなかつたのですか？」

忠興が低い声で言つた。

私は縁側に座つたまま、身体を捻つて三人を見ていた。未来は身体は既に広縁から和室内に進入していた。

未来の動きに一旦視線を向ける、忠興。

「珠緒殿、未来殿には馴染みが無いでしょうが、光秀殿はご存知の場所よくご存知の場所です」

「ここは、一体……」

未来が呟く。

そして、忠興は言つた。

「ここは、延暦寺……、比叡山延暦寺」

「なん、なんだと！」

驚きを隠せない、光秀であつた。勿論、それは私も同じこと。唯一、歴史に疎い未来だけが状況を把握していなかつた。

比叡山延暦寺。

それは、織田信長との因縁の地であつた。信長政権の政に対して楯突く僧兵たちに激怒した信長が比叡山一帯を焼き討ちしたのであつた。

巷では、光秀が信長を討ち、その光秀を秀吉が討つた。

「英雄」という言葉がある。「英雄」とは全ての人にとって、その対象となる人物が存在するのだろうか？

そうではない。歴史上、豊臣秀吉は出世の象徴のように伝えられ、主君の仇を討った「英雄」であるはあるが、信長に苦渋を飲まされた者にとつて、光秀こそが「英雄」である。その光秀が「謀反者」の扱いを受け非業の死を遂げたとあつては、豊臣によつて再び信長の所業が肯定された事になる。

比叡山の僧達にとつて、秀吉にこそ恨みはないがやり切れぬ思ひはあつた。

ガラガラガラッ。

雨戸を引く鈍い音とともに、障子の色が真っ白に輝いて、私は目覚めた。

天井を見上げたまま、4、5回瞬きをして、左を見る。未来はまだ夢の中だった。私は、未来を起こそうとはしなかった。目覚めたものの身体は重たかった。緊張の連続が筋肉に負担を与えていたのだろう。

しばらくして、寺の若い僧が朝食の支度が出来たと知らせにきた。未来の寝顔を見て丁寧に断つた。きっと未来は、私が朝食を断つた事に不満を述べるであろうが、精進料理が口に合うようなタイプではない。ちょっととした食べ物なら、車に積んであるので、断ることをさほど気に留めなかった。

布団から出て、五十センチばかり障子を開けた。

「いい天気！」

自然の事を、素直に感じられる。私の中に少し余裕が戻ったよくな気がした。

私は、未来を起こさないように広縁に出た。庭園を望む回廊を光秀の部屋へ向つた。光秀の部屋の前に着くと、二度声を掛けて障子を開けた。

光秀の姿は既に無かつた。思い返してみれば、朝食の間であつた。私は、光秀がどこか別の部屋で朝食を摂っているのだろうか？

思い部屋を出た。

「どこに行けばいいのかな？」

私はキョロキョロと辺りを見回し、人を探しながら再び回廊を進んだ。

しばらく行くと、一人の僧が竹帚で落ち葉を集めていた。

丸めた頭が鈍く光っている。

「すみませーん！」

私は、足を止めて僧に声を掛けた。

僧は振り向いて、脇に竹帚を挟んで合掌をしてお辞儀をした。

私は修行僧に安易に声を掛けた事に恥ずかしくなり、合掌してお辞儀をした。

私がお辞儀をした瞬間、僧が小さく笑う声が聞こえる。

私は不審に思い、顔を上げると、僧は軽く口に手を当てて、確かに笑っている。私はいささかムツとしたが、お世話になっている身として、そこは感情を抑えた。

「あの……。光秀さんは何処においででしょうか？」

私の問いに、再び僧は笑う。

「な、なにがおかしいんですか？」

私は少しだけ声のトーンを上げた。

「こ、これは失礼。明智光秀という人物はこの寺には居られませぬ」

僧がまっすぐに自分の方を向いて初めて気がついた。

「光秀さん！」

「おはようございます、珠緒殿」

「ど……。ど……。ど……。ど……。ど……。どうしたんですか、その頭？！」

私の声は、裏返しそうになっていた。

「どついでいねるっ」

そう言っつて光秀は、照れながら坊主頭を撫でている。

「どつって、そもそも何で剃髪しちゃったんですか？」

光秀はゆっくりと私の側まで歩いてくる。

「珠緒殿。まあ、かけられよ」

光秀が広縁に腰掛ける。私もその場に腰を落とした。

「珠緒殿。ご覧なされ、美しい庭とは思われませぬか？」

「はい、まるで大きな絵のようで、心が和みます」

「そうですね。戦で明け暮れる俗世が嘘のようです」

「いつまでも、こうして眺めていられたら・・・」

私の言葉に、光秀が微笑んだ。

「ここから？」

「ええ」

「ずっと？」

「え、ええ・・・」

私は、そう答えながら、庭園から光秀に視線を移した。

「珠緒殿」

「はい」

「なぜ、この庭は美しいのでしょうか？」

「えっ？」

「なぜ、美しくあり続けているのだと思われませんか？」

「剪定したり、掃除するからでしょうか？」

私は、質問の意図が読み取れず、普通に返事をした。

「その通り。日頃から美しくしておけば、掃除もしやすい」

「はっ、はぁ・・・」

私は首を傾げた。微笑む、光秀。

「庭を眺めるにはこの場所が一番ふさわしい。しかし、この美しさを保つ為には、ここから下りて庭の中に入らなければならない。庭

の中に入ってこそ、剪定、草引き、落葉広葉樹ができる」

「・・・」

「私は、庭も国も同じではないかと思う。この場所から眺めるだけの君主はいらない。庭に入れる者こそ君主にふさわしい。そうであれば、国という名の庭は美しさを保つことはできない」

光秀は目を細めて言った。

「光秀さんは、どうされるのですか？」

私は、静かな声で、光秀の顔を覗き込むように言った。

光秀は、空を仰いだ。

「私が望むもの。それは、人々の平穏な生活でござる。戦で荒れる田畑、炎に沈む街、いつも皺寄せは弱い者にくる。そんな時代に終止符が打てる人が現れれば、惜しみない助力をしたい」

「光秀さんらしい……」

「明智光秀……。この名は、捨てる。これより先は、南光坊慈眼として生きる。時代を見据え、何をすべきかをじっくりと見よう」

「慈眼和尚……」

「私は、この国に光りが射す為に全ての力を尽くしたい」

光秀は心が透き通るような声で静かに言って立ち上がった。

「さあて、掃除の続きでも致しますかな」

光秀は、そう言って私に笑顔を見せた。

「お手伝いしますっ！」

私は、輝く道を信じて進もうとする光秀に、満面の笑みで答えた。

光秀と私は庭の掃除を済ませ、屋敷の脇の納屋に道具を仕舞っていた。

「珠緒殿、ご苦労でござったな」

光秀は、優しく労いの言葉を掛けた。

「珠緒殿、珠緒殿！」

回廊を走る忠興が、私を見つけて駆け寄った。

忠興は私が立っていた縁の所までくると、

「いやあ、よかった。ずっと、光秀殿とご一緒でしたかあ」

「は、はい……」

「忠興殿。そんなに慌てていかがいたした？」

光秀も怪訝な顔をしている。

忠興は、まず息を整えた。

「いや、もう、未来殿が、珠緒殿が居なくなつたと慌てておられたので大騒ぎになってしまひまして……」  
「ハア？」

全く、未来は慌て者である。

私と光秀は、目を合わせて微笑んだ。

「珠緒殿は、ここで掃除を手伝つておられた」  
「掃除ですと？」

「さよう」

「もう、てつきり刺客に教われたのではないかと……」

「しかく……って何ですか？」

私の素朴な疑問である。

「刺客……え、闇に乗じて命を狙う影の者でござる」

「ああ、忍者のこと！」

「忍者……？」

忠興は首を傾げる。忍者という表現は明治に入ってからのことらしいことを、後に知った。

「殺し屋……みたいな？」

と、私が問うと、光秀が薄笑いをした。

「そうですね。例えば……」

言葉半ばにして、光秀はゆっくりと身を屈め、ピンポン玉ほどの大きさの石を一つ拾った。立ち上がった光秀は、拾った石をお手玉のように軽く宙に浮かせる。

浮き上がった石を、目で追う私と光秀。

「あの……」

私がそう言いかけた途端、光秀は石を再び掌で包んだ。否、包んだ瞬間、光秀の腕は空を切るように弧を描く。

石は茂み消えた。

ガッツ！

「ウグツ！」

鈍い音に、鈍いうめき。

「さて、何の御用かな?!」

光秀は、茂みの中に厳しい視線を送る。

茂みの中から、男がよろめきながら出てきた。こげ茶色の装束は、木の幹のように見える。

「御免!」

光秀は、忠興の腰に手を伸ばすと、忠興の太刀を引きぬき、流れるような体裁きで男に向って駆け寄り刃を伸ばす。

チュイン!

男も刀を抜いた。お互いに弾けて距離が開く。

「豊臣の手の者と推察するが、如何かな?」

光秀はそう言いながら、太刀を中段に構える。

「.....」

男は返事をしなかった。

「返答無きは、肯定ととる!」

光秀がそう言うと、今度は男が光秀に切りかかった。

チュイン!

再び刃が接触して、双方動かずならみ合いになった。

「御主。その命、誰の為に賭ける?」

光秀の目が奥で光る。

忠興と私は動かなかった。正確には、私は動けなかった。こんな山奥の静寂の中で、イキナリ刃を交える光景を目の当たりにしたからである。昨日の農民達の竹槍以上の驚きであった。忠興と再会し、徳川家康との出逢いで、一応の安堵感からそうなっていたのかも知れない。

豊臣秀吉の時代は、まだ「戦乱の世」であることを、再認識させられたのであった。

光秀は、グイツと男に寄る。

「命を捨てるな。明日昇る旭の為に使わぬか?」

「何が言いたい!」

ここで男は口を開いた。

「ここで私を斬っても、逃げられぬぞ。ここは辛抱して捕らえられよ。悪いようにはせぬ」

「ふざけるな！」

男は、吐き捨てるように言った。

「無礼なるぞ。この方に嘘偽りがあるう者か?!」

忠興が向きになって言う。

私は立ちすくんで組み合わせた手を強く握り締めていた。

「死に急ぐな！」

と、強い口調の光秀。

「問答無用！」

男はそう言って、光秀の刀を跳ね上げた。

しかし、動きは光秀の方が早かった。男が振り下ろした刀を、振り払うと、一瞬にして刀を握り替え、その背で男の肩口を叩く。

「うっ」

と、唸って男は倒れた。

「ふ〜……………」

光秀の吐息が洩れ、私も忠興も胸を撫で下ろした。

騒ぎを聞きつけ、奥から数人の僧が飛び出してきた。光秀は、僧達に事の次第を話すと僧達に、男の手当を頼んだ。

「少々、まずいことになったな……………」

光秀は、そう呟きながら忠興の前に戻ると、刀を持ち替えて柄の方を忠興に差し出した。忠興は、刀を受け取ると静かに鞘へ納めた。

「こんなところまで手が伸びているとは……………。意外でした」

忠興は、刀の位置を直して、そう言った。

「早いか、遅いかだけのこと」

「やはり、延暦寺では目に付きやすいのか……………」

「いや、比叡山に於いては、どの宿坊に身を潜めたとしても同じことである」

光秀は、見つかることを承知していたと言わんばかりの口調であつた。

「あの……」

私は、光秀・忠興の顔を見て声を掛けた。

「あの……。僭越ですけど……。もう、捕まえちゃつたし、情報が洩れることは無いんじゃないですか？」

「そう思いたいが、密偵を放つて戻つてこなければ、次の密偵が状況を把握しようとして来る。捕らえようが、逃がそうが大差はない。一度ならまだしも、次送られた密偵が戻つてこなければ、この比叡山で豊臣方に知られたくない何かがあると悟られることになるだろ」

そう言つて、光秀は広縁に腰掛けた。

「それじゃあ、どうするんですか？」

「逃げる」

光秀はあっさり言つてのけた。

「逃げるううう？」

私はその言葉を聞いて、視線を忠興に移した。微笑む忠興。

「家康さんと忠興さんの後盾なら、逃げることに無いじゃないですか？」

私は強く言つた。

「家康殿より、石田三成の動きを聞き及んでおります」

「動きつて……？」

「私からご説明しよう」

忠興がそう言い、近くの枝を拾つて地面に円を三つ描いた。その円はそれぞれが、少しずつ重なるように描かれていた。

「この重なつた三つの円。一つが豊臣家で、実状は石田三成が握つている。次にこの円が徳川殿の円でござる。はつきりと徳川殿にっいている者もいれば、態度をはつきりせず中間に位置しているものもある。残つた円は地方の諸大名で、どちらにも付かず表面的な付き合いと言えよう。そして全ての円の重なる中心が公家。己が安泰を

第一に、時代の武將に身を寄せる」

「それで、忠興さんはどの位置なんです？」

私は率直に聞いた。

「うっ！」

忠興は一瞬言葉に詰まった。

「はははっ。珠緒殿、なかなか鋭い質問ですな。その辺りは、忠興殿より私をご説明した方がよからう」

と、光秀。

「珠緒殿。忠興殿は、この中心でござる」

そう言つて、光秀は三つの円が重なる部分を指した。

「公家？」

私は、光秀を見て、直ぐに忠興に視線を送った。無表情の忠興。そして再び光秀を見る。

「珠緒殿。細川家は武家でありながら、代々天皇家公家と深い関係にある。いずれ、天皇家公家と徳川家を繋ぐ役割を担われる」

「そ、そうなんですか？」

私は、あらためて忠興を見た。

「まあ、そういう訳で、その日が来るまで、私は身を隠します」

「どこへ、行かれるんですか？」

「この比叡山の姉妹寺で慈眼寺という所に身を置きます」

「それで、本当に大丈夫なんですか？」

「ご心配めさるな。先程も申しました明智光秀は死にました。これからは、天に登りても地に下りず、海に下りても地に上がらず……。珠緒殿、南光坊慈眼と言う名を聞いたならば、身近に感じて下され」

そう言つて光秀は、いつもと変わらぬ笑顔を見せた。

## 第七章 細川幽齋「家督」

その日の正午、私達は細川忠興に連れられ叡山を後にした。忠興は、倒れた秀吉に代わり、実権を握っている石田三成の動きが慌ただしくなっているのではないかと推察し、今日中に大坂に戻ることを決心したのだ。光秀は午後には叡山を発つと言い、延暦寺の山門にて私達の姿が見えなくなるまで見送ってくれた。

時をさまよう私と未来。

近い未来や近い過去なら、再び巡り合うこともあるかもしれないが、世の中そう甘くはない。この世に運命が存在するというのなら、私達は忠興と運命の糸で繋がっているのかも知れない。

今は、忠興という運命を信じるのが、私達が進むべき道であることを信じるしかなかった。

忠興の行列は足早に大坂に向った。私と未来は行列の最後尾をゆつくりと徐行しながら車を走らせた。

「なんか、よく解んないんだけど……」

未来はゆつくりとハンドルを操作しながら、アクビをして私をチラッと見る。

「珠緒……」

「なに？」

私は、顔を上げた。

「何やってのよ？」

「何って……、地図を見ていたの」

私は暇つぶしに道路マップを広げていた。

「地図って……。それロードマップじゃない」

「そうね、約四百年先ってことになるわね」

私は澄ました顔で、そう答えた。

「四百年先ね……」

途方も無い時間の流れを愁う、未来。そんな未来の気持ちやな  
どそつちのけで、わたしはロードマップに指を這わせていた。

「あっ！」

「何よ？」

未来は、私の声に驚いて、ブレーキを踏んだ。急ブレーキの音  
に前方の行列も泊まる。

「ほら、これ、ここ。ここがこの道じゃない？」

私は、ロードマップの中の旧街道が自分達が走っている道を見  
つけたのだ。未来は頭を抱えて首を振る。

「そんなもん見つけたって、意味無いじゃん」

「そ、そうだけど、ヒマなんだもん」

そう言って、私は白い歯を見せて笑った。

「どうかされましたか？」

忠興が助手席の窓から車内を覗き込んで言った。

「忠興さん。珠緒ったら役に立たない物見て遊んでんのよ」

「はあ？」

「役に立たないって……それは酷いんじゃない？」

私はムクレた。

忠興は、私の膝の上のロードマップを見つけた。

「これが、事の発端ですか？」

そう言って忠興は、ロードマップを手にとって見た。

しばらく、マップに見入る。

「こ、これはっ！」

「ど、どうかしましたか？」

ただならぬ忠興の反応に、私と未来は首を傾げた。

「これは、道は違えど地形は似ております」

「そ、そりゃそうでしょ」

未来が溜め息交じりで答えた。

「未来殿、役に立たないと申されたな？」

「ええ」

気圧される未来。

「この地図を戴けぬか？」

たった一冊のロードマップに血相を変える忠興に、私と未来は顔を見合わせた。

「ど、どうする、珠緒？」

「どうって、このロードマップは未来のだし……」

「このまま元の世界に戻ることが出来なければ紙屑同然だし、まあ、高価な物でもないし、元の世界に戻れたら、また買えばいいかつ、未来は忠興に笑顔で答えた。

「おおっ、忝けない」

ロードマップを受け取る、忠興。食い入るようにマップを覗くが、等高線や幹線道路の距離表示がメートル法であったりして、いささか勝手が違う。

「忠興様、お駕籠へお戻り下さりませ。急ぎませぬと大坂への到着が遅れまするぞ」

家臣の一人が、寄ってくる。

忠興が、駕籠から降りて列が停滞したままになっている。

「もうしばらく待て」

忠興は、ロードマップに夢中で駕籠に戻ろうとしない。

「しかし、このままでは……」

困り果てる、家臣。

私と未来は、顔を見合わせて溜め息を吐いた。

「今夜、宿場でマップ……。地図の見方をお教えしますから、

一先ず駕籠にお戻り下さい」

私はそう言って、苦笑した。

「う、うーん」

と、忠興は唸る。

忠興は、私と駕籠を交互に見て、微笑んだ。

「この車に珠緒殿未来殿と一緒に乗る！」

「やっぱり……」

私は、そう呟いて苦笑した。

「そ、そんな、ご無体な……」

と、頭を抱える家臣。しかし、立ち直りは早い。

「忠興様の御駕籠を空にして運ぶなどできません」

「それでは、御主が駕籠に乗ればよい」

「そういうことではございませぬ」

「何が言いたい」

「この乗り物は、列の最後尾で護衛が出来ませぬ……」

しばらくして……

未来の車は、忠興の隊列の中心に移動した。

勿論、車中の忠興を護衛する為である。但し、空の駕籠は、

最後尾でなく、車の後ろを付いてきていた。

未来は運転。私と忠興は、ロードマップを広げて、後部座席に並んで座っていた。

私は、地図の見方を先に説明した。

まず、除外するべき部分として、高速道路・直線中心の幹線道路。これは都市計画法にもとづく区画整理事業が制定されてからのことである。逆に細く長く続くはつきりとした道には、その横に旧街道の名前が表示されている。この旧街道こそが、この時代の幹線道路になるはずである。次に市街地部分は平地や盆地になっていることが多い為、規模の大小の違いがあっても極端な地形の変更は無かった。

但し、少々ややこしいのが、戦後になって急激に開発された部分があった。あちらこちらに山を大きく削り取った部分であった。そう、ニュータウンと呼ばれる場所である。山には等高線があるが、ニュータウンの開発規模が大きいほど、等高線がハッキリしないのである。私はロードマップに三色のマジックを使って、街道をなぞりニュータウンに×印をつけたりしながら、忠興に丁寧に教えた。

「これが、こうなって……」

「ほづ。」

「これと、これと……。こうなのがニュータウンだから、バツ！」

「それでは、これも、にゅうたうんですかな？」

と、地図を指す忠興。

「そうそう、さつすが忠興さん、飲み込み早い！」

「いや、それほどでも……」

「だって、ロードマップを見たの初めてなのに、凄すぎ！」

私と忠興は、ロードマップ一冊で盛り上がった。

「ちよつと、お二人さん。仲がいいのは結構なんですけど、もちョット遠慮してくれませんかね〜」

未来がルームミラーを通して、冷やかに。

「な、なに言ってるのよ」

私は、後部座席から運転席の未来の方を叩いた。

一瞬、未来のハンドルが揺らぐ。

「も、もう、何すんのよ！」

「未来が変なこと言うからでしょ！」

「私は別に構わないけど、廻りがね……」

未来のその言葉に、周囲を見回す、私と忠興。

私も忠興も、同行する数人の人々と目が合い、その人々は、目が合うと同時に視線をそらした。

私は急に恥ずかしくなって、顔を赤らめ俯いた。

忠興は、「誤解を解く」と、言っでドアに手を掛けた。

「駄目よ！」

未来が声を掛けたが、ドアのロックが外れる。未来の声に顔を上げる私。未来は忠興に気を取られ、再び車が蛇行する。

ドアが一旦大きく開いて、未来がハンドルを切ると同時にドアが閉まった。そして、その勢いで、バランス崩した忠興が私に抱き着く形になる。そこで、未来がブレーキを踏み込んで車を停めた。

車の蛇行に、周囲が益々視線が集まる。

振り返る未来。抱き着いたままの私と忠興。

「何やっての？」

冷めた表情で、言葉を吐く未来であった。今度は忠興が慌てた。急いで私から離れると、

「皆、怪しからん！」

と、言つて再びドアに手を掛けようとした。

「待つて」

そう言つて未来は、忠興の横のパワーウィンドウを掛けた。

忠興は上から下へ、視線を運ぶ。

「忝けない」

赤面の忠興。

それから忠興は、窓から首を出す。

「やましいことはない。列を乱すな」

と、少々バツが悪そうに言つた。

後ろから黙つて運転している未来であるが、肩だ笑っていた。

ー 大坂 ー

現在の大阪府にあたる。

豊臣秀吉の居城、大坂城は長年人々に親しまれている。

大坂城下は、商業都市として栄えた代表的な町並みをしていた。通常、城下町は隣国から攻め込まれた場合を考慮して、入り組んで通り抜け出来ないようになっていた。しかし、秀吉は、経済の活性化を優先させる為、曲がりくねった通りを整理し、人々が往来しやすいように町並みを変えた。これが、日本で初めての「区画整理事業」といわれている。

そしてその後も街は変わる。水の都と言われる大坂は、船を使つて商品を運ぶことで、大量の取り引きがなされている。特に現在の繁華街である大阪市中央区の南部（旧南区）には、平野の豪商、安井道頓がその私財を出し治水工事を行い運河を作つたため、商取引が一層盛んになり現在の街が出来た。人々は道頓の功績を称え、その堀を「道頓堀」名づけている。まさに、大坂商人の街でなく、

商人の為の大坂の街なのであろう。

細川忠興の屋敷は、大坂城の南西、道頓堀の北東、「玉造」にあった。そう丁度、大坂の象徴の中間地点である。

細川邸に着いたのは、夜もとつぷりと暮れた頃であった。

比叡山から大坂までは、馬の早駆けでも半日を要する。整備されていない道路に、多勢の移動となれば時間が掛かる。街灯が無いこの時代、比叡山からの出発が午後となれば、道中必ず陣を張る。

しかし、細川忠興一行は大坂城下の細川邸に無事に到着した。未来の車のヘッドライトが大いに役に立った。遠方を照らし出す明るさに増して、闇に輝くライトそのものが夜盗から一行を護った。

「珠緒殿、未来殿、お疲れでございましたでしょう。ここを我が家と思つて何なりとお申しつけ下さい」

「ありがとうございます。でも、大丈夫ですよ」

わたしは、微笑んだ。

「これこれ、運転していたのは、私だつてばっ！」

と、未来は足を投げ出した。

灯籠の影が揺らぐ。

「そ、そうでございます。未来殿、お世話になりました」

「いえいえ。こちらこそ、お世話になりっぱなしですからね」

「何よ、未来。角が立つわね」

私が見かねて、口を挟んだ。

「そんなんじゃないけど、チョット、妬けるじゃない」

その言葉に、私と忠興は真っ赤になった。

間も無く、部屋の外で物音がした。

「だれだ？」

外の気配に、忠興の表情が変わった。

「忠興様。ご隠居様が興しになられました」

「何。父が参られたと？」

「御意」

「解った、直ぐ行く」

忠興が答えると、外の家臣は姿を消した。

「忠興さん。藤孝さん……。じゃ無かった、幽齋さんがいらしゃるのなら、私達もご挨拶を」

そう私が言うと、忠興は微笑んで答える。

「ご配慮、恐れ入りますが、本日はお休み下さい」

「なぜです？」

「今夜は遅い。父にお合いになれば、遅くなります。明日ゆっくりご挨拶頂けばよろしいではございませんか」

「そうだよ、珠緒。夜遅くなったら幽齋さんに悪いし……」

未来が私の肩を叩いて言った。

私は、しばらく考えた。

「幽齋さんに失礼でなければ……」

「父には、私から話しておきましょう」

「忠興さんが、そうおっしゃるのなら……」

私は、軽く二三度首を縦に振った。

「では、お双方、本日はお疲れでございましょう。ゆっくりお休みなされ。明日は、城下などご案内致そう。どこかご希望はございすかな？」

忠興は、私を見て未来を見た。

未来はニッコリ笑った。

「もちろん、おいしい食べ物。大阪といえば、なんたって食いだおれよね！」

「食い……。だおれ……？」

「どうやら忠興にとっては、初めて聞くフレーズらしい。」

「ははは、未来ったら下品ね。つまり、名物ですよ。名物」

「何よ、珠緒ってば上品ぶっちゃって！」

むくれる、未来。忠興は微笑む。

「大坂は天下の台所。おいしいものはたくさん御座います。取っ

て置きの料理をご案内いたしましょう」

「ヤッター！」

未来はガッツポーズまで見せて喜んだ。

忠興は、再び私を見た。

「珠緒殿は如何かな？」

「は、はい。私は別に……。あつ……。」

「何か？」

「ええ、その……。」

「遠慮無く申されよ」

忠興はやさしく言った。

「何よ、珠緒」

と、未来。

私は、しばらく考えて口を開いた。

「礼拝堂へ……。礼拝堂がございましたら、ご案内頂きたいのですが……。」

「教会のことですか？」

「そ、そうです。いけませんか？」

比叡山で高山右近や事実上のキリスト教への弾圧は知っていた。

しかし、忠興の返事は柔らかいものだった。

「よろしいでしょう。但し、条件が御座います」

「条件？」

「はい、私にとて立場があります。あくまでも物見胡散ということ  
でよろしいですか？」

「物見胡散？」

「単なる見物つてことですよ」

未来が言った。

「そういうことです」

忠興は真顔で答えた。

私は少々複雑ではあった。それでも、礼拝さえできれば良いと思  
った。

「あ、ありがとうございます」

と、私は答えた。

「それでは、父が待つておりますので、これにて」

忠興は、私達に会釈をすると部屋を後にした。

「だめよ。忠興さんを困らせちゃ」

未来は、大人ぶった口調で言った。

「私は別に……」

「ウソ。解つてたくせに！」

「そ、それは……」

「まあ、いいじゃない。なんにせよ、教会に行けるんだから。但し、忠興さんに責任の及ぶような軽率な行動はしないでよ」

「わ、わかつてるわよ」

「そんなら、いいんだけどね」

未来は横目で私を見る。私は思わず眼をそらしてしまった。

ー瞬の沈黙。

「ぷはあ〜っ！」

未来が大きな溜め息を吐いて、座敷の真ん中に大の字になって転がった。

「あ〜疲れた！」

「も、もう、未来ったらだらしない！」

「だってホントに疲れてんのよ。珠緒は運転免許を持ってないから分からないかも知れないけど、行列と一緒にチマチマ走つたのよ。もうクタクタよ」

「クタクタって……。他に車も走つてないし、信号も無いし、ノンビリしてたじゃない」

私がそう言うと、未来は人差し指を立てて、メトロノームのように数回振った。

「チツチツチツチツ。そうじゃないんだよねえ。例えばね、行楽シーズンなんかで渋滞したときなんか、結構ストレス溜まるのよ。そんでもって、忠興さんが車に乗つてからは、護衛の侍が張り付いて、

危ないっいたらありゃしない」

「そ、そうなの……」

タラリと冷や汗の私。

どうやら私は、未来の不満の導火線に火をつけたらしい。

「ハンドルを握っているこっちの身になってよ。だいたい、珠緒も忠興さんも……」

「その件は、本当に悪かったって、ゴメン」

「まあ、いいけど、道だつて舗装はしてないし、橋は狭いし、山のカーブは急だし……」

言葉では「疲れている」と言っていた割に、かなり元気そうな未来であったが、間も無く小言が寝言に変わった。

時間を越え、時代を越えて、不安な日々を送っていた。明日が不安だった。

私は、この時代で初めて「明日を迎える」という期待をもって床についた。

細川邸別室。

忠興は、父・幽齋と杯を躲していた。

「忠興。あの二人と再びであつたそうじゃな」

「はい、偶然でございますが……」

「邸内にあの鉄の車があつたでな。すぐに解つた。して彼女らは何処かな？」

幽齋は、猪口で口を潤した。

「お二人とも、父上にご挨拶したいと申されておりましたが、夜も深けてまいりましたので、お休み頂きました。明日朝一番でご挨拶に参られます」

「そうか。早々残念ではあるが、楽しみは明日に取っておくとしよう」

幽齋は猪口を下ろした。忠興が空になった幽齋の猪口の酒を濯ぐ。

「よい、手酌でいく」

幽齋はそう言つて、膳の上に猪口を置く。忠興は軽く会釈をして、幽齋の猪口の脇に、徳利を下ろした。

そして、二人は同時に箸を持った。

幽齋は、深め器に透き通り上品に鎮座していた風呂吹き大根に手をつけた。幽齋は筑前煮の蓮根を摘まむとサクサクと軽い音を立てた。

「この年になると、固い物を食べるのが一苦労するわい」

幽齋は、自分の膳の筑前煮の中から人参を選んで食べた。

「何を申されます。一度合戦が起きれば、お知恵を拝借ねばなりませんゆえ、お覚悟下さいませ」

忠興は、微笑んだ。

「おいおい、この老体に合戦に出向けと申すのか？」

「ご老体ですと？」

「そうじゃ、もう隠居の身じゃ」

「何を申されます。信長様暗殺の一件にて、御家を護る為に、家督をお譲り戴いただけでございます」

「ふあふあふあふあ。そうであつたかのお」

幽齋は、杯を口へ運ぶ。

「お惚けを……」

「毎日、茶や詠をやつておるとな、もう合戦の事など面倒で……」

そう言つて幽齋は、ニヤリと笑つて見せた。

「父上……」

頭を抱える、忠興。幽齋は、風呂吹き大根を一切れ口の放り込んだ。

大坂のど真ん中、静寂の大名屋敷。夜は益々深けていく。

「ところで、忠興」

「はい」

二人の表情が変わる。

「隠居隠居とも言つておられんようになって来たな」

「はい、土俵が整えば……」

「東と西、軍配はどちらにあがるかな？」

幽齋は眼を細めて忠興を見た。

「西がやや優勢かと思われまする」

「ややとは？」

幽齋は、忠興の分析力を図った。本当に細川家を託すべき器かどうか心配であった。

「西は土台が厚い。中核こそ小競り合いが御座いますが、地方の大名達は安定した日々で満足とはいかないまでも、戦をするほどの不満もござりませぬ。ただ……」

「ただ？」

「末永く安泰を願うなら、東に期待をするものも少なくはない。結論から言えば周囲の大名は、戦の相手次第でどちらにでも靡きます」

「うむ、忠興もそう読むか。完成した大関もやや衰えも見られる。」

相手は関脇だか成長株という所に魅力も感じるでな」

「できれば、土俵の外に居たいものです」

「そうも言うておられんדרו」

「父上はどちらに就くべきとお考えですか？」

「……。思案中じや」

「天皇家のご意向は、東側。そのために東と内通していたのでは御座いませぬか？」

忠興の答えに、幽齋はゆっくりと杯の酒を飲む。

一瞬の沈黙……。

「忠興よ」

「はい」

「大切なことは、この細川家を護ること。そして盛り立てていくことじや」

「は、はい」

幽齋の基本理念は細川家を護ること。すなわち、現時点で忠興が当主としての器が重要なのである。ことと次第によっては、細川

親子が東西に分かれて戦うことも考えていた。

史実に、西暦一六〇〇年真田家は兄弟で参戦。東西に分かれた為、弟・幸村は討死にしたものの、兄・昌幸は生き残り真田の血は絶えなかった。

幽斎は天下分け目の戦を予見していた。

その幽斎の眼が般若のような厳しい眼になった。

「忠興よ。大切なのは、徳川でも豊臣でもない。全ては、細川家の為になるかどうか。この世は生き残ることが全て。天下を手中に納めたとて、瞬きのことき時を制したにすぎぬ。勝こととはすなわち生き残ること。ただ、それだけを考えよ。それだけをな……」

翌日。

私達は、幽斎に挨拶をした。幽斎は京へ向うことになっていたため、ゆっくり話も出来なかった。

幽斎の眼は、いつものように優しく慈悲深く見えた。

## 第八章 小西行長「信仰」

晴天。まさに日本晴れの蒼い空が広がる、大阪城下。

道には人々が満ち溢れ、運河を往来する船には、どれも荷で溢れていた。

現代と比較して、人口はかなり少ない。但し、街そのものも、小さかった。今の庶民の街である大阪市中央区の難波周辺は市営地下鉄をはじめ各電鉄会社のステーションができる近年まで、水田地帯であった。

この時代の大阪の経済は、運河の周辺が発展していた。つまり、人口が少なくても、街が小さいので、人口密度的にはあまり変わらなかったと解釈できるかもしれない。

「すごい人ね」

未来は、そういうしながら頭を右へ左へと振る。

細川忠興一行は周囲から注目を集めていた。私と未来の姿がカジュアルシャツにGパンは確かに目立った。しかし、それほど目立ってないのかなと思っただのは、私達から周囲が見えにくかったこと気がついた。

忠興の護衛が多すぎた。現在でいうシークレット・サービスが忠興と私達の廻りに張り付いて移動しているのだ。ガードが近すぎて周囲が見えにくかった。

「城下を見物と言ったって、鳥かごみたいな状態じゃあ、雰囲気でないな」

未来が呟いた。

「申し訳ござらぬ……」

忠興が苦笑する。

「未来。我慢しなさいよ。だいたい、こんな服装じゃ目立つに決まってるでしょ」

「それじゃあ、明日から着物にしようかなあ」

「それは、よろしいですな。屋敷に呉服屋を呼んで、仕立てていた  
だきましよう」

忠興は微笑んだ。

「えっ、ホントですかあ！」

未来は大喜び。

「す、すみません」

私としては、苦笑するしかなかった。

「もう間もなく船着き場。そこから、船でご案内致そう」

「船ですか？」

「ラッキー。船なら、取り巻き無しですよね！」

と、大はしゃぎの未来。すでに、ミィハーである。

「み、未来。護衛の方々に失礼でしょ！」

「はははっ。構いませんよ。それくらいで、気分を左右するようでは、護衛は勤まりません」

忠興のフォローに、私は言葉が出なかった。

間もなく、私達一行は屋形船が停泊している船着き場に着いた。

米、魚、野菜。大坂城下はまさに「天下の台所」と呼ぶにふさわしい食品流通の拠点であることを実感した。私達を乗せた船はゆくりと賑わう街を眺めながら進んだ。

「ぜいたくだよね〜い」

未来は屋形船の雰囲気につつとりしていた。

するといきなり、

「おい、姉ちゃん。活きのええ鯛が入っとな。どうや、安うしとくさかい、持っていき！」

と、岸の店から捻り鉢巻の男が未来に声を掛けた。

優雅な雰囲気浸っていた未来が船の手摺機掛けていた腕を滑らせ川に落ちそうになった。

「もう、雰囲気ぶちこわし！」

未来はふいっと口を尖らせる。

私と忠興は顔を見合わせて笑った。

「忠興さん、すみません。こんな船まで用意してもらって」

「いいえ。お気にされるほどのことではございません」

「珠緒。忠興さんのお心づかい。素直に感謝したら！」

未来は、何食わぬ顔で言う。

「未来はもう少し遠慮って言葉を勉強したら？」

私は、未来をたしなめる。

「またあ、自分一人、忠興さんに気に入られようと、良い子しちゃうて！」

「そういう問題じゃ……」

「まあまあ」

忠興が、堪り兼ねて私と未来の間に割って入った。

「すみません」

再び私は、忠興に頭を下げた。

「いいんですよ。この船を使うことは、こちらにとって好都合なのです」

「……?」

私は首を傾げた。

「ご覧のように、城下はまことに活気があって喜ばしい。この街を見ているだけで元気がでます」

「は、はい」

「されど一方で、賑やかすぎて不穏な者がいても解りづらい」

忠興は真顔になった。

「珠緒殿、未来殿、ご両名は目立たれる。服装を変えたとして同じ事でしょう。そして、私自身も天下の大事に備えて動く身でございますれば、命を狙われることもありますゆえ、船で移動することにしたのです。これなら、警護の者にも多少は心労を掛けずにすみませうでしょうしな」

「なるほど。安全快適ってことですね」

私は右手を握って、左の掌をポンツと叩いた。

そして、忠興は再び微笑んだ。

「未来殿……」

忠興は、舟遊び御満悦状態の未来に声を掛けた。  
「はい」

振り向いた未来の顔は、ミーハーギャル状態と言っているほどニンマリしていた。

一瞬、たじろく忠興。

「あつ、み、未来殿。お楽しみのお申し訳御座らんが、障子を閉めていただけますか」「はい？」

「しばらく、人目を避けたいのです」

忠興は、優しく言った。

「どうかしたんですか？」

「ご心配なく……」

忠興は、静かに答えた。私と未来は、一瞬眼を合せた。そして未来はうなづいて障子を閉めた。

船は、ゆつくりと川を下って行った。

船がガクツと揺れて停まった。

私は、船の揺れにうたた寝をしていた。

船の先頭の障子が引かれて、警護の一人が顔を出す。

「忠興様。到着致しました」

「首尾は？」

「整っております」

二人の会話は短く、要点を得ているようだった。

「さあ、行きましょう」

忠興は、私達に声を掛けた。

「あつ、はい」

私は返事をして、未来を見た。未来はうたた寝どころか熟睡している。私は、その未来の肩をさすって起こした。

「あん……？」

と、瞼半開きの未来。

エンジンの掛かりの悪い未来は置いといて、私は忠興の後に就

いて先に外へ出た。

川岸に建物が見えた。

「教会？」

私は呟いて、忠興を見た。

忠興は、私と眼が合うと空を眺めてこう言った。

「今日は天気がよいですな。半時ほど、ここに船を停めて釣り糸をたらそう。この建物はキリシタンの建物だったな。当家の者は、この建物に入ってはならぬぞ。当家の家臣はな」

忠興は、船の縁に腰掛けた。

一拍於いて、わたしは忠興の気持ちを理解した。

秀吉の命令によりキリスト教は御法度となっていた。忠興は、目立つ行動を避け、川を使って一番入りやすい礼拝堂に案内してくれたのであった。

「あ、ありがとうございます」

私は、忠興に頭を下げて船を下り、礼拝堂に入った。

織田信長がキリスト教布教を許可かして、あちらこちらに教会が建てられていた。

信長自身がキリスト教を進行していたのではなく、寺社をけん制したり、外国の情報や武器を手に入れるためであった。

豊臣秀吉が天下を治めるようになって、しばらくはお構い無しであったが、キリシタン大名である高山右近と豊臣秀吉の間に確執が生まれて、キリスト教は弾圧の一途を辿った。私は礼拝堂の中をゆっくりと見まわした。

「何かの道場を利用したようね……」

広い板の間、正面の床の間のような場所に、掛け軸程の大きさの十字架にかけられたキリストの姿があった。

私は微笑んでゆっくりと息を吐いた。

静かに前に進むと、床が小さくきしむ。

私は十字架の前に立ち、膝を突く。風に促されるように、胸の前で手を組んだ。瞳を閉じると、自然と頭が下がった。

「主よ。お導き下さい……………」

時を越え、動乱の時を渡り続ける私達の進むべき道は何処にあるのか、その意味が何なのかを知りたい。そういう不安があった。

何故、時を超えてしまったのだろうか。どうすれば、元の時代・元の生活に戻るのだろうか。その問いかけを繰り返していた。

次第に落ち着いてくる、鼓動がゆつくりと、ゆつくりと鳴るのが解った。そして、大きく深呼吸をすると、静かに眼を開ける。

決して諦めない。諦めないことこそ、生き抜くことこそが、希望であり未来へ続く道だと心に刻んだ。

そして私は正面の十字架に背を向け靴を履くと、扉に手を掛けた。

忠興は釣り糸を垂れ、こちらに背を向けていた。素知らぬ態度で釣りを楽しんでいるかのように見えて、教会の建物の左右の角に護衛を配置して私の安全に配慮を示してくれていた。

「忠興さん、ありがとう……………」

「忠興殿ではござらぬか？」

私の声に重なって、対岸から男が忠興に声を掛けた。

忠興が顔を上げ、続いて私も対岸に視線を移した。

「こ、これは、石田様！」

忠興の声が上ずった。

忠興が、石田と呼んだその男の鋭い視線が私に向いた。目が合った瞬間背中に冷たいものが走る。私は、凍りかけた水飲み鳥のようになぎこちない動きで会釈をした。

男の名は、石田三成。昨夜、忠興の父、細川幽斎が大阪城で密会した相手であった。

「幽斎殿より、忠興殿はご不在と聞き及んでおりましたが……………」

と、三成は言い、同時に右の眉をピクツと動かした。

忠興は、竿を置いてその場に立ち上がる。船がゆらりと動いた。

「昨日、夜半に戻りました。父より、概ね伺いまして御座います」  
そう言つて忠興は会釈をした。

「ほうつ。それで、何故、このような所で釣りを？」

「そ、それは……」

忠興は、一瞬詰まった。

「ここは礼拝堂。そちらのご婦人方と何やら関係が御座るのか？」

三成は眼を細めて言つた。既に視線は私に向いている。

秀吉の政を重んじ、忠実に実行していた三成である。私がキリスト教徒であると知れば忠興に迷惑が掛かる。しかし、私はこの場を切り抜け三成を欺く為に、嘘を就く気はない。私の中に葛藤があった。

「忠興殿」

三成の視線が、忠興に戻る。

「石田様つ。詳細は、船の中で！」

忠興が、その場を取り繕う。

「う、うむ」

三成は頷いた。私は、三成の眉がピクツと反応したのを見止めた。「猜疑心の強い男」そう思つて三成を見た。

忠興の屋形船は、私を乗せると、三成の待つ対岸に移つた。船は三成と数人の警護の者を加え、元来た船着き場へ向けてゆつくりと川を上つていった。船に乗れなかつた者は、町中を抜け、船着き場に先回りして待つ指示を受け別れた。

忠興は、三成に対して、夜盗の隠れ家が使われなくなった礼拝堂にあるという情報をもとに大阪城下を見回りしていると説明した。出入り禁止の建物は絶好の隠れ家であるのだと言い、私と未来は「軽業師」に扮装して内定していたと報告をした。

「して、お名前は？」

「私は、五十嵐珠緒、こつちは仁科未来です」

「こんにちわ！」

「こ、こん……」

三成の表情が険しくなった。

忠興が慌てて間に入る。

「石田様。二人とも田舎者ですので、作法というものをご存知ございません」

「な、な、な……」

未来は気を悪くして「なにを！」とでも言いそうだったが、私はそれを制した。忠興の視線が一瞬私達の方に向いたので、小さくウィンクを返した。忠興はそれが解ったらしく、小さく微笑んだ。

「田舎者なら仕方が無い。多少の事は大目に見よう」

「ありがとうございます」

そう言つて、忠興は頭を下げた。

「田舎者と申したが、どこ出じゃ？」

「私達ね、時を超えてきたから、どこつて言つてもハッキリ答えられないけど！」

未来の口調は角が立つ。

三成の厳しい視線。私と未来の頭の天辺から爪先まで見回す。

「そう言えば、本能寺の一件にて奇怪な様相の女を見かけた者がいたという報告を受けておつたが……」

三成は冷ややかな視線で私と未来の眼を見て言った。

私は目線を外したが、負けず嫌いの未来は、しっかりと三成の眼を見据えていた。

沈黙が辺りを包んだ。

「石田様。それは、全く別の者と思われまます。そのような場に、この者らが居合わせるはずがございません！」

忠興は、慌てて否定をする。

私と未来は、三成の冷たい視線を絶えながら沈黙を護った。

「ふっ」

三成は沈黙を破り、予想外に微笑みを見せた。

「いやいや、疑っている訳ではない。ただ、あの一件については、

合点が行かぬことがあつてな、この三成が知らぬことがあるのではないかと疑問を持っておるのじゃ。それに、既に秀吉様から、明智の残党についてはお構い無しというお許しも出ておる」

「何か、気になることでも？」

「いや……」

三成は、そう言つて再び視線を私と未来に向けた。

慎重・冷静・疑心……。

秀吉に見出され、出世街道を成り上がってきた石田三成は、現在の地位を築く為に大いなる努力を重ねてきたのだらう。

ゴトツ。

船が船着き場に着岸した。

私と未来は船の揺れが治まるのを待つて、船を下りた。階段をトントンと駆け上がったが、忠興は着いてこない。

「忠興さ〜ん！」

未来が声を掛けると、船から人影が現れた。

妙な不安が晴れて、私はホツとした。しかし、船から出てきたのは忠興では無かった。姿を見せたのは、先程の礼拝堂の対岸から石田三成と一緒に乗ってきた武士だった。

「あつ、あの……」

私は、遠慮気味に声を掛けようとして途中で止めた。

「忠興殿は内々の話の為、もうしばらく石田様とこの船で話をされる。話が終るまで、この船茶屋の二階で団子でもお出ししましょう」  
「……」

私と未来は、顔を見合わせた。

「ご心配は御無用。ここの団子は格別ですし、何より二階からなら外の様子がゆるりと見えまするぞ」

男は微笑んだ。

男の名は、小西行長と言つた。堺の商家の出身であるとも語つた。

行長は団子を三皿運ばせ、団子が運ばれると人払いをした。他

の者は警護は構わないので、一階団子でも食べて一息つくように劳いの言葉を掛けた。

女中が団子とお茶を運んで部屋から出ると、行長は女中を追いかけるように障子を開けて、廊下に人がいないか確認をして再び席に戻った。

「さあ、どうぞ召し上げね」

行長は、素直な笑顔で団子を薦めた。

「はい。有り難う御座います」

私は、何の迷いも無く素直に答えた。団子の串に手を掛けようとして、隣から視線を感じる。

未来が、ジーツと私を見ている。僅かだが、未来の視線が私と団子を往復した。

「あつ……」

私の口から声が洩れた。

テーブルの反対側で、行長が団子にかぶりつこうとして動きを止め、上目遣いで私と未来を見る。そして行長は、団子を食わずに串を皿に置いた。

「何かご心配ごとも……?」

行長が微笑む。

「あ、いいえ、別に……」

私は右手を左右に振って、否定する。

未来は忠興さんと離されたことに、不安と不満を持っていた。

行長は、再び微笑んで串を取った。

「毒は入っておりませぬぞ」

そう言って笑うと、団子を二つ同時に食べた。それから、一度私と未来を交互に見てお茶をすすった。湯飲みを置いて、そのまま階下の町並みに視線を移した。

「大坂の街は、活気が御座りましょう」

「……」

無言の私と未来。

「ふう。やれやれ、警戒されてしまつては話もできませぬ……」

行長は呟いた。

「いいえ。そんなことは……」

私は、再び否定しようとしたが、行長には続きがあつた。

「無理も御座らん。この世に生まれ、何を求め何を信ずればよいのか。親か子か、否それ以上に主となるのか。親は子に疑念を抱き、子は親の失脚を望み、兄弟で家督を争い、女子供は人質として他国に送られる理不尽な世。人は、それぞれの性格や生き方があり、その時々々の立場によつて、行動が変わる場合がある。人を信用することとは誠に大切なことであるが、仕える価値があるかどうかは別問題だ。完璧な人があろうはずがない。完璧ではないからこそ人なのであるからな。しかし、万民は幸せに生きる権利は、平等でなければならぬと思う」

「……」

無言の未来。

私は、行長の言葉の奥にある深みを探った。行長は外の人の流れを優しく見つめていた。

「間も無く、天下分け目の大戦になります」

行長は神妙な面持ちで言った。

行長は、徳川・豊臣の確執が決定的なものに成ったことを私達に説明をした。

「な、なぜ、そんな大切なことを、私達に？」

未来は疑いの眼差しで、行長を見る。私は未来の眼から視線を辿るように行長を見た。

「この街の人々は、何を信じて生きておるのでしょ。そして、武士は何におびえて、刀を捨てることが出来ないのしょう……」

「行長さん、あ、あなたは……」

私が口を開くと、行長はゆっくりと視線を戻した。良く見ると、

行長の瞳は澄んでいた。行長はゆっくりと懐に手を入れ何かを取り出した。

「あっ」

未来が声を漏らす。

(やはり……)

私が思った通りであった。行長は、クリシタンだった。懐から取り出したのは、まさにロザリオであった。

「殺伐とした時代にも、やすらぎは必要……」

「そうですね」

私はやわらかく答えた。

「あなたも、クリスト教なんですか？」

未来の無駄な質問にも、行長はやさしく微笑み、そして頷いた。

小西行長は、高山右近と同じクリシタン大名であった。

秀吉に全てを没収されても、心はクリストあると唱えた高山右近。クリスト教を信仰しながら、なおも大名であり続ける小西行長。

行長は言った。

「己が信仰を貫くことは、何よりも大切なことではある。それゆえ、高山殿のご判断に対して意見を述べる立場ではない。しかし、一方で既に多くの家臣を抱えておる一指導者としての責任も忘れてはならない。皆が平等に幸せを得ることこそ、主のお導きであると私は思う」

私は、行長のこの言葉に人を敬う優しさを感じた。

行長は、私達が忠興の側にいることを快く思っていた。しかし、御家第一の考え方を持つ幽斎には気をつけるようにと助言をした。

あの優しい笑顔の幽斎を疑うことなど思いもしなかったが、行長の言葉に素直に頷いた。

私は、私達を気遣ってくれる小西行長に何かしたかった。一方で、小西行長という人物を知らなかった自身を恥ずかしく思った。

私が、黙って俯いていると、未来がトントンと私の肩を叩いた。

私は振り向こうとしたが、未来は私の耳の側まで来ていた。未来は私の耳元でこう言った。

「この、小西って言う人、関ヶ原の闘いで西側に付くんだよね。それも、石田三成のかなり近い人ってことは……」

「あっ！」

私は、驚きで声も出せず口と眼が開いた。

「如何なさいました？」

行長は、私の声に直ぐに反応した。

「あつ、いいえ……」

「何か、ご心配事がお有りですか？」

行長はとても静かに微笑んだ。

私は、その微笑みを無視することは出来なかった。

「行長さん」

「何でしょう？」

「この度の東西分かれての戦は、油断をしないでください」

「勿論」

「行長さんは、形勢不利を念頭に置いて慎重に参戦してくださいね。」

万が一のときは戦線離脱もお考えの内に入れておいて下さいね……

……

私は、関ヶ原の結果を言いたかったが言葉を飲んだ。

行長は、私のその気持ちを感じたようだった。

「肝に銘じておきます」

一言であったが、重い返事であった。

間も無くして、障子が開いた。

忠興と三成が部屋に入ってきたのだ。三成の表情は幾分柔らか

かったが冷たく感じる。

「これは、お待たせを致しました」

その言葉は、事務的で単調であった。

三成の後ろに、忠興が立っていた。ゆっくりと頭を下げる。

「珠緒殿、未来殿。お待たせ致しました。行長殿、ご案内忝けのう

「ございます」

と、忠興。その忠興に微笑む行長が、  
「楽しい一時でしたな」

と、答える。

三成と忠興が着座した。上座に三成。窓際に私と未来。向かいに行長と忠興。

私の目に、些か緊張気味の忠興が見える。

三成の視線が私達に向く。

「さて、珠緒・・・殿でしたかの・・・」

「は、はい」

「そちらが、未来殿」

「はい」

私と未来が返事をする度、三成の視線が忠興を刺したような気がしたが、俯き加減で返事をしていたので、確認することは出来なかった。

「面白いものを、諸々とお持ちのようでございますな」

三成の言葉に、未来が忠興を見る。私が未来の袖を引く。

無言の忠興。

三成は扇子を取り出し、右手に持つと左手を軽く叩く。

「これは、失礼致しましたな。数日前、細川家一行に紛れて、面妖なものが大坂に入ると、国境の見張りの者より知らせが参りましてな。少々、お調べさせていただきました」

ここで、微笑む三成。

「忠興殿のお連れであれば、気に病む事も無かるうが、取り巻きがやかましゅうてな。ご理解戴けますかな」

「は、はい。お察しいたします」

私は、答えた。未来は少々不満そうにしていたが、忠興の立場も考えてか、大人しくしていた。

「ところで、先程の話じゃが・・・。差し支えなければ、私にも、いろいろと見せていただけぬか」

しつこい三成に、私と未来は顔を見合わせた。

「そうですね・・・」

未来は、溜め息交じりの言葉答えると、セカンドバックから百円ライターを取り出した。そして、勿論だか火をつけた。

「おおっ」

身を引きながら驚く、光秀と行長。

「フッ！」（まだまだね）

未来は鼻で笑うと、何度も火を点けた。

次に未来は、携帯電話を出した。

「未来、携帯は中継局が無いから使えないよ」

私は、未来の腕を軽く叩いた。

未来は、私にウインクして、

「大丈夫！」

と、自信満々に言った。

そして、折りたたんだ携帯電話を広げて、三成と行長の方に電話の背を向けた。二人は、

怪訝な顔で携帯電話を見る。

カシャッ！

未来が、スイッチを押すとシャッターの操作音がして、携帯電話に二人の顔がひよつとこのような表情で映っていた。

それを見て、二人の視線は互いの顔と画面を何往復もした。

「こ、これは・・・」

三成の反応は、予想以上に高かった。得意満面の未来だったが、私はこの時、忠興の険しい顔を見逃さなかった。

携帯電話を手にとって、あれこれ見ている三成を他所に、未来は再び自分のバッグを探っている。私は未来の袖を引っ張って、首を横に振った。

「えっ、なによ」

と、未来。私は視線で忠興の方を見るように誘う。忠興は深く首を振った。

「他には、何が御座る」

三成は、玩具屋に入った子供のように目を輝かせている。

「えーと、今日はここまでです。ここは二階と言っても人の目に付きませす続きは、別の機会にしましょう」

未来は、微笑んで言った。

三成は、間髪入れず、

「では、続きは城内にて！」

と、大坂城に来るよう半ば当然のように言った。

「そ、それは……」

未来は言葉に詰まった。

「断ると申すのか？」

三成の表情が曇る。

「そういう訳じゃないですけど……」

返事に困る未来。

私も言葉が見付からなかった。豊臣の実権は三成が握っている。例え殺されても文句は言えない時代である事は、未来も十分承知している。

そこで、忠興が重たい口を開く。

「この者らは、城中の作法一切を知らぬ者で御座います。城中に招くなどと、お戯れは困ります」

「戯れではない。物によっては想いも寄らぬ使い方もあるやも知れん！」

「み、三成様、気をお静め下さい」

行長が割って入る。

「なんじゃ行長。そちも三成に説教する気か?!」

「滅相もございません。ただ、物事には順序がございますればっ」

そう言っつて、行長は三成に近づきく。

「お耳をお貸し下さい」

行長は、ここで無理強いして、全てを台無しにするより、忠興を通して登城を促すよう進言した。三成はやや不満は残ったものの、

行長の意見を飲むことにした。

三成は体向き変えた。

「まあよい。お双方、万一細川の屋敷が手薄なようならば、城中に参られよ。いつでも、迎えのを行かせますゆえ」

「は、はあ。あ、ありがとうございます」

私と未来は、社交事例の様な礼を言った。

三成は目を細くして、冷めた視線で私達を見たような気がした。そしてそのまま、首をユラリと傾け、行長に視線を向けた。

「三成様、そろそろ……」

「うむ」

と、頷いて席を立った。

三成が部屋を出ると、行長も後を追うように部屋を出た。行長は出掛けに、

「珠緒殿、未来殿。お会いできてよかった。御身を大切に」

そう言つて微笑んだ。

部屋に残された、三人。外は相変わらず賑やかだった。

「申し訳御座らんが……」

忠興が口を開いた。

「は、はい」

「先に屋敷に戻ってください」

「どうということですか？」

未来が問う。

「私は、このまま登城せねばなりません」

「何故ですか？」

詰め寄る、未来。

「未来、忠興さんを困らせないで」

私が未来を制した。

「でもっ！」

「緊急の事でしょう」

「申し訳ない……」

そして、忠興は部屋を出た。

間もなくして、二階の窓から、御茶屋から大阪城へ向う石田三成の一行が見えた。そこには、勿論忠興もいた。

私は、不安を抱きながら忠興の後ろ姿を見送った。その間に、未来は団子を5本食べて、機嫌を直そうとしていた。

最終章 細川ガラシャ「そして・・・」

細川邸。

中庭の隅に私達の休む部屋が用意されている。その部屋の前で未来が洗車をしていた。

ザパーンッ！

「OKッ。ピッカピカッ！」

御満悦の未来。

白いTシャツにツナギを履き、ツナギの上半身を腰に巻いて、バケツを抱えた未来が汗を拭った。

「お疲れ」

私は、離れたところで、マットの砂埃を落としながら、未来を労う。

「まだまだよ」

未来は振り返って微笑んだ。

「何？」

「ワックス。とことんピカピカにするんだから」

未来は、高笑いでガツポーズを見せた。

「やけに、気合いが入っているわね」

「まあね、ここぞという時に無様な格好見せられないでしょ」

未来は車のトランクから液体ワックスを取り出した。

「未来、まさかこの車で戦場にも出向く気？」

私がそう言うと未来が振り返り、ニタアッと笑った。

「えっ、マジッ?!」

「まっさかあ、いくらボティが頑丈だからって、疵も付くし、ガラスは衝撃で割れるでしょ。それに、ローンだってまだ3年もあるのよ」

「自分の車は、大切になってことか・・・」

「そうよ、物は大切にしなさいって、習ったでしょ」

「まあね。そんな言葉を習った事は覚えているけど、未来が物持ちのいい人かどうかは覚えていませんけどね」

私は目配せをした。

「もう、失礼ね……。あつ！」

「どうしたの？」

未来は、頭をポリポリ掻いた。

「この時代に居続けたら、ローン踏み倒せるわね」

「はいはい、駅前のラ・セーヌの尊パフェ、鳥町隆史のコンサート、医大生との合コン、その他エトセトラと引き換えに、ここに残るつてのなら、どうぞご自由にい〜」

私の言葉に、未来はハツとなった。

「前言撤回しますっ！」

未来は、そう言っつて軍人のように直立敬礼をした。

「あんたつてば、ホント欲望に弱いわね」

私は拳を軽く握つて口元に当て、細めで囁いた。

未来は、頭を掻きながら、

「本能に従順と言つて欲しいなあ」

と、すねた口調で言つた。

私が鼻で笑つと、未来も鼻で笑つた。

そして私は微笑んで、未来の車内にマットを敷いてワックス掛けを手伝つた。

私と未来は、船着き場で忠興別れたその日、忠興と逢つことはなかった。

その次の日、私達が目を覚ますと、忠興は既に屋敷を出ていた。家中の人々に聞いても、忠興の行き先を知り得ることは出来なかった。

忠興は、賄いの者に、

「珠緒殿、未来殿にはご不自由無きよう、手厚くおもてなしをするよう。但し、外出はお控え下さるよう、お伝えするように！」

と、それだけを言い残して、屋敷を出たということだった。

私と未来は、忠興が留守のこの屋敷で、持て余した時間を洗車に当たったのだ。現代へ戻る為にはこの車のチカラが必要だからであった。

「熊あー！久しぶりだな」

「亀さんじゃないか。ウレシイねえ兄弟。しかし、風の噂じゃあ流行病で逝ったって聞いたぞ」

そう言っただけは、まさに熊のような大声で笑った。

「アホう勝手に殺すな」

「まあ、おめえ見たいな遊び人は、そう長くはねえな」

「勝手に言ってる！」

二人は、気兼ねない関係のようだった。

「ところでよう、亀さん。お袋さん、元気かい？」

「いやああ、近頃、腰痛が酷くてな。家に籠りつきりですよ。もう時期、死ぬから早く所帯持って孫の顔を拝ませてくれって、うるさいんだよ」

「まさか、寝たきりって訳じゃ……」

「いやいや、元気なんだが近頃神経痛がひどくてね」

「そいつは、大変だな」

「なにね。お袋の湯治も兼ねて、明日から飛騨に向うんだ」

「飛騨？」

熊は聞き直した。

「おう」

「飛騨は止めときな。飛騨はダメだ」

「なんでだ？」

「あっち方面は、慌ただしいようだ」

「戦か？」

亀の声が上がった。

「こらア、でかい声出すな！」

慌てて、熊が亀を小突いた。

「イテツ。す、すまん」

「こんなところで、立ち話もなんだ、どっかでメシでも食おうや」

「あつ、お、おう！」

そう言っつて、熊の誘いに亀が答えると、その場を離れる足音が徐々に小さくなった。

その足音を屋敷の塀の内側から、耳で追っている私と未来。辺りが静かになった。

それでも、私と未来は塀の外に耳を傾けていた。

「どうなされた！」

突然、背後から声を掛けられ、私も未来も驚き、そして振り向いた。

「た、忠興さんっ！」

未来が声を上げ、忠興に駆け寄る。作業途中だったシートカバーを持ったまま掛け寄ろうとしてドアに引っかけて、カバーが少し破れた。

未来は、引っかかったシートカバーを外すと丸めて車に放り込んだ。

未来に続いて私も歩み寄る。

「無事だったんですね？」

と、未来。

「無事ですと？もちろん、怪我一つござらん」

忠興は、未来に向ってそう言っつと、未来の後ろに居る私に、視線を移して微笑み、広縁に腰掛けた。

「お声も掛けず、無断で外出してご心配をお掛けしました」

「とても心配しました。戦に行かれたのかと……」

わたしは、ホツとして言葉が途絶えた。

「あつ、それは……」

忠興は、言葉を詰まらせた。私と忠興との間に流れる沈黙の間。

未来は黙って私たちの側から離れ、途中だった車のシート掛けを再会した。

「さて、シートも掛け終わつたし……。珠緒っ！」  
「えっ、はいっ?!」

我に帰る、私。

未来は、バケツに雑巾を掛けて、ブラシとスポンジを持って、車から離れはじめていた。

「私、後片付けしてくるから」

「あつ、ゴメン。今、私も……」

「いいから、いいからあ」

未来は、そう言って目配せをして、その場から立ち去った。

「珠緒殿」

「は、はい」

「お掛けにならぬか」

忠興は、自分が腰掛けている広縁の床を、ポンポンと軽く叩いて、私に腰掛けるように促した。私は、誘われるまま忠興の横に腰掛けた。

「留守の間、ご不自由はござりませんでしたか？」

「はい、皆さんに良くしていただいておりますので、何一つ不自由はありませんでした」

「それは、よかった」

忠興は、微笑んだ。

「忠興さん。その……」

「なんでしょう?」

「その、お姿は……?」

私は、恐る恐る訊ねた。

忠興は、微笑む。

「緒用ができました。些か大坂を離れます」

「ど、どれくらいですか?」

「恐らく、10日……、ほどでしょう」

忠興は、そう答えたが、私の心に不安が過ぎった。

「忠興さんは、どちらに尽かれるのですか？」

私、いきなり確信を突く質問をした。

「どちら・・・と？」

「はい、天下分け目の戦に・・・」

私の問いに、忠興はゆっくりと首を横に振った。

「珠緒殿が、ご心配頂くことではございません」

「そうはいきません。豊臣軍が負け・・・！」

と、言いかけて、忠興は私の口を塞ぐように、手を翳した。

「珠緒殿。滅多なことを口にしてはなりません！」

「でもっ・・・！」

「なりません。誰が何処で聞いているかも知れませぬ。事は珠緒殿の命に関わるのです」

忠興は、そう言っただけ私の量肩に手を置くと微笑んだ。その時、

私は私の肩が震えているのに気が付いた。

「さあ、大きく呼吸をして」

忠興の優しい目。私は、深く大きく呼吸をした。

次の瞬間、ストレスとその解放により、僅かに目が眩んで身体  
のバランスを崩し、忠興に抱きかかえられた。

「珠緒殿。どうなされた！」

「ご、ごめんなさい。チョット、めまいがしただけです。大丈夫」

「珠緒殿。案ずる無かれ。この忠興、必ず帰ってまいります」

「は、はい」

私は、返事をするだけ。忠興の言葉に、一番素直に応じられる  
言葉、忠興が振り返ることなく心置きなく前に進む為には、「はい」  
としか言えなかった。

忠興には、私の気持ちが解っていた。

「珠緒殿、この戦から帰ってきたら、茶会を致しましょうぞ」

忠興は微笑んだ。

「あっ・・・、そうだ。私、練習しておきます。お茶も詠も、少し

でも忠興さんに近付けるよう、一生懸命修行して待ってますから！」

私の胸は、燃えるように熱かった。

「楽しみにしておりますぞ。それではっ！」

忠興は立ち上がった。

「忠興さんっ！」

私は嫌な予感がした。胸騒ぎ…………。

忠興は、振り向いて微笑む。一瞬時が止まった。そして忠興は、戦場へと足を向けた。

その夜は、眠れなかった。

もう、馴れているはずの闇夜の静寂が、余計に不安を掻き立てる。

「ふうっ…………。ふう…………。」

出てくるのは、溜め息ばかりで天井の隅が見えるほど暗闇に目が慣れていた。

「珠緒、どうしたの。眠れないの？」

「ゴ、ゴメン、起こしちゃった？」

「そんなことないよ…………。」

未来は、そう言って寝返りをうって私の方に身体を向けた。

「私もね、珠緒と同じで眠れなかったの」

「えっ？」

私は、一瞬ドキッとした。

「違う、違う。忠興さんにチョツカイなんか出さないわよ。略奪愛

って私の趣味じゃないしいね」

「べ、べつに私は…………。」

「いいの、いいの。心配してあげたら、想いも届くわよ」

「だからあ…………！」

「あっ、珠緒。顔が紅い！」

「えっ、ウソっ！」

「うそよ。いくら見えるったって、この暗闇で顔色が解る分けない

じゃない」

未来がクスクスと笑った。

「そ、そうね……」

私も微笑む。そしてまた、部屋に静寂が戻る。

「未来……」

「んっ？」

「もし……もし、このまま元の世界へ戻れなかったら……」

「そうね、そういう事も覚悟しておかなきゃいけないのかな……」

「」

「……」

「珠緒は、元の世界へ戻るか、忠興さんと暮らすのか、選択できるとしたらどうするの？」

「それは……」

「私達には、第三の可能性もあるのよ」

「第三の可能性？」

「そう、もう珠緒だって解っているはずよ。再び別の時間へ異動してしまうことを……」

未来は、低い声で言った。

「……」

私は答えられなかった。

「もし、このまま、時間の中をさまよいつけるようなら、私達は歴史の中に生きながら、歴史に存在しない、池の上に浮かぶ木の葉……」

「……」

「もういいよ！」

私は、未来の言葉を遮った。

「ゴメン……でも、出来ることはある」

「……」

「私達は、信じることはできる。元の時代に帰ること、好きな人ともう一度逢えること。そして、信じ続けることはできるの。例えば、

歴史に名を刻まれなくても、自分らしく生きることが出来る。今言えるのはそれだけかな……」

「……」

「珠緒？」

「……」

私は、元の時代に帰りたいたい願いと、忠興と一緒に居たい気持ちとが交錯していた。

「珠緒っ！」

未来はいきなり跳ね起きた。そして、その鼻先を私の鼻先につくかと思えるほど、近付けてこう言った。

「行こう、珠緒！」

「えっ、なに？」

「明日、忠興さんに会いに行こう。同じ時間を生きるなら悔いの無い生き方をしようよ」

「でも、戦場なんか行ったら邪魔になる……」

「それじゃあ、珠緒。忠興さんは、歴史上、戦死した？」

「い、いいえ」

「それじゃあ、問題無し！でしょ」

未来は、それが当然のように言った。

私は、一瞬考えて、

「うん、行こう。今を大切に生きる為に！」

と、明るく答えた。

「これで、荷物は全部積んだ？」

未来が運転席後部のドアを開けたまま言った。

「後はお弁当だけ！」

「容易がいいねえ」

「忠興さんに！」

「えっつ。私のはっ？」

未来は膨れ面。

「勿論、ありますっ！」

私は、風呂敷きでしっかりと包み込んだ重箱を車に乗せた。  
「グッド！」

未来は、拳の状態から親指を立て、ウィンクした。

「未来、私の方はOKよ」

「そんじゃ、行きますか！」

そう言っつて、未来は元気よく後部打席の扉を閉めた。

ドンドンツ、ドンドンツ。

私達が車に乗り込もうとしたその時、細川邸の表門が力強く叩かれた。私と未来は一瞬顔を見合わせたか、直ぐに鳴り止んだので二人とも座席に就いた。

「そじゃあ、珠緒」

「よろしくね、未来」

私達は、新年を迎えたかのような、すがすがしい気分だった。時間の谷間にを滑り落ちてから、初めて進むべき道を自分達で決めたからかもしれない。

未来は、ギアをパーキングからドライブに切り替えると、ゆっくりとアクセルを踏み込んだ。私はフロントガラス越しに見える青空を見て、忠興の事を想った。

(忠興さん……)

「忠興さん……。っつて、顔を知てるわよ、珠緒」

「えっ、ど、どこにっ！」

私は頬を探る。

「あのねえ……」

未来の冷やかな視線に、私はハツとなって、頬が紅くなった。  
「もう、からかわないですよ。未来！」

「ごちそうさま。ほんじゃ、気持ち入れ直して、出発っ！」

「はいっ」

そして、車は屋敷の表門へと向った。私は助手席で地図を見て、

再度旧街道をチェックして関ヶ原へ向うルートのチェックを始めた。分厚いロードマップは忠興に渡してしまったが、以前高速道路のナビスエリアで記念にと貰ってきた地図が座席のポケットに入っていたのを洗車の時に見つけていた。街から街へ移動するには使いやすいマップである。旧街道はこの時代の主要幹線道路である。いわばこの時代の国道のようなもの。現代の小道の多いロードマップよりは、高速道路配布のマップの方が使いやすいと言えた。

私は膝元の地図でチェックを続けていた。

間も無くして、未来の運転する車は屋敷の角を曲がって、表門が視界に入った瞬間、未来がブレーキを踏んだ。

「な、なに？」

未来は目を凝らす。

私は一瞬未来の顔に目を向けたが、直ぐに視線を追って、前方に視線を移した。

表門が開いていた。私達の出発の為に開いていると思ってみれば大違い。門の辺りでは押し問答になっている。

「何よ、あれ？」

「さあね」

未来はそう言って、サイドブレーキを引いた。

私はシートベルトを外して、車から下りた。

「ちよ、ちよつと、珠緒っ？」

「大丈夫。チョット事情を聞いてくるだけ」

「あつ、でも……」

未来の心配を他所に、私は車を降りて門の方へ歩き出した。

「あの……」

私が声を掛けようとしたその瞬間、

「いたぞっ！」

外から進入知ようとしてきた侍集の一人が、私を見てそう言った。

「な、なにっ？」

進入を制していた、忠興の家臣が、

「五十嵐殿。お早く立ち去られよ！」

と、厳しい表情で言った。

「はい……?」

私は全く状況が飲み込めない。

「そこだつ。そこにいるぞ！」

門から強引に押入ろうとしているのは、五十名程の手勢である。「忠臣蔵」の討ち入りが四十七士。かなりの人数である。今、視界に見える兵はどう見ても、「迎えに来た」などというレベルではない。まさに罪人を多勢で囲み、確実に捕らえる意思を感じさせる人数であった。

邸内にドツと人がなだれ込み、もはやその勢いを止めることは出来なかった。

「な、なに?!」

私は、あまりの勢いに驚いた。そして同時に騎馬が一騎入ってきた。

「あ、あれは！」

馬上に居たのは、石田三成であった。

「な、なぜ？」

そう、何故、石田三成が私達を捕らえようとしているのか解らなかつた。否、強いて言うなら、私達の持ち物であった。先日、未来が船着き場の茶店で三成に披露した、百円ライターやカメラ付携帯電話が裏目に出た。

私は一目散で車まで掛け戻る。助手席のドアに手を掛けた瞬間、反対側の運転席ドアから飛び出した。

「命が惜しかったら、下がんなさいっ！」

未来が叫ぶと同時に、迫り来る兵に向かって何かを投げた。細長い筒から煙が上がる。未来の手から離れると、放物線状に空中を舞つて、兵の前に落ちた。

バババンツ、ババ、ババ、バンバンバンツ。バンバンバンツ!

(ダイナマイト?)

私は、一瞬そう思ったが、そんな物が万に一つも未来の車に積んであるはずがない。間も無くして爆発音は止まったが、煙は出続けられている。

「は、発煙筒?」

爆音が止まって解ったが、未来が投げたのは発煙筒だったのだ、発煙筒の廻りに、火花がテープで巻き付いて燃え尽きていた。

兵達の動きは止まっていた。

「三成さん。私達に何か御用でしょうか!」

未来は威風堂々と言った。

すると兵は左右に分かれ、その中央に道を作った。

ゆっくりと、馬に乗ったまま、三成が前に出る。徐々に発煙筒の煙も小さくなっていく。

「お迎えに参りましたぞ。大坂城で参りましょう」

三成は悪びれもせず言った。

「随分物々しいお迎えのようですが?」

「近隣諸国が騒がしくなりましたゆえ。馳せ参じました」

三成の瞳の奥がギラツと光った。

「珠緒、どうする?」

未来は私に意見を求めた。

私に迷いは無い。助手席の扉の横に立ったまま、三成に向き直った。

「私は………。私は、行かない。私は、大坂城へは行かない。

忠興さんの所へ行きます!」

私は自分の想いを言い切った。未来は私の堂々とした態度に微笑んだ。

「……だ、そうです。じゃあ、そういう事で」

未来は、運転席側のドアを開け、私は助手席側に手を掛けた。

「そなたたちを選択権は御座らん。珠緒殿はキリスト教信者でしたな」

「それが何か？」

「先程、キリスト教は信仰禁止の発布がございました」

「.....」

私は、眉間に皺を寄せて三成を見た。

「キリスト教を信仰することは、罪を犯したことと同じ事になります。しかし、我々は血も涙もないという訳ではない。大人しくご同行なされよ」

三成の一言に、車に乗りかけた未来が降りて、

「何を、訳解んないこと言ってるの。三成さん、お構いなく。私と珠緒は忠興さんの所に行きますから！」  
と、強い口調で言った。

三成は苛立ちを見せる。

「問答才無用ヨーツ。捕らえろ！」

その一言で、三成の軍は再び前進してくる。

私達は急いで車に飛び乗った。ドアを閉めたと同時に未来がギアに手を掛け、一気に「R」に落とすとアクセルを踏み込んで、同時にハンドルを一杯まで右に切る。

車が一八〇度回転し、未来がギアを「D」に切り替え輪が逆回転して、地面に敷かれていた砂利が回転しながら放射状に飛び散った。

「うわーっ!!」

悲鳴とともに兵士達の足が止まる。石の礫の雨が無数降りそそぐ。

しかし、それも足止め程度にしかならなかった。

「裏門へ抜けるわよ！」

未来はそう言って、ハンドルを強く握った。

「何かある？」

わたしは、助手席から身を乗り出して、後部座席の荷物をあたる。

「お弁当とか荷物がいっぱい.....」

「花火、爆竹、発煙筒、あと予備ガソリンとか残ってない？」  
「ちよつと未来、あんたつてば普段からそんな妖しげなものを積んでるの？」

私は未来を怪しい目で見た。

「あのね、ガソリンつつたつて、ホワイトガソリンよ。キャンプで使うのよ」

「キャンプね。確かにそうだけど……」

「足元。後部座席の足元にあるでしょ」

未来にそう言われて、私は後部座席の足元を覗き込んだ。

「あつ、あつたあつた！」

私は、ホワイトガソリンの缶に手を掛けた。次の瞬間、車体が左右に揺れて、私は後部座席に頭から倒れ込んだ。ホワイトガソリンの缶に他の物がぶつかって、ゴワンツと鈍い音がしたのを、私は知っていた。

「痛あーっ！」

「ゴメーンツ。珠緒、文句は後ろの方達に言つてね」

「もう、許さないっ！」

私は、後部座席の運転席側の窓を開けた。

右に屋敷、左に広がる美しい庭園。しかし、その庭園を眺める余裕も無く、河の流れのように整った庭石を巻き散らかしながら、車は蛇行している。

「早くつ。珠緒、そのホワイトガソリンを撒いて！」

「わ、わかつてるけど……」

車窓から顔を出せば缶が出せず、缶を出せば顔が出ない。

「未来、ダメ。上手く撒けない……。あっ！」

車の揺れで、缶を持った私の手が窓枠に当たって地面に落としました。

「未来っ！」

「仕方ない。珠緒、前に戻つて！」

未来がそう言つと、カチツと音がした。

未来がカーステレオの下に手をやって、車載ライターのボタンを抜き取った。そしてそのまま、車外へ投げた。

しかし、何も起きない。私が落とした缶とライターの落ちた位置に距離があつたのだ。

「未来っ！」

「チエツ、失敗したか、仕方ないわとにかく逃げ切る！」

未来は、ハンドルを右に切つて、屋敷の裏門に向つて最後の力一ブを切った。

キー、ギョルルルツ！

曲ガツタ途端に未来がブレーキを踏み込んだ。

裏門が破壊され、更に潰された門の瓦礫の上に、大八車が数台積み上げてあつた。これで乗用車が突つ切るのは不可能だと、私も未来も思った。

「未来、どうする？」

「表門なら、抜けられる。戻るしかないわ！」

未来は、険しい顔で言った。

「ええっ、あの群衆に飛び込むのオオオ！」

私がそう言った瞬間、未来はギアをバックに切り替えて、ハンドルを切った。

「ちよ、ちよっと！」

「珠緒、黙ってないと舌を噛むわよ！」

次の瞬間、車が庭石に乗って跳ねた。

「あわわわわッ」

屋敷の角を再び曲がり、表門への向うルートを再び直進しようとした。しかし、目の前には、三成の追手が迫っている。

「仕方ない。珠緒、後部座席の足元に白い缶に入ったガス欠用の予備のレギュラーガソリンがあるから、私が車を止めたら、キャップを開けて放り投げて！」

そう言つて、未来はブレーキを踏んだ。

「えっ？」

私は耳を疑った。

車は右九十度に頭を振って停まった。

「珠緒、早く」

未来が急かす。私は未来に向って言った。

「白い缶なら、さつき投げたわよ」

次の瞬間、未来が顔面蒼白になった。

ー 切り札 ー

未来にとつての切り札だった、自動車用のガソリン缶を既に失っていたことは……。私達にとつて、この屋敷から逃げ出す最後のアイテムであった。

それが、既に無い……。

「手を出し尽くしたってことオオオオオ！」

未来は両手で髪の毛を掴んで吠えた。

車は九十度反転、頭は屋敷を向いている。一気に切り替えし、正面強行突破するにも、十分なスペースがない。未来の腕では切り返しに5〜6回かかる。

そして、目の前には敵集団が……。

ガキーンッ！

ーの太刀が、車の天井を叩いた。

「な、なにすんのよ！」

未来が、怒鳴った。同時に、

「この鉄の箱馬を抑えよ！」

と、外で声が響く。

ドスドスドスッ！

次に運転席、運転席後部のドアを突き刺す音がした。

「うがっ！」

刀の一本が、ドアを貫き私の右太股に刺さる。血が滲み出て刀の周りが紅く染まる。外に視線を移すと、ガラス越しに、ニヤリと笑う顔が見えた。

「幽斎様がな、細川の家が第一なそうな」

この武者の一言が、大きく胸に刺さった。

忠興の父、細川幽斎は、由緒ある細川家を護る為に、三成を使つて強行に出たようであつた。

由緒ある家。豊臣方西軍への忠誠。細川の血を護る為に最悪命を奪つてまでも忠興と私の間を割こうとしている。

「こ、これが、戦国……、時代……」

「た、珠緒オオオ！」

未来が振り叫ぶ。

「だ、大丈夫よ……」

私の足の傷は深く無かつた。寧ろ、刀によつて傷つけられる現実と、策略によつて陥れられようとしている精神的ダメージが大きかつた。

「珠緒、しつかり掴まつて！」

未来は、屋敷に向つてアクセルを踏み込んだ。

ドア貫き、私に傷を負わせた刀がバキンツと音を立て折れた。

「どうする気？」

「チマチマ、切り返ししている時間はないわ。屋敷に突っ込んで、座敷内でUターンする。襖破つても車への影響がないから、Uターンして屋敷から再び飛び出したら、一気に表門まで突っ切るわよ！」

「わ、わかつた」

私は、後部から未来の座る運転席にしがみついた。

車は屋敷に向つて進む。庭石が前輪を跳ね上げた。

ガクンツ！

「きゃあッ！」

屋敷の広縁に車の前輪が掛かる。駆動部分の後輪は右側が浮き、左側一本で屋敷に這い上がるうとしている。

未来は、レバーをドライブからローに落として、再びアクセルを踏み込む。

「こ、このう、あ・が・れえ〜！」

未来の願いもむなしくタイヤはスリップする。

そして、車は、電線に絡まった凧のような状態になった。

気がつけば、完全に取り囲まれている。それでも、未来はアクセルを踏み続けた。

「そろそろ、観念されよ」

勝ち誇った表情で、三成が馬上から最後通告をする。

未来がどんなにアクセルを踏み込んでも、車は揺れるだけで精一杯。気がつけば、私の右足は足首まで真っ赤に染まっていた。

「忠興さん……」

私は峰野十字架を握り締め、最後に忠興のことを思った。

「いい加減、諦めろ」

運転席側後部ドアに近い、武者が未来に命令する。

万事休すと思った瞬間、とんでもないことが起きた。

ポーンツと爆音とともに炎が舞い上がる。先程投げたガソリンに車載ライターが火をつけたのだ。

一帯が炎に包まれ、三成の馬が暴れ出す。暴れる馬に煽られて、武者が三人車の後部にぶつかると同時に倒れ込んできた。その勢いで、車の後輪が何かに当たって、車が屋敷内に飛び込む。

「やったー！」

未来の歓喜の声が聞こえ、私はホツとした。

車は屋敷に飛び込み、直ぐに未来が右にハンドルを切る。ウターンして屋敷から飛び出す為に、和室に飛び込んだ瞬間にハンドルを切って、隣の部屋に続く襖を蹴散らした。次の瞬間、紅い炎が私達の車に襲い掛かるように包み込んだ。爆発したガソリンの炎が屋敷に燃え移っていたのだ。

そして次の瞬間、車体がガクンツと沈んだ。

建築基準法もない時代に車を支えるだけの床の強度はなかったのだ。津波のように襲い掛かる炎、もはや逃げ場は無かった。

アクセル踏み込む未来。車は必死になって沈んだ床を這い上がった。

「なんとかなるわ!」

未来が私を勇気づける。

もう一息で車は抜け出そうとしていた。

その時、ミシミシと撓る音がした。

「なにつ!」

私は周囲を見回す。

「なにつて、何が?」

未来が、私に問う。

「何か変な音……」

そう言いかけて、直後に大きな破壊音がして、天井が焼け崩れた。

「きゃあああー!。忠興さあーんっ!」

忠興の名を呼んだ私は、後部座席で倒れるように意識を失った。

「珠緒殿、珠緒殿……」

忠興の声で私は目を覚ました。

「ここは?」

私は身体を起こそうとした。

忠興が、そつと掛け布団に手をあてがい、左右に首を振った。

「無理をなさいますな」

忠興はやさしい瞳で言った。

「全ては終わりました」

「終わった?」

「ええ、もう心配いりませぬ」

「戦が終わったのですか……」

私の問いに忠興は笑って答えた。

「それより、珠緒殿、お加減はいかがかな?」

「ええ、もう大丈夫です」

と、答えた。しかし、何か不安だった。

「それは、安堵いたしました。それでは、ゆっくりと養生なさると良い」

そう言っただけで忠興は立ち上がった。後ろの襖が開くと、忠興は吸い込まれるように、隣の部屋へ移った。

「ちよつと、待って！」

私が声を掛けても、返事をしない。

「忠興さん！」

布団から出て追いかけてよと私は身を起こそうとしたが、動かなかった。

「ま、待って、忠興さん。待ってーッ」

何度も呼んだが、忠興は無言のまま私から離れていった。

私は、叫んだ。

「忠興さんッ！」

そこで、私は再び目を覚ました。

白い天井が見える。辺りをゆっくり見回すとカーテンが掛かっていた。

左側を見ると点滴がゆっくりと落ちている。

「こ、ここは……」

頭をゆっくり廻して右側を見る。窓から明かりが差していた。

人の姿がぼんやりと見えた。

「オハヨ。気分はどお？」

そこに居たのは、紛れもなく未来だった。

「未来ッ！」

私は、ベットにいた。身体を起こそうとしたが、右足に痛みが走り、再び頭を枕に沈めた。

「珠緒、足が痛むんでしょ。無理しないの。起きなくていいから」

未来は、そう言っただけで私のベットの横に置いてある折畳み式の椅子に腰掛けた。

「こ、ここは……」

「中央病院、5階外科病棟」

「中央病院？」

私は、枕元のカードを見た。そこには、確かに外科病棟・五十嵐珠緒様と書いてあった。

「そう、私達は帰ってきたのよ。あの時代から、帰ってきたの」「帰ってきた……」

私は天井に視線を移して考えた。

「ええ、覚えている？高速道路で事故。あの、事故直後の時間に帰っていたの」

「事故直後の……」

私の頭の中は、まだぼんやりしていた。

「夢……」

私は、あらためて未来の顔を見た。

「いいえ、夢じゃない。私達は時間の中を旅してきたのよ」

「そして、戻ってきた……」

「そう、戻ってきた。戻るべき場所にね」

未来は、小さい子に説明するように、ゆっくりと話をしてくれた。

高速道路での事故、その後に起こったこと。細川忠興や明智光秀でのこと。お互いに確かめ合うように、時間の経過を追って話をした。

「私達は何の為に、何をする為に、戦国時代なんて動乱の場に流されたんだらうか……」

私は窓の外を見た。そこには樹齢数百年の時を超えて立っているような、大きな楠の木があった。

「この楠の木は、この大きさになるまで、どれほどの人々を眺めてきたんだらう……」

「珠緒……」

「ただ、今は空しさがあるだけ……」

「空しいの？」

「ゴメンッ」

私は、未来に謝った。未来も同じ時間の中に居た。私だけが不安で苦しい想いをした訳ではない。ただ、心の奥では、細川忠興に対する想いを消し去ることは出来なかった。

未来が、不意に溜め息を吐いた。

「忠興さんが忘れられないって顔をしているわよ」

「えっ？」

「待ってね」

そう言っつて、未来は持参して足元に置いていた手提袋を、自分の膝の上に乗せた。

「そ、そんなことないよ……」

「いいの、いいの。珠緒は隠せないタイプ。直ぐに顔に出るからね」

未来は手提袋から、A4サイズのコピー用紙を数枚出すと、私の枕元に置いた。そして、買ってきたばかりの本を三冊、サイドテーブルに置いて立ち上がった。

「珠緒」

未来の声に、私は視線を未来に移した。

「珠緒、何も言わずに、まあ読んでみて。その紙、昨日インターネットでの情報をアウトプットしたのよ。本はサービス」

「何よ？」

「まあ、いいから。私、珠緒の家に電話してくるわ。意識戻ったってね。あっ、それと、売店でなんか飲み物でもかっってくる。珠緒は何か飲む？」

「ありがと。それじゃあ、オレンジ」

「わかった。じゃあ、チヨット行ってくるね」

未来は、自分の出した資料の説明を一切せず、病室から出ていった。

私は、意味深な言葉を残して退室した未来を見送ってから、印刷されたA4用紙を手にとってみた。それぞれの、紙に赤いマーカーが引いてある

「忠興さんに関する事柄だわ……」

そこには、忠興の人生の年表があつた。  
「ええっ！」

その資料によれば、細川忠興には既に妻が居たのだ。  
そんなはずはない。別蘭には本能寺の変の記述があり、織田信長が明智光秀の謀反にあると書かれている。この事件以前に、忠興に妻がいるとすれば、私達が知らないはずが無かつた。

2枚目、3枚目と読んだ。そして、4枚目で私の手が止まつた。  
「こ、これはっ?!」

細川忠興の妻は、明智光秀の娘であつた。

「これは、一体……」

私の胸は鳴り出し、軽いめまいを感じながらも、気を取り直して続きを読んだ。

そして、未来の記したマーカーが数行にわたって記されている項目があつた。

細川ガラシャ。

明智光秀の三女として出生する。名前を「玉」という。細川忠興の妻として嫁ぐが、本能寺の変によつて、明智一族が処刑される。しかし、ガラシャは細川忠興の計らいにより人里は馴れた山中に幽閉され、処刑から逃れる。数年後、幽閉を解かれ細川家に帰るが、家内の確執により、信仰禁止をしりつつキリスト教に入信。洗礼を受けガラシャの名を与えられる。夫・忠興出兵中に豊臣方の命令を拒み、屋敷に火を放つて命を絶つ。

私は、肩から力が抜け、文章を読む為に上げていた腕が、布団の上に落ちた。

病室のドアの脇に未来が立っていた。

「珠緒」

「わ、私は……」

私は、半信半疑だったが、未来の次の言葉で我に帰る。

「そうよ。珠緒は、歴史的に存在したのよ。玉〓珠緒、ガラシャ〓五十嵐。そして、細川ガラシャは、キリスト教信者」

未来は、歩きながら、そう説明して椅子に座った。

「わたしが、細川ガラシャ……」

「そう、少なくとも、あなたは、歴史的に細川忠興の妻として存在したのよ」

「わたしが、忠興さんの妻……」

何だか嬉しかった。細川忠興の妻であつたことが、とても嬉しかった。

「よかった」

未来が呟いた。

「えっ？」

「正直、迷つたの。このことを知らせて、珠緒が辛い思いをするんじゃないかってね」

未来は微笑んだ。

私は首を左右に振った。

「いいえ、教えてくれて、ありがとう」

「大した事じゃないわよ」

未来は、ウインクで答えた。

「ああ、珠緒。珠緒のお母さん、すぐに病院に来るって。まあ、しばらくは病院でゆっくりして早く身体直しなさいよ。卒業式も終わったことだし、丁度いいじゃない。それじゃね」

そう言つて、未来は袋から、ジューズを一本出して、袖机の上に置くのと立ち上がった。

「えっ、もう行くの？」

「これから、車を買いにね。今度は新車よ。し・ん・しゃ！」

「新車？」

「むふっ。廃車になつた車のトランクの中から、茶碗が出てきてね。それを親戚の骨董屋に見てもらつたら、大層な値段で売れてね。前のローン返して新車を買えるほど残つたのよ」

「なんで、また……」

「忠興さんからの贈り物よ。ちゃんと、手紙も入ってた」

「何ですって。それを、未来の独断で売っちゃったの？」

私は驚いた。

「まあね。私が売ったのは千利休の愛用品の茶碗。それで、珠緒の枕元にあるのが、忠興さんが作ったもの」

未来に、そう言われて枕元に手をやると、確かに茶碗があった。

「未来……」

「それじゃあね。珠緒！」

「ん？」

「退院したら、今度は新車でどっかいこうか？」

「もう、コリゴリよ！」

私は笑顔で答えた。

「じゃあね」

そう言つて、未来は病室を後にする。わたしは、軽く手を振つてこたえた。

茶碗を手にとろうとして、一緒にメモが置いてあるのに木が付いた。それは、忠興の手紙を現代用語にして書き移したものだ。おそらく、骨董屋の主人の字だろう。未来と違って達筆だった。

珠緒殿、そなたに出逢つてしばらくして、本能寺の騒ぎの後、忽然と姿を消された。便りも無く二年後に再会したとき、気がつきました。今度、出兵致しますが、必ず戻りますので、もう何処にも行かないで欲しい。私が最も大切にしている自作の茶碗をお預けます。その茶碗を私と思つて、再会できるその日迄持つていて下さい。

珠緒 殿

細 川 忠 興

私は、忠興からの手紙を枕元に置くと茶碗を手にした。しばらく見つめて、茶碗を頬に当て瞳を閉じた。その時に、涙が一滴零れた。

窓際のレースのカーテンが風に吹かれて、ふわふわと浮いている。

その窓の外で、街の時計棟の鐘が、鳴り始めた。

時計棟の鐘は、その音を耳にする全ての人々に平等に鳴り響いていた。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0147a/>

---

卒業旅行戦国記 ー珠緒の恋ー

2008年11月7日06時32分発行